

# 多摩川源流部における支流・沢・尾根等の名称と その由来に関する調査・研究

1999年

中村文明  
多摩川源流観察会会長

# 目 次

1. 調査・研究の目的 .....	1
2. 調査対象と調査方法 .....	3
(1) 調査対象について .....	3
(2) 地名の聞き取りと調査方法 .....	4
3. 多摩川源流部の概要 .....	6
(1) 源流部の渓谷 .....	6
(2) 源流部の山々 .....	7
4. 地名の発掘・調査報告 .....	9
(1) はじめに .....	9
(2) 丹波渓谷実踏調査 .....	10
(3) 後山川実踏調査 .....	21
(4) 一ノ瀬川・竜喰谷・大常木谷実踏調査 .....	23
一ノ瀬渓谷実踏調査 .....	23
竜喰谷実踏調査 .....	24
大常木谷実踏調査 .....	28
(5) 泉水谷・小室川・大黒茂谷実踏調査 .....	30
泉水谷実踏調査 .....	30
大黒茂谷実踏調査 .....	35
5. 定点観察に取り組んで .....	36
6. 多摩川源流絵図の作成について .....	37
7. シュラ作りについて .....	37
8. 謝 辞 .....	38
資 料 .....	39



# 多摩川源流部における支流・沢・尾根等の 名称とその由来に関する調査・研究

1999年 3 月

多摩川源流観察会

会長 中村 文 明

## 1. 調査・研究の目的 …… 記録・保存・継承

多摩川源流部は、首都圏に住む人々の水源涵養林として今から百年前、明治34年に東京都の管理下におかれ、澄みきった水を安定的に供給する水源林としての役割と任務を担われてきた。天然林と人工林の混ざり合った日本を代表する水源林に成長し、近年その存在価値を益々高めつつある。大都会に隣接しながら、開発の手から逃れ、ありのままの大自然が広範に残された貴重な地域でもある。

多摩川源流部の雄大でかけがえのない自然に魅せられた人々が多い。現代山岳文学の発展に大きく貢献した田部重治や小暮理太郎らは、明治の終わりから奥秩父の魅力に惹かれ、明治44年以来幾度となく足を運び、紀行文を綴っている。特に田部重治は、奥秩父の溪谷美と森林の豊かさに深く愛着を感じている。明治45年、丹波山から大菩薩、柳沢峠に向かう途中遭難し、大黒茂谷に迷い込み、寒さと空腹のため気絶し、友人と地元の人々の炭焼き衆に一命を助けられた経験もあり、奥秩父に特別の感情と思い出を持ち続けた一人である。

「日本百名山」で有名な深田久弥は、その著書の中で、奥秩父連嶺を「その延長と高度からいって、我が国で日本アルプスと八ヶ岳連峰を除けば、他に例を見ない大山脈である。」と紹介している。奥秩父連嶺は、雲取山から、飛竜山、大常木山、竜喰山、唐松尾山、笠取山、破風山、木賊山、甲武信ヶ岳、国師ヶ岳、北奥千丈ヶ岳を経て金峰山までのびた大山脈で、その山脈の南西部に多摩川源流部は位置している。首都圏の命を支える水源涵養林が日本有数の山脈に跨って、大自然の真只中に存在しているのである。

ところで、多摩川源流部は、首都圏の水ガメとして重要な使命を果たしながらも、その大部分は山梨県に所在する。東京都に管理されていることもあり、山梨県民には馴染みが薄く、省みられることは少なかった。しかも、多摩川源流部の自然は、雄大な山々・深くて鬱そうとした森林・急峻な谷からなっており、人々の進入を拒んできた。

我々はこの知られざる多摩川源流部のありのままの自然に着目し、源流部の支流・沢・尾根・滝・淵などの名称発掘と、その由来の調査・研究を通して、山梨県民や多摩川流域の住民に、多摩川源流部への関心を深め、ひいては、環境保全や自然保護の機運の醸成に役立ちたいと願った。現在、多摩川源流部では、急速な過疎化が進行しており、源流部の自然に精通する方々が激減している。源流部に生きてきた人々の歴史や自然に対する愛着や畏敬の念を次代に継承することは、源流に思いを寄せる我々の責務だと考え、この調査・研究に取り組んできた。

## 2. 調査対象と調査方法

### (1) 調査対象について

先ず、源流部の沢や尾根に関する資料を集めてみたがめぼしいものは何もなかった。困り果てたところに塩山市の商工観光課から、都水道局水源管理事務所の作成した、水源林管理地図の提供があった。見て驚いた。そこには水源林管理のための巡視道が、広大な源流部に網の目のように張り巡らされており、水源林管理上に必要な沢や尾根には詳細な地名が書き込まれていた。

例えば、塩山市一ノ瀬高橋の作場平から多摩川の源頭である水干にいたる一ノ瀬川本谷についてみると、ズミオ沢、ズミオ尾根、サクバ尾根、ミセギ沢、クロブチ尾根、与平沢、与平尾根、ムササビ沢、カジカ沢、一休坂尾根、スモウトリ沢、スモウトリ尾根、ウタノ沢、ウタノ尾根、ミズヒ沢、ミズヒ尾根と連なって作場平から水干に至る地名を確認できる。

また、泉水谷についてみるとツツレ沢、ツツレ尾根、岩小屋尾根、不動沢、不動尾根、クズバ尾根、ハウロク沢、桐ノ木尾根、桐ノ木沢、寺屋敷尾根、タテイワ尾根、タテイワ沢、アカッポイ尾根、清右エ門尾根、耕作場尾根、耕作場沢、水呑場沢、水呑場尾根、松尾根、エンマゴテン尾根、学校尾根、学校向尾根、大黒茂尾根などが連なっている。どの地域も見事なまでにそれぞれの沢や尾根に名前が付けられている。百年に及ぶ水源林整備事業の取り組みとその管理上の必要性から、伝承記録されてきたものであろう。21,000ヘクタールに及ぶ水源林を隈無く歩き、その沢と尾根を走破する仕事は、なかなか困難であるが、それぞれの沢や尾根を実際に歩き、その地名の由来を辿ることは、大いに価値ある仕事だと思う。将来、水源林管理事務所が中心となり、源流に関心のある人々と共同してこうした調査・研究が企画され、実行されることを期待している。

そこで、我々の出来る仕事は何かをいろいろ考えた。多摩川源流を流れる後山川、一ノ瀬川、柳沢川、泉水谷、丹波川とその支流の滝や淵などの地名を調べてみると、克明に調査し正確に記録した地図や文献は少なかった。溪流釣りや沢登りに関する書籍には、利用者の利便に応じて、詳しい地形が記載されたり、過去の釣果の話が紹介されたりしていたが、滝や淵の正確な地名は記載されていなかった。今、源流部では過疎化が進み、地元精通者が減少している。この時期に、源流部の滝や淵の地名発掘とその由来調査の仕事を怠れば、二度と浮かばれない名称も出てくるだろう考え、

多摩川源流部における地名発掘とその由来に関する調査を、この間地道に取り組んできた。

## (2) 地名の聞き取りと調査方法

地名の発掘と地名の確定の仕事をいかに正確に遂行するか、いろいろ考えたが、一番大切なことは、地元で通用している、誰も異議を挟まない地名を先ず探り当てること、そしてその地名の場所を地元の精通者と共に確認することであろう。特に渓谷部は、無数の滝と淵が連なり、類似した地形がいくつもある。それ故、油断すると聞き取った地名と、実際の場所とが異なることがしばしばある。

また、聞き取った地名に、どの漢字を当てるのかも難しい。実はこんな逸話がある。多摩川源流部で最も人間の進入を拒む谷、それは大常木谷である。そこに「セングノ滝」と呼ばれる滝がある。地元の方に聞いてもセングに当たる漢字は分からなかった。水源林管理事務所の作成した「管理地図」には、その滝の名は「千苦」が当てられていた。私たちも、この立場を支持していた。と言うのも、実際にこの滝に出会うには、「ゴケンノ滝」の手前のカラ滝沢を這うようにして登り、道なき道を悪戦苦闘し、それこそ死ぬような苦勞、千の苦しみを味わうことなしにはたどり着くことができないのだ。体験者なら誰でも「千苦ノ滝」の地名に同意してしまう。

ところが、今回の調査活動の中で、新しい事実が判明した。丹波山村の守岡只さんによると、自分が幼かった頃、大常木谷から材木の切り出しがなされていた。谷に沿って木を流すわけだが、一番の難所が、落差25mあるセングの滝だった。木を痛めないために、修羅（しゅら）を張る。谷が深いだけに沢山の人手が必要だった。大勢の加勢が要ることから千人の工（たくみ）を当てて「千工の滝」と呼ばれたという。

地名に正確な漢字を当てることの困難さを窺わせる例だが、地名のルーツを丹念に探る仕事は、なかなか骨が折れる作業であることだけは確かだ。なにしろ、あの広大な源流部の支流や谷、淵を訪ねて歩くだけでも大変なことだ。地名の前に、源流部の地形を知らなければならない。どの谷だって簡単に辿れるところはない。実際に足を踏み入れると足がすくむ地形の連続だ。通行不能な絶壁、深く刻まれた渓谷、青々とした不気味な淵が至る所に転がっている。かすかな踏み跡や獣道を頼りに一步一步源流の胎内に進入する。一步一步足を踏み外せば奈落の底に突き落とされる。源流との命を賭けた真剣勝負に挑む。そんな決意と勇気がなければ出来ない仕事だ。物見遊山の気楽な気持ちでいれば、たちまち足下をすくわれる。だが、深く進入すればする

ほど未知の世界が広がり、新しい発見と出会いがあり、さらなる好奇心が全身に満ちてくる。先人達の源流への思い入れの深さの一端に触れたい思いに駆られる。

豊かな自然に恵まれた源流、そこに生きた人々の自然への思いは深く、それは源流の滝や淵、尾根などの名称にも色濃く反映している。それらの名称を辿ることは、人間の自然に対する愛着、感謝、崇拜、畏敬の念を確認する旅になるものと期待している。

いずれにしろ、正確さを期すために、調査方法としては

- (1) 徹底した現地主義を採用する。
- (2) 現地で確かめた上に、地元精通者に確認してもらう。
- (3) 不正確、曖昧なものは採用しない。

の3点を基本に、多摩川源流部の地名発掘・確認の作業を遂行することにした。なお、源流部の調査を開始したのは、1994年（平成6年）7月18日である。それ以降の活動の全体をまとめて報告したい。

### 3. 多摩川源流部の概要

#### (1) 源流部の渓谷

源流部には、日原川、後山川、一ノ瀬川、丹波川、柳沢川、泉水谷、小菅川等の川がある。日原を除いた全ての川が山梨県にあり、その川の水は沢から支流、本流に集められ、奥多摩湖に注ぎ込む。今回調査の対象にしたのは、後山川、一ノ瀬川、丹波川、柳沢川、泉水谷の5カ所である。

【後山川】は、三条沢から始まり、権現谷、有名な青岩鍾乳洞のある青岩谷、御岳沢、塩沢、片倉谷などが注ぎ込み、お祭で丹波川と合流する。

【一ノ瀬川】は、多摩川の源頭である水干から生まれいでて、水干沢、一ノ瀬川本谷、一ノ瀬川と名前を変え有名なオイラン淵の下流で柳沢川と合流する。一ノ瀬川本谷に黒エンジュ沢、中島川、中川、アサヒ谷、ミノワ沢等が注ぎ込み、一ノ瀬川に、竜喰谷、大常木谷が合流する。

【柳沢川】は、青梅街道沿いに流れ下る。柳沢峠から大菩薩に向かう途中に六本木峠があり、2つの峠の間から柳沢川の源頭と思われる花ノ木沢が生まれるが、梅ノ木沢や藤ノ木沢、長尾沢、板橋沢等無数の沢を集め、途中で高橋川と滝沢に出会い、一ノ瀬川と合流し、丹波川と名前を変える。

【丹波川】は、多摩川の本流として堂々たる雄姿で流れ下る。大小無数の支流や谷、沢が合流し、丹波山村を東西に貫流する。黒川金山で有名な黒川谷、泉水谷、ムジナ沢、小常木谷、クマゲラ沢、不動滝沢、貝沢川、マリコ川、ジゴク谷、後山川などを飲み込んで、奥多摩湖に到着する。

【泉水谷】は、大菩薩嶺を源頭とする。支流の小室川の源頭は大菩薩の妙見の頭である。泉水谷には、牛首谷、大黒茂谷、不動滝沢、ホウロク沢等が注ぎ込み、小室川は、カナバ沢から出発し、井戸川、ヒカゲ井戸川、ナガ沢、サカリ山沢、ヒノキオ沢などが注ぎ込む。

## (2) 源流部の山々

奥秩父山嶺は、東京都、山梨県、埼玉県、長野県に跨る大山脈である。多摩川源流部は、その山脈の南西部に位置する。調査対象とした溪谷の源頭部にある山々を覗いておきたい。

後山川は、源流部屈指の溪谷美と森林美を相そなえたゾーンである。川の東西と正面に高い山々が連なる。7個の巨石を頂く七ツ石山(1,757m)、東京の最高峰である雲取山(2,018m)、起伏の激しい三ツ山(1,949m)、雲取山から狼平、三ツ山を越えると飛竜山(2,069m)、飛竜から南に尾根を下ると前飛竜山(1,957m)、サオラ峠を過ぎると丹波天平(タバデンデーロ・1,343m)等の峻しい峰々に囲まれている。残念なことは、戦後にお金になる銘木が伐採されたことだ。都の財政難や日本の復興を名目に、数百年を経た巨木達が無惨にも切り倒され、そのための林道が敷設された。その林道は三条谷まで延びる予定であったが、三条小屋の木下猛一氏の反対で取りやめになり、三条谷周辺には原生林が保全されたという。

一ノ瀬川は、多摩川源流部で最も源頭に位置する。多摩川は、笠取山の南懐にある水干に最初の一滴を印す。その地はいわば多摩川の誕生の地・メッカなのである。大きな花崗岩から滴る一滴一滴が、沢をなし、無数の沢が集まって谷に流れ下り、徐々に水流を深め川幅を広げながら、138kmを旅して東京湾に注ぐ。一ノ瀬川には、竜喰谷と大常木谷が合流する。竜喰には、大小13の滝が連なり、大常木は33の滝が神秘的な姿を現す。特に大常木は、地元の方が口を揃えて「大常木には決して一人で行くな」と忠告するほど、急峻な谷が連続する。人間の進入を拒み、人間を遠ざけている谷なのだ。

その一ノ瀬川は、進入部こそ両岸が峻しい山に囲まれているが、中流からは西は、高い山々、東は、なだらかな山と大変対照的な姿を見せる。西側の山岳は岩岳(1,520m)から始まり、前飛竜山、飛竜山、大常木山(1,962m)、竜喰山(2,012m)、将監峠(1,791m)、御殿岩(2,075m)、唐松尾山(2,109m)、黒エンジュノ頭(2,015m)、笠取山(1,953m)と2千m級の山々が続く。唐松尾山は大変特徴的な山容をしている。山頂が数百に渡ってテーブル状の形を成している。一ノ瀬川の東側は、藤尾山(1,606m)、犬切峠(1,378m)、石保戸山(1,673m)が連なり、尾根筋を水源林の防火帯が走っている。

柳沢川は花ノ木沢から流れ下り、オイラン淵下流で一ノ瀬川に合流し、丹波川と名前を変える。オイラン淵から2kmは、峻しい溪谷が続くが、その上流は高橋川を含

め比較的穏やかな傾斜面を形作る。周囲の山は、北東側から藤尾山、犬切峠、石保戸山、白沢峠（1,583m）、倉掛山（1,777m）、板橋峠（1,596m）、三窪高原（1,613m）、柳沢峠（1,472m）、六本木峠（1,612m）、横手山峠（1,558m）、黒川鶏冠山（1,710m）などが東から南へと連なる。黒川鶏冠山には山頂に素晴らしい景観を楽しめる展望台（岩山）があるが、そこから見渡すと源流部に大きな扇状の窪地が形成されていることが読みとれる。

泉水谷は、大菩薩嶺を源頭に持つ。大菩薩北尾根を挟む格好で北側を泉水谷が、南側を小室川が流れ岩小屋付近で合流する。泉水谷の北側は黒川鶏冠山に面している。小室川は、大菩薩妙見ノ頭（1,978m）から始まり、その南側は大菩薩峠（1,897m）フルコンバ小屋跡（1,651m）、サカリ山（1,542m）、砥沢山（1,458m）と続く。この一帯は三条谷と同様に深くて豊かな森に恵まれている。泉水谷小屋跡周辺や大黒茂谷では、明治時代に岐阜県から入植した人々によって水源林財政の確保のために炭焼きが行われた。あまりの悪条件のために採算がとれず失敗に終わるが、今も学校尾根と呼ばれる地名が残るなど当時が偲ばれる。

丹波川は、オイラン淵下流から奥多摩湖まで延びている。丹波山村を東から西へ流れ下る。北側の山岳は岩岳から始まり、竿裏峠（1,414m）、丹波山（1,343m）、小祭（1,054m）と続く。南側は、黒川鶏冠山に始まり、芦沢山（1,272m）、高尾天平（タカオデンデーロ）、中指山（1,315m）、今川峠（946m）、大丹波峠（925m）、鹿倉山（1,288m）と連なる。丹波川は、それぞれの山から延びた尾根を深く刻み込み、自由自在に蛇行を繰り返しながら、随所に絶壁を設けて景勝地を配置し、無数の滝や淵を形作りながら悠々と流れていく。



## 4. 地名の発掘・調査報告

### (1) はじめに

1994年（平成6年）8月7日に、多摩川流域協議会、河川環境管理財団などが中心になって塩山市一ノ瀬高橋地区の落合にある神金第二小学校で「多摩川源流サミット」が開催された。パネリストは三枝塩山市長、守屋丹波山村長、加藤小菅村長、財団法人河川環境管理財団の岩井理事長、鈴木世田谷区都市整備部長の5人だった。そこでは、「多摩川上下流を考える」「水の環境・人の交流」をテーマに、「上流の役割・下流の役割」が活発に議論された。そのサミットに川崎市の「多摩川と語る会」の田中喜美子代表の姿があり、その田中代表から多摩川と語り多摩川から学び多摩川と共に生きていきたいと言う感動的な話がなされた。そのために、河口から源流までの138キロを歩く計画だと知らされた。

源流に住む我々は、源流部で何をしてきたのか、源流部で何が出来るのか、源流部での役割を何一つ果たしてこなかった事に対して、深い自責の念に駆られた。今源流部では過疎化が急速に進行している。清流を守るためには、山を守る、森を守ることが不可欠である。山火事や環境の汚れを防ぎ、土砂災害や人工林の管理など人手はたくさん要る。しかし、過疎化は進む。山梨県でありながら、東京都の所有する水源林に覆われている。その水源の恩恵は首都圏の人々が受ける。大多数の山梨県民は無関心にならざるをえない条件がそろっている。この馴染みの薄い多摩川源流部に、塩山市民や山梨県民の関心と興味を喚起したい、また、多摩川流域の方々へ源流にしっかりと目を向けて欲しい。少しでもいいから、地元の方々のお手伝いがしたいと願った。

そのためには、多摩川源流部を自分の目と耳と足で直接体験しようと、多摩川源流観察会を結成し、竜喰谷を手始めに実踏調査を開始した。そこには、数え切れないほどの淵や瀬、滝が連続し、我々はその魅力に取り付かれた。その一つ一つの地名やその由来を辿る旅はこうして始まった。

地名の調査には、地元の沢山の方々へ協力いただいた。一ノ瀬川関係では、平山肇さん、曾根良一さん、田辺加藤さん、田辺静さん、丹波川関係では、守岡只さん、小林永治さん、田中助夫さん、柳沢川関係では田辺武さん、泉水谷関係では、田中助夫さん、木下さん、岡部さん、後山川関係では小林永治さん、木下登さんなどに、本当にお世話になった。

## (2) 丹波溪谷実踏調査

昨年（98年6月）、調査活動に行き詰まり、困り果てていたときに、丹波山村の川村利一教育長に調査の趣旨を伝え、地元の方の紹介を依頼した。川村教育長は、「いい人は思い浮かばないが心に留めておきます。」との返答であった。FAX番号を知らせておいたが、3日経っても5日経っても連絡はなかった。10日ぐらいして、嬉しい返答が舞い込んできた。「丹波川の淵等の件ですが、丹波在住の守岡只さんを紹介いたします。守岡只さんには了解を頂いております。」との文面に電話番号が書き込まれていた。

早速電話で予約を取り、家内を連れてインタビューに出かけた。守岡さんは大正2年（1913年）9月20日生まれ、85歳ながら、背筋のしゃんとした折り目正しい、記憶力のしっかりした方だった。守岡さんは若い頃、漁師として子供達を4年間育てた経験の持ち主で、丹波山の山河を知り尽くしておられた。奥多摩湖からオイラン淵までの丹波溪谷を自分の庭のように駆けめぐって、仕事をされていた。50年、60年前の体験を具体的に生々しく語る守岡さんは生き生きとしていた。40を越える淵や滝の名前が淀みなく口からこぼれてきた。しかし、とても謙虚で、奥多摩湖から保之瀬までの丹波川下流部分は、地元の呼び名でいくほうがいとアドバイスされた。

そこで、再度川村教育長に伺い、小林永治さんを紹介していただいた。小林さんは大正13年生まれ、74歳の見ると、優しく誠実そのものの方だった。小林さんには、インタビューで判明した地名の現場に、案内していただいた。去年は、夏から秋にかけて、大雨続きで、現地調査が延び延びになった。12月3日、吐く息も白くなった時期にも関わらず、小林さんは、快く案内を引き受けてくださった。小林さんのインタビューを重ねている最中に悲報が飛び込んできた。守岡只さんが亡くなられた。びっくりして言葉がなかった。もっと詳しく、もっと沢山のことを聞きたかった。すぐに出向いて仏壇にお線香をあげた。奥さんが、「主人は知っていたことを全部中村さんに話してから逝ったんだよね。」と話された。目頭が熱くなった。守岡さんに感謝し心から冥福を祈った。

以下、奥多摩湖から塩山市落合までの64に及ぶ淵や滝を紹介する。リュウゴンの淵、ドンリュウの淵は、奥多摩湖に水没し、花水淵は、土砂に埋もれている。いずれも今は存在しないが、人々の記憶の中にしっかりと生き続けているのでとりあげた。

（資料-1）

## 1 龍岨淵

リュウゴンブチ。奥多摩湖に水没して今はないが、所畑の近くに丹波川につきだした、地元で「岨」と呼ばれる場所があった。その下に、物凄い渦を巻く淵があり眺めているだけで引き込まれそうな不気味な淵だったという。この淵にまつわる不思議な伝説は、今も語り継がれている。

## 2 呑竜淵

ドンリュウブチという。丹波川が後山川と合流する100メートルぐらい下流にあり、深くて大きな淵だった。昔は近くに呑竜権現社があり、平将門が、追っ手を逃れてここでくつろぎ、三日三晩、地域の人々も巻き込んで「飲めや踊れや」の盛大な酒宴を繰り広げた。ここでお祭り騒ぎに明け暮れたことから、今でもこの地は「お祭」と呼ばれている。この淵は、呑竜権現社の近くにあり、竜を呑み込むほどの不気味さが漂っていた。

## 3 猫ダル尻淵

後山川出合いから、300～400メートル上流にある。親川地内の小さな沢をネコダルと呼ぶ。その沢の尻にある淵。流れは穏やかで丸い。兩岸から岩盤が突き出している。

## 4 清高まわし

戦後間もなく、トラックで木炭を運ぶ途中に交通事故で、車が青梅街道から転落し、深い淵に沈んだ。運転手の名前をとり地元で「清高まわし」と呼ばれている。親川大尾根下の大淵とも言う。激しい流れが、左岸の岩にぶつかり、弧を描くように流れ下る。深くて青々とした大きな淵である。

## 5 白淵

淵の上流を淵頭という。この淵は淵頭が早瀬になっており、その瀬の右岸に岩が突き出している。その岩が川に洗われて、丸い形の白に変身した。その白の形の岩を目印にしたことから、白淵と呼ばれている。

## 6 泡淵

淵頭の兩岸に岩が迫り出し、流れをせき止めるように滝を形作る。激しく渦巻いた淵からは、真っ白い泡が、数メートルの帯状になって延びる。流れが速く水量が豊富で水深が深い。紺碧の淵に漂う泡の舞は見事である。

## 7 赤石の滝

昔は4メートルを超える落差のある滝だったと言うが、今は2メートルぐらいで、魚が遡上するようになったという。滝の周りに赤い石が点在する。この滝の正面に赤い石が居座っている。滝全体が、大きな石に覆われた景観の美しい滝だ。

## 8 馬の背淵

左岸には、近寄りがたい岩壁が立ちはだかり、右岸にフィヨルドのように切り込んだ岩が突き出し、その形が馬の背に似ている。淵頭には傾斜のきつい早瀬が配置され、馬の背のあたりで、最も幅が狭くなり流れもきつい。すぐに立ち去るのが惜しい淵だ。

## 9 クロオ久保淵

クロオ久保と呼ぶ場所があり、そこから流れる小さな沢の尻に位置している。上下に二つの淵が連なり、真ん中に大きな石が転がっている。

## 10 猿はね淵

溪谷をまたぐように、等間隔に3つの石が並ぶ。左岸には その石に連なるように上に向かって3つの石が並ぶ。すばしこい猿ならその石づたいに飛び跳ねて渡りそうだ。度重なる洪水にもかかわらず、水流の激しい部署でがっちりと自分の位置を守り続けていることに感心する。

## 11 サス沢出会淵

右岸からサス沢が流れ込んでくる。その出合いにこの淵はある。兩岸に大きな石がどっしりと腰を据えている。流れは比較的穏やかである。

## 12 天狗島

川底から絶壁が40～50メートル天に伸びる。巨岩の上部が不思議な形を成している。波を打ってあたかも天狗の鼻のように見える。どうして「島」と呼ぶのかは定かでない。その天狗島の足元にいい淵がある。

## 13 猿すべり淵

右岸に大きな猿すべりの木があって、いい目印になっていた。以前は深い淵だったが、埋もれて今は浅い。

## 14 山の神の下淵

右にカーブした流れが正面の大きな岩にぶつかり、絶えず川底を剔るように流れ下る。淵の色は青々として深く、はまり込んだら出て来れなくなりそうだ。左岸の上に山の神が祭られている。

## 15 エゴの淵

早瀬が左から右へ流れ下り、正面の岩壁に衝突する。長い年月を掛けて、そこを深く剔る。右岸の数メートル下に同じように剔られた跡がある。流れの変化で今の淵が出来たわけだ。右岸の岩壁は50～60メートル続く。剔ることがエゴに訛ったものだろう。

## 16 淵のう

巾広の早瀬が右にカーブして、岩壁にぶつかる。岩壁の傾斜は緩い。流れも穏やかで淵は深くて大きい。さほど不気味さを感じない。何故「淵のう」と呼ぶのか、不明である。

## 17 花水淵

保之瀬地区のしもにこんこんと清水が湧いていた。夏には、地元の方が、その冷たい水を生活に利用した。子供達は、そこで泳いだり、魚を捕ったりして遊んだ。湧きあがる湧水の見事さと綺麗さに、地元の人はこちらを花水淵と呼んだ。今は埋もれている。

## 18 上保之瀬橋淵

橋の下にそれほど深くはないが、大きな淵がある。左岸の方には河原があり、穏やかな流れである。

## 19 おんまわしの淵

橋の数十メートル上流にある。早瀬が石にぶつかり左に大きく巻いて流れる。流れを対岸に回すことからこのように呼ばれた。

## 20 暗（くらみ）

兩岸に岩が迫ってきて、光の進入が弱く、周囲が暗い。淵頭から淵尻までが長く、岩壁が70メートル以上続く。夏でも涼しい風が吹き抜ける。淵の規模は丹波溪谷一だ。淵頭は、右岸が岩壁になっており、流れは激しく対岸に渡れない。

## 21 下ゲンチョン淵

昔からこのように呼ばれている。何故、ゲンチョンと呼ばれているのかは今なお分からない。二つの淵は連続しているが、下の淵の方は淵頭は早瀬だが、深くゆっくり流れることからナガトロと呼ばれる。

## 22 ゲンチョン淵

右岸から岩が迫り出し、流れは泡立ちながら激しく下る。右に巻き込んだ流れは、右岸を大きく剔る。丸い形の深くて大きな淵だ。

## 23 熊沢尻

熊沢山から流れる沢の流れ込みに位置している。淵頭に大きな岩があり、流れは、岩にぶつかり大きく弧を描いて流れる。昔熊沢の木を切り出して、この淵に集めたことから木入淵とも呼ばれる。

## 24 小室大淵

この付近を小室と呼ぶ。そのためコムロ淵と呼ばれている。丸くて長い淵で、良く魚が釣れる。落ち込み、中間、淵尻といくつもポイントがある。右岸は傾斜の緩い岩盤が続く。

## 25 貝久保尻淵

甲武キャンプ場の近くにある。左岸の斜面一帯を貝久保といい、その沢尻にある。淵頭が早瀬になり、流れは左岸の岩壁にぶつかり、水流は川底を深く巻き、右にカーブしながら流れ下る。

## 26 ウバノフトコロ

どうしてこのように呼ばれているのか不明であったが今回の調査で由来が分かる。淵の上に「ウバ」と呼ばれるところがある。そこに「やまなしの木」があり、「ウバのやまなし」と言えば、保之瀬では良く知られていた。「ウバの淵」とも言われる。フトコロとは、左岸に深く剔られたところがいくつかあり、岩に囲まれているのでフトコロと言われた。流れは早瀬が岩盤に激しくぶつかり、左に大きく巻いている。春に訪れると、ミツバツツジの花がとても綺麗だ。

## 27 笹出淵

淵の左岸の斜面に笹があり、そう呼ばれた。右岸は岩場が続く。春になると右岸の岩にはミツバツツジ、シロツツジが咲く。また岩には、岩芝がはえているが盗掘が続いている。

## 28 松木淵

マリコ川との合流地点の上流にある。左岸に松の木があった。特に洪水の後には赤松の若木がたくさん出たという。流れは左岸の岩にぶつかり、右に巻きながら下る。

## 29 大 淵

押垣外(おしがいど)の子供達が良く泳ぎに来る淵だった。あまり深くはないが大きくて綺麗な淵だったという。この間の洪水で流れが変わり、今は昔の面影はない。

## 30 おっ立ち石

流れの真ん中に大きな石が立っている。その石の両側を巻いた流れが合流して、淵を作る。洪水のたびに少し形を変える。右岸の岩壁の柔らかい部分を押し流し、その先端が残って、川の真ん中に残った。今もあるが、やはり洪水のため土砂が流れ込み、左岸は浅くなっている。

### 31 コウゾウ淵

淵のすぐ上に明治時代にコウゾウさんの家があった。そのことから名付けられた。この淵は、洪水の直撃を受けやすい箇所であり、大雨が降ると土砂の影響を受け、浅くなったり、深くなったりする。今は、護岸工事が進んでいる。

### 32 湯 淵

左岸の岩の間から、鉱泉が湧きだしている。時期によっては湯の花で岩場が真っ白になる。昔はその湯を共同で汲んでいたという。淵頭は早瀬で、大きな淵。

### 33 水神淵

水神さんが近くに祭られている。淵は深くて大きなものだったという。現在護岸工事が進んでいる。温泉場のすぐ下流。

### 34 大明神下

左岸に大明神が祭られている。右岸は岩壁である。今は、護岸工事で姿を変えている。

### 35 ゲンゾウ淵

大正時代にゲンゾウと言う人が夜中に家を飛びだして淵に落ちて亡くなった。それ以前は、高尾水の淵と呼ばれていた。淵は深く立派だったが、護岸工事でなくなった。

### 36 桜 淵

淵の左岸に大きな山桜がある。その桜が咲くと「そろそろイモまきだね」と、地元ではあいさつをかわす。流れは、左岸の岩にぶつかり、右に大きくカーブしている。深くて大きな淵。

### 37 寺の下

丹波山宝蔵寺というお寺の下にある淵。流れが左岸の岩にぶつかり、小さく右に巻いて流れている。現在、護岸工事が進み昔の面影は失われつつある。



### 38 茶釜淵

奥秋地区に面した場所にあり、清水の湧く綺麗な淵。夏になると奥秋の子供達の水遊びの格好の場になる。大きな釜の形からそう呼ばれている。

### 39 立下の淵

右岸に高さ30メートルを越える一枚岩があり、そこに深くて大きな淵がある。流れは岩にぶつかり、川底を深く剔る。

### 40 与一淵

大きな淵ではないが、由来は分らない。岩の先端に穴があり、そこから水を引いていた。

### 41 半屋川の大淵

半屋川のすぐ近くにある大淵。昔、半屋川に大きな一軒家があった。そこに偉いお坊さんが泊まり、そのお礼に「墨絵の大黒さん」を描いて置いていった話が言い伝えられている。

### 42 ヤネラ淵

淵に面した岩の後ろにヤネラの木がある。これがこの淵の由来になっている。ここには大きな岩があり、その前に深くて青々とした淵がある。

### 43 大 淵

さほど大きい淵ではないが、深い淵がある。淵頭でよく魚が釣れたという。

### 44 エゴの淵

洪水で深く剔られた淵があり、それがもとで「エゴの淵」と呼ばれている。余慶橋の下流にある。

### 45 ナメトロ

小常木谷の出会いに、兩岸から岩が迫り出し、流れに覆い被さるようになっている。右岸の岩壁は、深く剔られ、流れが岩壁をなめながら通過する。右岸に展望台がある。

#### 46 下ウバ淵

ウバの由来は不明である。保之瀬のウバの淵は、近くにウバと呼ばれる地名があったが、ここでも同様のことが考えられる。

#### 47 上ウバ淵

どちらの淵とも流れは速い。この淵は左岸に激しくぶつかり、川底を鋭く剔っている。

#### 48 羽根戸淵

飛び越し岩のすぐ下流の淵で、かなり大きい。淵頭は狭く水流は激しい。羽根戸橋のすぐ下にある。

#### 49 シラゴ淵

羽根戸飛び越し岩のすぐ上流にあり、小さな滝が淵に落ちている。水量もあり、落差もあるので真っ白な泡が淵全体を覆い尽くしている。白子のような白い淵だ。訛って「シラゴ」と呼ばれるのであろう。

#### 50 藤下がり

新しい丹波山トンネルのすぐ近くにある。右岸に真藤と呼ばれている藤の花が毎年春に咲く。その淵に降りるには、この藤のツルに掴まって下る。兩岸を岩で覆われた長い淵である。

昔、この藤ツルの皮で草鞋を作ったという。

#### 51 牛金淵

武田信玄が、牛の形をした金塊をこの淵に沈めたという伝説の淵である。丹波溪谷で最も峻しく、不気味な淵で、人を近づけない場所だった。通過することが出来ない淵である。淵頭の早瀬は激しく長い。兩岸の岩は縞模様で美しい。

#### 52 犬戻り

獵師が犬とともに鹿をこの淵に追いつめた。鹿は上手に泳いでこの淵を抜けたが、犬は流れに押し戻されたという言い伝えが残されている。兩岸とも、一枚岩の絶壁が続き深くて流れの速い淵のため、簡単には上流に上れない。

### 53 菊次淵

昭和のはじめの頃、すいせん棒を上流から流している仕事に30代の貝沢の若者が、この淵にはまって命を落とした。その若者の名前をとってこの淵を「菊次淵」と呼ぶようになった。この淵は、坊主淵と犬戻りの中間の難所にある。坊主淵と犬戻りの間は、深い絶壁の谷が連続し昼なお暗い場所である。

### 54 坊主淵

黒川金山には、お寺もあり、坊主も住んでいた。金山を閉じる際、花魁達と同じ運命を辿った坊主がいたといわれているが、その真偽は分からない。淵頭に、水の廊下があり、狭い岩場を激流が流れ下る。

### 55 手取淵

遡上してきた魚がこの淵の滝で大きく飛び跳ねて、素手で取れる印象さえ与えたといわれている。右岸の岩は、深く剔られており、大きな釜を形成した淵には、魚が豊富でイワナやヤマメの大物（尺物）があがったという。

### 56 ドーキ滝

岩と岩の間に雑木がたまり、そこに土砂がつまり流れを遮って滝を造った。ゾウキが訃りドーキになった。今でも、岩と岩の間に堆積した雑木がはっきり確認できる。

### 57 丸入道淵

両岸は、坊主頭のようにツルツルした岩壁が続く。はっきりした由来は不明だが、外見状からはうなずけるところだ。長い淵で、昔は、淵頭から淵尻まで3つの淵があった。いまは、土砂で下流部は浅くなっている。

### 58 銚子滝（オイラン淵）

オイラン淵で有名なところである。滝は二段の滝で、とくに上の滝が見事だ。深く剔られた淵に一本線を描いて落ちていく。上から淵を覗くと吸い込まれそうになる。

黒川金山の遊女達の悲話は今も語り継がれている。オイランたちの悲劇の舞台は、上流の滝だったという説もある。

## 59 小 滝

銚子滝と比較した言い方で、銚子滝が大きく、この滝が小さいことから、このように呼ばれている。青々とした滝壺があり、その滝音を響かせる大きな岩が旧道にあり、響き岩と呼ばれていた。最近の台風でこの岩は崩れ落ちた。

## 60 ゴリョウ滝

藤尾山から南に伸びた尾根にゴリョウ尾根があり、その尾根との出会いにこの滝はある。昔は大きな滝だったが、今は土砂が埋まり昔の面影はない。この右岸には、旧道が通っておりオイランの悲劇はここだろうと指摘する人もいる。

## 61 ザッコ淵

昔、この柳沢川には、沢山の魚がいた。小さい魚は雑魚（ザコ）と呼ばれていた。この淵には小魚がいっぱいいたので「ザッコ淵」と呼ばれた。

## 62 お玉淵

明治時代の洪水で、上流の家屋が流失したが、幾人かの人が犠牲になった。お玉と呼ばれる女性の遺体がここで見つかったという。

## 63 キリドウシノ滝

滝の肩に切り通しがあり、滝の名になっている。また、滝の右肩の大きな岩に穴があいており、滝壺の霧が舞い上がりそこを通ることから「霧通しの滝」とも言われている。

## 64 河童淵

落合地区のすぐ近くにある淵で、淵頭が上流に深く別られている。長い竹竿を突き刺しても底に届かないほど深い。そのため、昔から、そこには河童がいると言い伝えられている。

## 65 膳棚の滝

いくつもの階段状になっていることから、神棚にお供えする膳に見立てて「膳棚の滝」と呼ばれている。すぐ近くでは二段しか見られないが、高い所から見るといくつも段が確認できる。

### (3) 後山川実踏調査

お祭から三条谷に向けて後山川林道が延びている。登りは比較的緩やかであるが、急な傾斜の山肌を這うようにして林道はできている。お祭から、8キロ進むと青岩谷に着く。ここで林道は終わる。戦後、この一帯の銘木がバッサバッサとなぎ倒され、首都圏の発展に活用された。谷に梁を張り水が貯まると切り倒した材木をそこに浮かべ、小さなダムを造る。材木がいっぱいになると、梁を破り木を一斉に流していく。いわゆる鉄砲出しである。銘木も傷が付く。商品価値が下がることから、車輸送に変えられるわけだが、傷つく物は、銘木だけではなかった。川の生き物達も、ことごとく死滅した。小林永治さんの話によれば、イワナもヤマメも鉄砲出しがやられた本流からは全く姿を消したという。カタクラ沢や塩沢等の支流に棲むヤマメやイワナ達が戻ってきて元の賑わいを取り戻すのに4、5年はかかったという。

もっと傷ついたのは三条谷の森林そのものだった。数百年物のケヤキやヒノキ、ブナ、カツラ等が次々と姿を消した。それぞれの谷や沢、支流を見守り続けてきた主達が、容赦なく伐採された。見事な自然林に覆われた豊かな森林に深い爪痕を残した。銘木だけを伐採するいわゆる択伐というやつだが、切り倒された銘木達の子や孫達は、今元気に育っている。数百年後に元の姿に帰ることになるだろう。こうした苦い歴史はしっかり記憶に留めておくべきだろう。とはいえ原生林の残された数少ない箇所である。それぞれの谷に悠久の時を刻み、永久の風を漂わせ、粛々と自然の摂理に身を任せて生き続ける森達の姿は神々しいばかりだ。

お祭から三条谷までの滝や淵を辿ってみる。(資料-1)

#### 66 不動滝

深くて峻しい谷にあって、最も雄大で風格ある滝にこの名前は付けられる。山や谷の守り神-不動明王への畏敬の念を表したものであろう。この滝は、今では、埋まり落差こそないが、なかなか景観の優れた滝である。

#### 67 丸淵

塩沢出会いから少し下流に大きくて丸い淵がある。青々とした淵には、沢山の魚達がいる。

## 68 テンカン淵

地元の人がこの淵で大物のヤマメを釣り上げようとして格闘中にテンカンに襲われ、その場に卒倒してしまった。それ以来、この淵は「テンカン淵」と呼ばれている。この淵も魚のよく釣れる淵である。

## 69 二重滝

二段の滝が美しかったという。今は一段目の淵の壁が破られて一段になっているが、景観は素晴らしい。釣りの釣果もとてもいいところである。地元「栗小僧」伝説がある。お母さん魚に、子魚達が親孝行するけなげな話だが、お母さん魚は釣り上げられてしまう。切なく悲しい物語だが、村人がこの滝をこよなく愛してきたことが偲ばれる話だ。

## 70 笛ヶ滝

御岳沢が後山川に合流している地点のすぐ下流にある。滝は深い森と絶壁に囲まれ、昼なお暗い。森の静寂にこだまする音は、どこか笛の音に似ているという。

## 71 三条大滝

後山川林道の終点から雲取山や飛竜山への登山道を登り始めると間もなく、左下に美しい滝が目に留まる。落差は数メートルしかないが、エメラルドグリーンの滝壺といい、滝の両肩の緑の鮮やかさといい、苔に覆われた岩といい、とても印象に残る滝である。大滝ではないが、大滝と呼びたくなる滝である。

## 72 銚子滝

シオジやサワグルミ、ブナ等の巨木に包まれた滝である。堅い岩盤からしたたり落ちる流れは、白い一本の線を描く。深い森に神秘的な美しさの滝。ぜひ、一度は訪れてみたくなる滝である。

## 73 青岩大滝

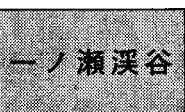
青岩谷で一番見応えのある滝がこの滝である。二段20メートルを越える落差がある。周辺は深い森で、澄んだ水が滔々と流れ下る。この谷の源頭は、東京の最高

峰・雲取山で、雲取の南西斜面に位置している。

#### 74 イオドメ滝

青岩鍾乳洞の近くにある。二段の滝で5～6メートルある。この滝の周辺の森は、原生林も混じった見事な森である。

#### (4) 一ノ瀬川・竜喰谷・大常木谷実踏調査



多摩川の源流中の源流がこの流域である。オイラン淵下流から北に延びる一ノ瀬川は竜喰谷出会いまで深く峻しい溪谷を刻む。丹波川溪谷は、奥多摩湖から塩山市落合の膳棚の滝まで、60を越

える滝や淵に彩られていたが、この一ノ瀬溪谷には変化に富んだ様々な淵や滝がありながら、マンガノ滝を除けば名前の付いたものは少ない。竜喰・大常木の滝や淵にそれぞれ名前があるのだから、大変不思議に思えた。いろいろと調べていくうちに、地元の人たちでさえ、釣りにしろ、キノコ取りにしろ、猟にしろこの一ノ瀬溪谷に近づくことはなかったという。

一ノ瀬橋西詰から急な下り坂を露出した木の根に掴まりながら、用心深く降りていく。橋の真下に着くとそこはV字谷の底で、別世界が広がる。光が谷に遮られて途端に薄暗くなる。空がかすかに帯状に見えるだけだ。一人でこの溪谷を遡上することは大変困難だ。何度か一人で途中まで進んだが、心細くなり引き返した。一人旅での無理は禁物と判断して、真夏に仲間3人で一ノ瀬溪谷実踏調査に出かけた。歩き初めてすぐに右岸の岩壁がグッと迫り出し、水量豊富な早瀬の真ん中を歩く。油断すると足下がすくわれる。足先に全神経を集中して川底の石を足で一つ一つ確かめながら転んだり、滑ったりしないよう進んでいく。息を呑むような素晴らしい景観が広がるが、迫り来る自然条件の厳しさに体中に緊張感がみなぎる。

深くて大きな淵をいくつもくぐり抜け、岩肌をヘツリながら進んでいく。1時間半ぐらいたった頃、目の前に両岸が鋭い絶壁の深い淵が現れた。青々とした流れと屏風岩で囲まれた淵が、人間の進入を阻止してしまう。地元の人をこれを「通らず」と呼んだ。釣り人は執念深いので少々危険な物ともせずどんどん奥地に、そして密かに人知れぬ場所へと進入する。だから、たいがいな所には彼らの踏み跡がある。ところが、彼らもこの「通らず」には手を出さない。笹平の悪場と呼んで近づこ

うとしない。こうした「通らず」が一ノ瀬溪谷には四つある。沢登りのプロでさえ、「これでもか、これでもかというほど泳ぎが続く。たとえ一年でもっとも暑い日に行ったとしても、たちまち唇は紫色になつてしまう。」と、この溪谷の厳しさを表現している。

我々は、第一の「通らず」を泳いで通過した後、次の「通らず」は自分たちの能力を超えていると判断して、あきらめて帰ろうとしたとき、沢登りのプロに偶然出会い、それこそ、泳ぎまくってこの険悪な悪路を走破した。たぶん県内では通過した人は数えるほどしかないだろう。「通らず」は4カ所あり人間は通れない。川の幸、山の幸など自然の恵みを受けようにも、近寄ることが不可能なのだ。この溪谷の滝や淵に名前がないということは、そのこと自身がこの溪谷のステイタスを表していると言えよう。

一ノ瀬溪谷も、大常木谷との出会いを過ぎると、優しい表情を見せる。無数の淵と小さい滝が連なり、V字谷にいることを忘れさせてくれる。大常木出会いから1時間歩くと、美しいナメ滝に遭遇する。落差こそ少ないが、縞模様の岩盤のうえを優しく流れるこの滝は、マンガの滝と呼ばれる。幾筋にも分かれて流れ下ることから、そう命名された。マンガの滝周辺は紅葉が素晴らしい。この滝をさらに進むと、大きな石が進路をふさぐ。巨石のすぐ上流に竜喰谷が左岸から流れ込んでいる。

#### 竜喰谷実踏調査

— リュウバミダニ — 竜が棲み、谷や滝の神々が集う神秘とロマンの谷とでもいったかったのだろうか。先人達がどんな思いでこの谷の名前を命名したのか確かめようもないが、釣りにしろ、キノコ取りにしろ、猟にしろ、山里の住民に豊かな恵みを与え続けてきた。竜喰金山や豊富な木材供給地としても注目を浴びるなど、深くて峻しい谷なのに、人間に利益と潤いを振る舞い続けてきた谷である。多摩川源流をこよなく愛し続け、飽きることなく関心を持ち続け、源流の神々に遭遇したいと願っている人々なら、是非一度この谷に足を運んで欲しい。ただし、体力と気力を持ち合わせしかも優れたリーダーと一緒にいる場合に限られることは言うまでもない。

竜喰谷は出会いの滝から始まって、大小13の滝が連続する。林道に車を留め、急な斜面を転がり降りて、先ず一ノ瀬川を渡渉する。渡れるところは2カ所ある。どちらも油断すると足をすくわれるくらい流れが速い。特に増水したときは、下流の方を渡るが、淵と瀬の境界線を見つけて進む。すぐに竜喰出会い滝が目に見え飛び込んでくる。



二段の美しい滝だ。左岸から竜喰谷が流れ込む。透明感溢れる清流が、縞模様の赤茶けた岩をなめるように流れている。遡上し始めると正面に一番滝・出会い滝がある。落差も滝壺も小さいが、幅広い布滝の姿が何とも美しい。よく見ると滝の途中に小さい起伏が無数にありこれを縫うように流れるので左側に白糸が幾本も連なるのだ。この滝の上流は穏やかだ。右岸に苔むした流木が横たわっている。ゆったりした気持ちで進んでいると、急に暗くなり、兩岸がそそり立った岩壁の、ゴルジュに突入する。腰まで水に浸かりながら左岸を進む。大きな流木が谷をせき止めるような形で横たわっている。流木を始め、谷全体が苔むしている。太陽の日差しが殆ど差し込まない。そこから出ると、二番滝に出会う。滝壺の青さ、滝の上流から段々と流れ落ちてくる景観の美しさに、つい見とれてしまう。最近、左岸が崩落し、右岸の大きな木が倒れて滝を覆ったため、景観が台無しになったが後20年もすればまた元通りになるだろう。右岸から金場沢が流れ込む。そのすぐ上に大きな岩壁がアーチ状に形作られた地点がある。高い壁の上に天に突き刺すように樹木が伸びている。岩壁の一番奥から沢が流れ込んでいるが、永年の水と岩のせめぎ合いを象徴するかのように深く剔られ、母なる大地から生命の誕生を彷彿させる神秘的な魅力を秘めた場所である。

三番滝は精錬場の滝。大きな釜に圧倒される。箱淵を過ぎるとヤソウ小屋の滝だ。源流部の滝の中で最も姿が整った滝の一つだ。くの字になって流れ込むが淵の色が実に鮮やかな青色をしている。五番滝は無名滝だが、大雨の後に訪れると末広がりの扇子状の姿を見せる。その滝の上流の左岸から南東に広がる広大な森が、「赤壁の尾根」と呼ばれている。紅葉の時期に、夕日に照らされた山肌が真っ赤に染まる。是非一度見て欲しいものだ。続いて下駄小屋の滝に出会う。右岸のガレ場を登り、馬の瀬の尾根を用心深く登っていく。6月に行くと、その周辺にチチブドウダンツツジが、赤紫の小さな可憐な花を付ける。馬の背の尾根を登っていると、右前方の奥から、滝の音が聞こえてくる。深い谷と薄暗い森の向こうに龍神の滝（下駄小屋滝）はある。訪れる人は殆どいない。そこに行くには、下駄小屋の滝を直登するか、馬の背の尾根を巻いていくかのいずれかだが、どちらも容易ではない。無事にたどり着きたいという真剣な願いを込めて下駄小屋の滝を直登する。時に足が震え、時に水飛沫を浴びながら恐怖に負けない精神力で通過していく。何度挑戦しても怖いところだ。しかし、それだけにたどり着いたときの達成感、充実感はずまらない。しかも、迫りたった岩から大胆に流れ落ち姿は豪快そのものだ。竜喰谷全体を守る神々が棲む滝に違いない。この滝から上流は、谷も開けやや明るくなる。イオ止めの滝をはじめ、大小いくつもの

滝が連続し、谷は次第に狭くなり、伏流水となり、清流は姿を消していく。

### 1 竜喰出会い滝

竜喰谷が一ノ瀬川に合流する地点に二段の滝がある。川と谷の出会いからこう呼ばれているが、地元では、「竜喰デー」と呼んでいる。一ノ瀬林道から、竜喰谷に入るには、先ず一ノ瀬川を渡渉しなければならないが、これがなかなか勇気がいる。水量が多い上に流れが速い。油断すると足下をすくわれる。

滝の左肩に立つと、竜喰の流れこみと二重の滝の姿全体が観察できる。春には、ミツバツツジやヤマツツジが出迎えてくれる。

### 2 出会い滝

地元では、出会い滝と呼ぶ人と、名前はないという人がいる。正確には、無名滝なのだろう。竜喰出会い滝があって、また出会い滝があるというのは、少し不自然な気がするが、滝の姿といい、周囲の雰囲気といいなかなかの見応えがあり、無名滝にしておけない。リュウバミダニの最初に出会うという意味で、我々はこう呼ぶことにしている。

### 3 二番滝

この滝も実は名前がない。出会い滝を越えると、しばらくは優しい光景が続くが、左に大きくカーブすると、薄暗いゴルジュに突入する。兩岸は切り立った岩盤が立ちはだかり、深い森に遮られて光の進入は少ない。苔むした岩と朽ちた流木の中を進むが、いよいよ竜喰谷の胎内に進入したことを実感する地点だ。

このゴルジュを過ぎたところにこの滝はあり、青々とした滝壺と段々に下り降りてくる滝の上流の景観は、飽きることがないほど見事だ。いずれ、すてきな名前が生まれるであろう。

### 4 精錬場の滝

竜喰金山が滝の周辺にあったことからこの名が付いた。金鉱を求めて試掘した穴があちこちに今も残る。実際に金の精錬に活用されたのかどうかは定かでないし、金の産出量もよく分からないが、金を探してこの谷を沢山の人が歩いたことだけは確かだ。滝壺に一気に落ちて吹きあがる水飛沫の勢いはこの谷随一である。

## 5 箱淵

落差の小さい滝があり、その両側が垂直の壁になっており、下流からよく見ると箱の形に似ている。この淵の淵頭の右岸に深く剔られた地層がある。そこに丸い大きな石がすっぽりはまりこんでいる。川底から1メートル以上高いところにある。大きな洪水の時に運ばれてきたのであろう。

## 6 ヤソウ小屋滝

この谷は深い森に包まれているが、この谷あたりまで奥まってくると良質の桧が多く産出したという。その材木の切り出しに従事した人がこの谷の周辺に小さな小屋を建てた。滝のすぐ近くの小屋の持ち主がヤソウ爺と呼ばれていたという。滝の姿は美しいし滝壺もエメラルドグリーンで、透明感抜群。

## 7 扇状滝（無名滝）

普段は左斜めに駆け落ちる滝だが、大雨の後は末広がり大きく広がって流れ下る。直下型ではなくナメ滝なので、扇状滝に出会えると幸せな気持ちになれる。名前のない滝であり、この姿を見た地元の人も少ないという。

## 8 下駄小屋滝

この滝の左岸に下駄の材料のシオジやサワグルミがたくさんあり、その材料を切り出すための小屋がここに建てられた。桐が軽くて丈夫で下駄の材として重宝がられたが、何せ高価であったため、庶民はシオジなどの材質の物をよく使用した。滝の上流部はナメが続き、途中から垂直に落下する。落下点には、巨大な岩石が横たわり、滝壺はない。

## 9 龍神滝（下駄小屋滝）

下駄小屋滝に連続するように、その上部に堂々とした滝がある。地元の人に話を聞くとそこには近づかないという。下駄小屋滝から直登する事は困難である。下駄小屋滝を巻くには、右岸の馬の背のような尾根を進むしかないが、そこから、この滝への路も峻しい。その滝は大きな釜を形成しており、どこからも逃げられない。同じ路を引き返すしか進路はない。人を寄せ付けなかったため、上下まとめて下駄小屋滝というくらいの扱いしか受けていなかった。緑の季節には、

どこからもその姿は見られずただ森の向こうに、轟音を響かせる滝があることしか分からない。山や谷、滝や尾根のそれぞれの神々が集い語らう絶好の場にちがいない。そうした思いを込めて、私たちはこの滝をこう呼んでいる。

## 10 イオ止め滝

龍神滝までの険しい谷から解放されて、二股を過ぎて暫く進むと 右から流れ落ちる小さい滝がイオ止め滝である。このあたりではウオ（魚）と言わずにイオという古い言い方が残されている。この滝から上には魚がないとのことからこう呼ばれる。

この滝の上流に滝が二つ連続するが、人の進入は少なく谷の利用もなかったために滝には名前はない。我々は、イオ止めを含む3つの滝を、イオドメ、ヒトドメ、リュウドメと呼んでいる。

魚や人や竜の進入すら嫌う神々のみの棲家との思いを込めて。

### 大常木谷実踏調査

大常木谷と聞いただけで地元の人が「あそこには一人で行くな」と必ず忠告する。オイラン淵のヘヤピンカーブから一ノ瀬に通ずる一ノ瀬林道を暫く進むと、大常木下降点がある。地元消防団の「転落死亡事故多し」の看板が目につく。林道から真下の谷を覗くと白い川面が小さく見える。正面に飛竜山を臨む。2000メートルの山頂から一気に谷は下りはじめる。山肌を深く刻みこみ蛇行を繰り返しながら一ノ瀬川に合流する。底知れぬ不気味さが漂う谷……それが大常木谷である。林道から眺めているだけで足がすくんでしまう。地元の平山肇さんの案内で大常木谷に向かう。馬の背を慎重に下る。数年前に釣り人がここで転落して亡くなっている。せせらぎの音がしだいに強くなり、足元が苔でふわふわし始めるとすぐに一ノ瀬川の川底に着く。

一ノ瀬川を渡渉し対岸の小さな尾根を越えると大常木谷に出会う。陰険な谷もここでは優しい表情をみせる。穏やかで透明感溢れる流れ。玉砂利を敷きつめた清流は、息を呑むほど美しかった。その淵を後にして暫く進むと、大きな石が兩岸に現れる。優しい表情はここまでだった。小さな滝を越え右に進路をとると薄暗い谷が待ち構えている。最初のナメ滝に出会う。名前はない。右岸に、仁王立ちした奇岩が目にとまる。直視しているとその奇岩の中から類人猿の姿が浮かび上がってくる。

最初のナメを過ぎるとV字谷に突入する。源流にはいろいろなところにV字谷があ

るが、この谷ほど模範的なV字谷は他にはない。鋭く刻まれた谷が水の回廊となって続く。左岸に突き刺さるように流木が立っている。その突き当たりにゴケンノ滝が姿を見せる。神々しいまでの姿に思わず手を合わせる。この滝を巻くのが大変で、カラタキサワの難所を四つん這いになりながら登り、垂直に近い壁を下り、難行苦行の末、セングノ滝に着く。25メートルを越える源流一の豪快な滝だ。大きな弧を描き、激しい飛沫をまき散らしながら落ちていく白い流身。飛沫は風に乗って谷を下る。幻の滝の残映はいつまでも脳裏から離れなかった。再びセングノ滝を高巻きする。ヤシキノクボに沿いに険しい坂を登りヤマニの尾根に向かい、道なき道をヤマメ淵に向かう。いくつもの淵を越え滝を這い上がりヤマメ淵に着く。平山さん曰く、水中メガネでこの淵をのぞくと尺物のヤマメが池の鯉のようにうじゃうじゃ泳いでいると。深く大きな淵を再び高巻きする。ゴケン、セング、ヤマメとそれぞれを巻くと、それだけで5時間を費やす。その上り下りが半端ではない。午後1時に二重滝について昼食を取った。深い森林に、美しい姿で現れるこの滝は、不動滝ともよばれているが、何とも神秘的で、妖しいほどの美貌の持ち主である。

二重滝を巻いて暫く進むと会所小屋跡に出る。昔は水源林管理には欠かせない小屋で、ここに寝泊まりしながら水源林を守る仕事が続けられた。平山さんが、この上にゴーロがあってそれを過ぎて暫く進むと大きな石をなめるように流れる石滝があると教えてくれた。帰りは、シナノ木のタルを抜けて、シナノ木尾根沿いに進み、精錬場の滝を越えてミノワ沢を下り、石楠花橋へ着くルートをとどった。

## 1 ゴケンノ滝

滝の落差が5間ぐらいあることから「五間の滝」と呼ばれている。急峻なこの谷を象徴するかのよう、険しいゴルジュの中にある。水量も多く、轟音を発して流れ下る。深く別られた岩壁に包まれたこの滝は、何度でも会いたくなる滝である。

## 2 千工の滝

材木を伐採して搬出する事は大変な重労働だった。特にこの谷は険しかったのでシュラを張り木を痛めないように切り出した。この谷にシュラを張るのは、大仕事で多勢の工（たくみ）を必要とした。そのため「千工の滝」と呼ばれるようになった。仕事の内容があまりにも苦しいので「千苦の滝」とも呼ばれている。25メートルの落差を一気に豪快に流れる下る滝は迫力満点といえる。

### 3 ヤマメ淵

右岸は屏風岩で左岸は傾斜のきつい一枚岩からなっており、淵には青々とした清流が渦巻いている。深くて長い大きな淵に、ヤマメがいっぱい棲んでいる。あまりの秘境に、釣り人さえ進入出来ず、自然のままに残されてきた。このまま、いつまでもヤマメの天国であってほしい。

### 4 モミジクボ

左岸に大きくぼみが現れる。そこがモミジクボである。秋の紅葉の季節は、鮮やかな紅葉の競演が見られるという。

岩が迫り窮屈な谷が連続していたので、ここまで来るとホッとする。

### 5 二重滝

思わずワッと声を発したくなる滝である。正面から見ると両岸は、堅くて高い岩に覆われ、その真ん中を二段の滝が貫通している。息を呑むのは、一段目の滝壺の青さだ。青というより藍色に近い。この滝とは、一日中一緒に過ごしても飽きがないばかりか、益々離れ難くなる滝である。

### 6 石 滝

大常木谷の中で一番綺麗な滝。滝の真ん中に大きな石があり石をなめるように滝は流れ落ちる。

## (5) 泉水谷・小室川・大黒茂谷実踏調査

### 泉水谷実踏調査

泉水谷の源頭は、大菩薩嶺である。水干のある笠取山から見ると南の方向になる。平たく言えば、源流の北側の源頭が水干で南側のそれが大菩薩嶺に当たる。泉水谷には、小室川や大黒茂谷、牛首谷等の支流が注ぎ込む。泉水谷に沿って林道が通っており、林道の終点には、水源林の管理をしていた泉水小屋跡がある。

泉水谷に3つの滝がある。一番滝の不動滝（雄滝）、二番滝の不動滝（雌滝）、無名滝がそれである。一番滝は、実に堂々とした滝である。すぐ近くで眺めると、水流といい、滝の姿といい、滝壺といい、いずれも申し分ない。昔の話だが、この滝で地

元の田辺武さんが40センチメートル以上のヤマメを釣り上げた。そのヤマメは、大きなヤマガエルを呑み込んでいてお腹がぱんぱん膨れていた。気持ちが悪くなって、その滝壺に返すと、連れの友人がもったいないと言って取りに行き、食べたという。深くて大きな淵に大きなヤマメがいるという。

谷は、林道が通るとどうしても汚れてくる。山を管理する上で林道が必要なのは分かるが、林道は山肌を鋭く削り取るので、雨が降るたびに土砂が流され谷を濁す。林道は最小限に押さえて欲しい。小室や大黒茂谷には、林道はない分、目の覚めるような清流と出会える。尾崎行雄が源流を視察した記念碑が三条橋のすぐ近くに建っている。その三条橋から泉水谷林道を2キロメートルほど進んだ所に岩小屋がある。そこから小室川に通じる山道がある。泉水谷との出会いから、小室川に足を踏み入れると、透明感溢れる清流が出迎えてくれる。生まれたばかりの川は、どんなに綺麗なものなのか、本物の川はこれほどに澄みきっているのだということを、強烈に我々に教えてくれる。

泉水谷出会いから暫く進むと、左岸に大きな石がゴロゴロし、清流はナメ滝となって流れ下る地点に着く。少し進むと、大きな木の根が、岩と岩の間を走り、川面に姿を現す。絶えず水に洗われ、根が円形状に丸くなりながら岩に必死でしがみついている姿に出会う。その上流に一番滝のねじれ滝がある。この滝は二段の滝で、縞模様の岩盤を鋭く刻みながら流れ下る。滝壺の右岸は岩壁が深く剔られ大きな淵を形成している。二番滝は、泉水大滝と呼ばれている。滝は右に向かって落ちている。左岸から眺めると岩を這うように流れ下る姿が鮮明に浮かび上がり、茶色の岩の上を真っ白な水流が落ちていく。

泉水大滝の上流は暫く平坦な流れが続く。右岸から沢が流れ込み、白糸を幾本もたれながら流れ下る。三番目の滝は無名滝である。落差は小さいが、滝壺は深く、しかも両岸が屏風岩になっていて近づくことは出来ない不気味な淵となっている。さらに進むと、泉水谷で一番の難所となっている桧尾出会い滝に着く。大きく左右に蛇行しながら流れ下ることからS字峡とも呼ばれている。鋭く刻み込まれたV字谷が待ち構えている。

右岸の壁をよじ登る。少し勇気がある。たいていの人はここで引き返す。獣道を慎重に探しながら進む。上から蛇行した谷を覗くとゾクゾクする。自らの不気味な姿を隠すかのように地表を深く深く削りながら流れ下る。両岸は垂直に近い絶壁が続く。ザイルを垂らして川底に降りる。目の前にくの字に曲がった淵がある。前の壁が驚く

ほど深く剔られている。直進する流れと岩壁との永年の格闘を思わせる。連続する滝や淵のあまりに美しい姿にため息が漏れる。上流に行くに従って淵の色が真っ青に染まる。五番目の滝は二段の無名滝だ。長い廊下のまっすぐな谷に出会うかと思えば鋭く蛇行した淵が待ち構える。仲間の一人でもけがをすれば脱出不可能だ。不安と恐怖と驚きと感動が身体中を駆けめぐる。いよいよサカリ山の滝に直面する。右岸の垂直の壁をよじ登る。ザイルがはじめから張られている。4メートルの高さまでは無難に上れるがその後が凄い。ザイルが2本に細いワイヤーが1本の計3本が垂れ下がっている。一息ついてよく見るとそこから上は足のかかりが全くない。両腕の力でよじ登るしかない。利き腕の右手にザイル2本を巻きつける。左手にワイヤーを巻く。じわじわと右腕をたぐり寄せ、その位置を左手で固定する。また同じ動作を繰り返す。下をのぞくと青々とした淵が美しい。ここを突破しなければ他に路はない。恐怖心より使命感、責任感の方が勝っている。力を振り絞り、弱音を吐かず宙ぶらりんの自分を少しずつ引き上げていく。滝の左肩に手が届く。やったと自分を褒めてやる。上から見ると、右のルートの方が足のかかりがいくつもあって簡単だ。ザイルを垂らして仲間の到着を待つ。無事に全員が通過した。

サカリ山の滝の思い出は一生消えないであろう。まず桧尾出合い滝が人間の進入を拒絶する。無理矢理そこを突破したものには万の罰ゲームを与え、そのうえ4時間の難行苦行の末、サカリ山の滝の無情の壁をよじ登らせる。実に波乱に満ちた源流旅である。それを過ぎるとようやく小室淵に着く。この淵は、泉水谷で最も不気味な淵で、大きくて深い。流れはゆったりではまりこむと脱出不可能な感じを与える。大きな淵が二段になって連なっている。ちょうど真ん中にザイルを使って下れるところがある。神の座とでも呼ぼう。ほんの数人だけが留まれる小さな河原がある。左岸からほとほと、ほとほと清水がたれ落ちている。妖しいほどの輝きを秘めながら落ちる一滴一滴に思わず手を合わせ、山の神、谷の神にここまでの無事な旅に感謝した。

小室淵を通過すると、ホッとした気分になる。そこからは、ナメ滝が続き谷もやや開け少し明るくなる。いくつものナメ滝を上り詰めていくと、なにやら神秘的な滝と出会う。右岸には屏風岩が聳え、周囲は深い森に覆われている。これが雨乞いの滝だ。昔、日照りが続くと丹波の人々は、フルコンバを通る険しい山道を上り詰めてここにやってきて、山の神、水の神に雨が降るよう祈ったという。雨乞いの滝を過ぎると、途端に明るくなり、穏やかな流れに変わる。この上流に大菩薩の妙見の頭がある。大菩薩の妙見の頭に落ちた雨は、東に下れば泉水谷小室川へ注ぎ、西に下れば、笛吹川



支流の重川に流れ下る。泉水小室川を旅するものは、溢れんばかりの緑と随所からわき上がる湧水に出迎えられ、ここが自分の故郷だと自慢できる体験を重ねながら悠々と旅が楽しめることだけは確かだ。

では、泉水谷、小室川、大黒茂谷の滝・淵を紹介する。

## 1 不動滝

岩小屋から1キロメートル上にある。滝の正面に回ると、激しい滝の飛沫が、絶えず吹きつける。豊富な水量と深い淵。豪快で堂々たる姿は、泉水一の滝に値する。  
(雄滝)

## 2 雌滝

雄滝の数百メートル上にある。右の方に向かって流れ落ちる。不動滝と落差と水量がほぼ同じで、やや繊細な姿をしている。

## 3 ねじれ滝

小室川で最初の滝で、上下二段になっている。上の滝は右よりに落ちるが、正面の岩に跳ねられて右の岩壁にぶち当たる。そこに小さい滝壺がある。そこから左に流れ落ちる。このねじれ滝を縞模様の岩が優しく包み込む。

## 4 泉水大滝

大きさも落差も一番というわけでもない。右斜めに流れ下る。左から見ると平凡な姿だが、右から見ると、実に美しい。こげ茶色の岩の上を白い流身が美しい舞を踊りながら舞台から降りていく。滝壺も同様に見応えがある。

## 5 泉水滝

左岸の巡視路が数カ所大きく崩壊している。そこから数百メートル進んだ所に右岸から美しい滝が姿を現す。沢の落ち込みだが、泉水一番の華麗な滝である。苔むした岩肌を青々した苔が覆い、そこを白糸の無数の滝が流れ落ちる。泉水谷全体が美しい谷だが、中でも抜群の華麗さを誇る滝で泉水の象徴といっている。

## 6 三番滝（無名滝）

二つの淵の奥に轟音を響かせている。滝を岩が被さるように覆い、滝の音の逃げ場がない。左岸を高巻きして通過する。

## 7 桧尾出合い滝

ひのきおであいだき・ここまでは普通の渓谷愛好家でもしっかりしたリーダーと一緒に走破出来る。がこれ以上は無理である。蛇行した谷が左にカーブしながら姿を見せる。どーんと高い壁が立ちはだかり、滝は左の岩壁に激突して容赦なく岩を削り取る。その奥からも滝の音が絶えず押し寄せてくる。

## 8 小室大エゴ淵

垂直の屏風岩の足元を鋭く剔っている。水面上に確認できるだけでも5～6メートルは剔られている。水面下を窺うことは不可能だが、紺碧の淵の不気味さは、途轍もなく底が深いであろうことを連想させる。

## 9 二段滝

無名滝。逆くの字になっている。それ故滝の正面から二段滝を見ることは出来ない。右岸を慎重に上る。淵の色が見事で、思わず綺麗と叫んでしまう。

## 10 サカリ山の滝

桧尾出合い滝からこの滝までは、あたかも地層の陥没によって谷全体が姿を隠しているかの印象を与える。両面が壁になって、絶壁をよじ登るしかない。右岸の山を登り詰めたところにサカリ山がある。1,542メートルの高さを誇る。周囲の一番高い山の名前をこの滝は頂いたのだ。

## 11 小室淵

小室淵で最も大きく深く不気味な淵ゆえ、谷の名前を頂いている。二段に淵は別れているがどちらとも深い。特に下淵は、ゆったりと流れている。ちょうど中間に神の河原がある。

## 12 雨乞い滝

中ノ沢と蛇抜け沢の中間点にある。大菩薩峠から丹波山村に延びる登山道を少し下るとフルコンバ小屋跡があるが、地元の人々は日照りが続き干ばつに襲われると、ここから雨乞いの滝に下り山の神に雨が降るよう祈ったという。誰も近づけない神秘の滝に山の神々が宿ると昔の人は信じていた。

### 大黒茂谷実踏調査

泉水谷に注ぎ込む支流で一番大きい谷が大黒茂谷だ。水源林林道を三条橋から5キロメートル進んだ所に大黒茂谷出合いがある。大黒茂谷の源頭は大菩薩嶺である。この谷は大菩薩を故郷とし大菩薩北尾根を流れ下る。悟りを開き民衆を救済する有り難い仏に最も近い谷……これが大黒茂谷なのだ。

大黒茂谷はその入り口からして神秘的である。巨石がどーんと迎えてくれる。最初に足を踏み入れた人は、先ずここで「すごい」との歓声をあげる。その石を縫うようにして谷は流れているが、偶然とはいえ巨石の真下から、泉が湧き出るように流れている。菩薩谷とでも呼びたくなる雰囲気を持ち合わせている。巨石群を上り詰めたところに小さい滝がある。冬にはこの滝が凍結し無数のキラキラ光る水柱が姿をみせる。一番滝は鋭く深く刻まれた滝だ。真下からは滝の全貌を見ることは出来ない。滝は、幾度となく段を成しながら流れ下る。暫く進むと右岸の岩盤が大きく別られた場所に着く。何十年に1回の大洪水の度に削られたのであろう。自然の猛威と途方もない時の流れを感じさせる。

その上流に、川底に岩がゴロゴロし、右岸はなだらかな斜面、左岸は切り立った壁の見通しの利くところがある。心惹かれるのは、岩に青々とした苔が生えていることだ。ふわふわした厚みのある苔が一面を覆っている。二番滝は、二段滝である。どちらも岩をナメながら流れ下る。上の滝は川幅いっぱいになって流れ、下の滝は、右に大きくカーブしながら流れ落ちる。

谷は深い森に覆われている。大菩薩北尾根の北側を大黒茂谷が、南側を小室川がそれぞれ流れているが、どちらの谷も豊かな自然林に恵まれ、四季折々に素晴らしい景観を楽しむことが出来る。深山幽谷なる菩薩谷でありながら、誰でも訪れることの出来る親しみと愛着のもてる谷である。

## 5. 定点観察に取り組んで

多摩川源流部の水温や気温の変動を自分たちの体験調査で把握し実感しようと、この2年間、膳棚の滝・落合川出会い・作場平・石楠花橋の4カ所で定点観察を行ってきた。水量や川幅の調査にも取り組んだが、一雨ごとに土砂が堆積し、定点での水位がめまぐるしく変化し、雨量と水位の関係を客観的に知ることが不可能だとわかり、水量・川幅に関する調査は中止した。

一ノ瀬川本谷の作場平と柳沢川の膳棚の滝の2カ所を比較しながら、一年間の水温の変化を見てみると

\*作場平（97年5月から98年3月まで）

（単位：度）

97年度	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	7	10	11	10	9	7	5	0	-1	-2	2

\*膳棚の滝（97年5月から98年3月まで）

（単位：度）

97年度	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	9	12	13	12	10	8	6	-1	-1	-1	3

標高差が約200メートルなのでだいたい2度前後の温度の差が確認できるが、冬の寒さに関しては、膳棚の滝は寒気の吹き溜まりなので上流と同じくらい冷たかった。水温は、最低で-2度、最高で13度を記録した。気温に関しては、朝と昼の気温差が激しめ、あまり参考にならないが最高25度から最低-17度を記録した。

以上の結果、源流部の水温は夏で12度前後、春・秋で7度前後、冬で-1度がほぼ平均的に観測されることが判明した。気温の差は、最高・最低で40度前後あるのに、水温の差は13度前後と大変安定していることが分かった。夏は涼しい風を送りだし、冬は一生懸命大地を暖める水達の働きは大変なものだと痛感した。

さらに、定点の写真撮影を続けた。膳棚の滝と一ノ瀬川本谷の12カ月の表情を追い続けた。季節の移ろい、その変化の激しさに改めて感心した。また、去年は、記録的な大雪を記録した。1月8日、13日、15日の3日間に1メートル70センチもの積雪が観測された。これはこの百年間に記録したことがない積雪だった。地元の田辺加藤さん(85歳)が今まで生きていてこんな大雪は知らないと言われておられたのがとても印象に残った。

## 6. 多摩川源流絵図の作成について

この間の地名の発掘と名称の由来の調査・研究の成果を、学校教育・社会教育に少しでも役立ててもらおうと、多摩川源流絵図の製作に取りかかった。出来るだけ正確さを期すために、原図は、国土地理院発行の五万分の一の地図をベースにして仕上げ、その上に美術の教師の協力や会員の知恵や力を結集して色づけや情報の書き込みをして数カ月かかってようやく完成した。近々、塩山市教育委員会や丹波山村教育委員会に寄贈して活用していただく予定だ。

出来ることなら、地名の由来の部分を児童や生徒にわかるように書き改め、それを活用して多摩川源流絵図を楽しめるようにしていきたい。ゆくゆくは地元ばかりでなく、多摩川流域全体の児童・生徒が親しめる「多摩川源流物語」が作ればという夢もある。

## 7. シュラ作りについて

この間の調査の過程で水源林の仕事に関係した人々の話がいくつも聞けた。特に奥多摩町の大沢茂一さん（92歳）の話は印象的であった。シュラをどのように作るのかと尋ねたら、「水のある谷にはヤナを張る。水のない谷にはシュラを張る」という話からはじまった。シュラは切り倒した木で作る。ハナマクラとシリマクラを先ず作り、そこにボウズを並べる。ボウズがシュラの底・台の部分に当たる。ハナマクラ・シリマクラはボウズの前後の枕木のこと。ボウズは3～4本。コブ・フシのない、のめっこいものがいい。ボウズの左右にヤマクラをそえ、そこにヤゾウをさしこみ壁を作る。底の平たい樋をつくっていく。谷に水があるときは、ヤナを作りせきとめる。ヤナをつむ人をキバナづくりと呼び、職人肌の腕利きがその任に当たる。どことどこにヤナを張れば、材木がよく流れていくかを判断していく人だ。途中にいて木を流す人をノベと呼ぶ。谷送りや川流しの最後にいて木をかたづけける人をキジリマクリと呼んだ。この役も大変で、あらかじめ自分の乗りやすい木を見つけておき、その木を操りながら木の始末をして行くわけだ。

こうした話を生き生きとしていただいた。13歳で小僧になり、飯炊き4年、一日歩いて奥多摩から丹波山まで行き、熊沢で木の伐採に従事したという。東京都が水源林を営営し始めて百年になるが、地元の名もなき無数の人々の、山を守り、森を守る営々とし

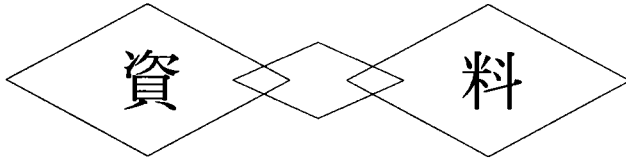
た営みが続けられた。こうした人々のおかげで、豊かな森は守られてきたのだ。色々詳しい話が聞けた。彼らが健在なうちに彼等の体験を記録し保存したいと思う。

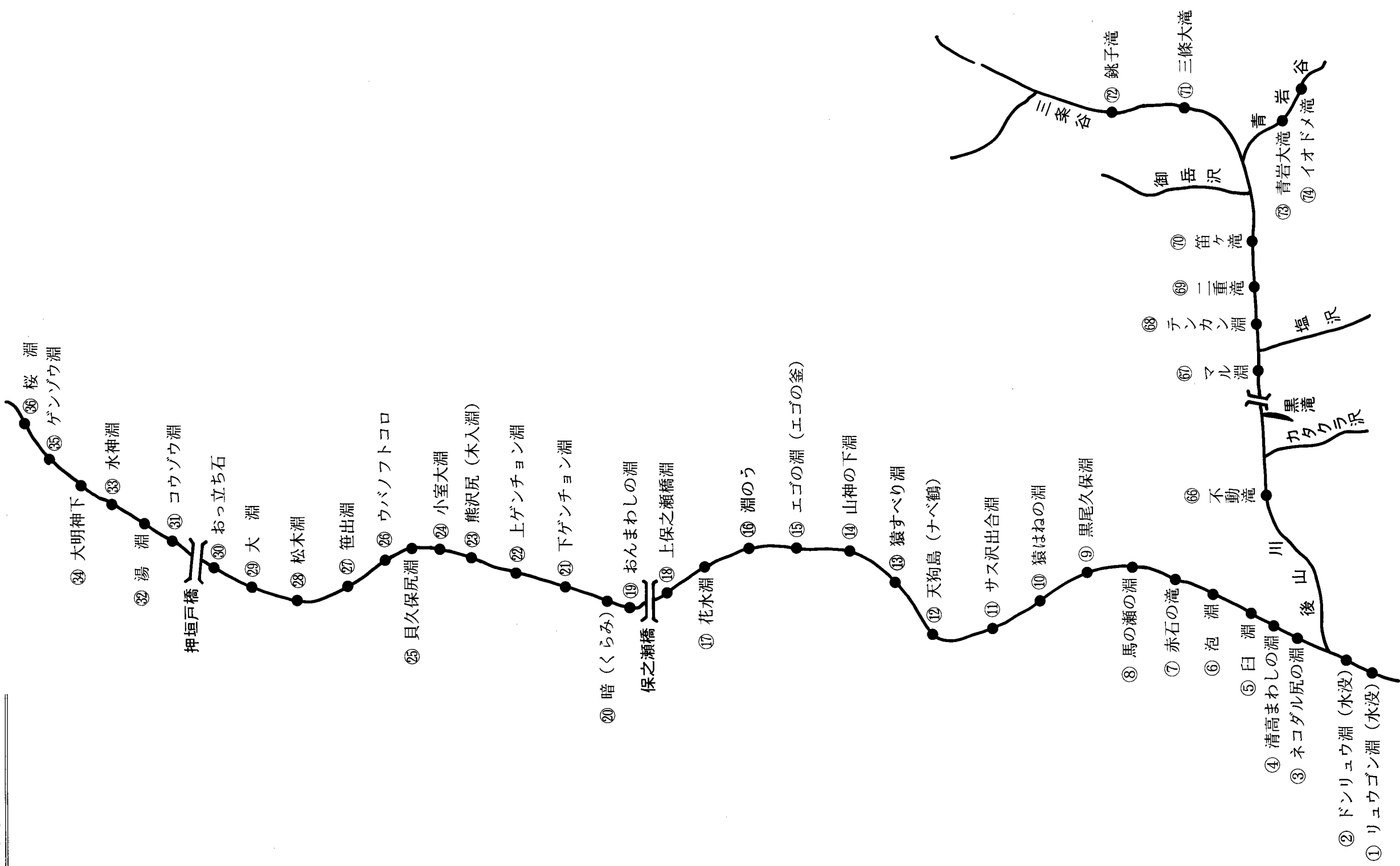
## 8. 謝 辞

多摩川源流の魅力に取り付かれ、400回を越える源流行を繰り返してきた。どこかで、積み重ねてきた調査のまとめをやりたいと思いつつも、出来ないままに来た。今回のとうきゅう環境浄化財団の暖かい援助がなかったなら、まとめ上げることは出来なかったであろう。心から感謝します。また、今はなき守岡只さんをはじめ、小林永治さん、平山肇さん、曾根良一さん、田辺加藤さん、田辺武さんなど沢山の地元の方々にお世話になった。また、丹波山村の教育委員会の川村利一教育長には格段の援助を頂いた。心から感謝します。そして、多摩川源流観察会の仲間達が苦勞を共にし、危険を省みず勇気と情熱を燃やし続けて、このまとめを一緒になって仕上げてくださいましたことに感謝している。

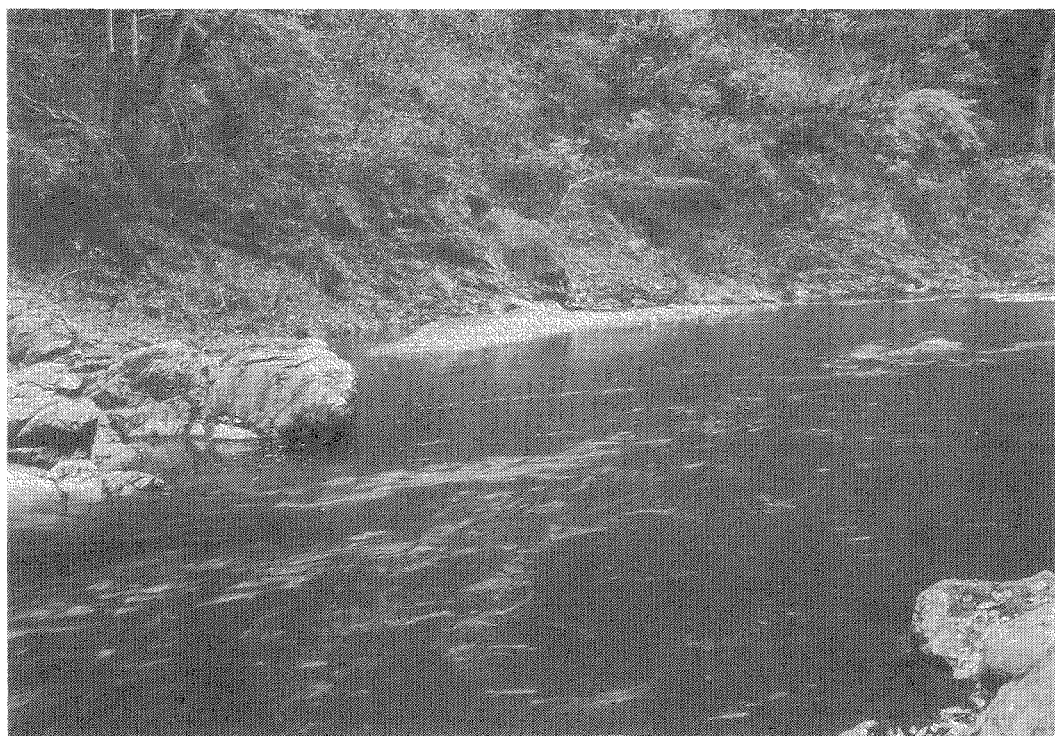
1999年 3月

多摩川源流観察会  
会長 中村 文 明

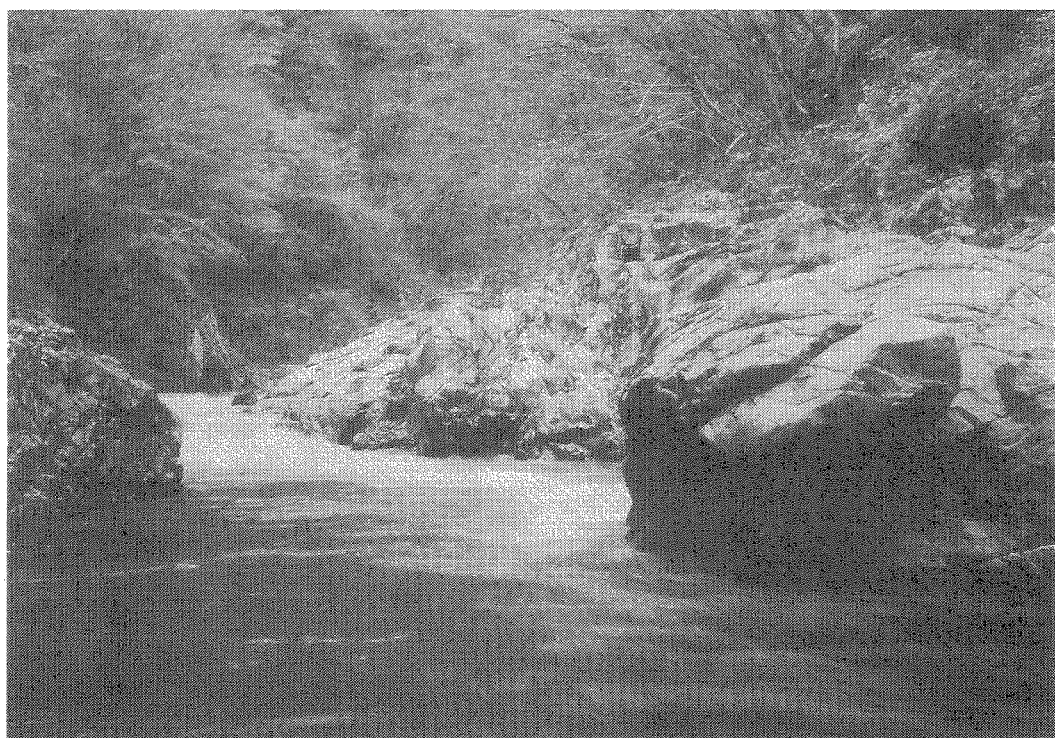








③ ネコダル尻の淵



④ 清高まわしの淵

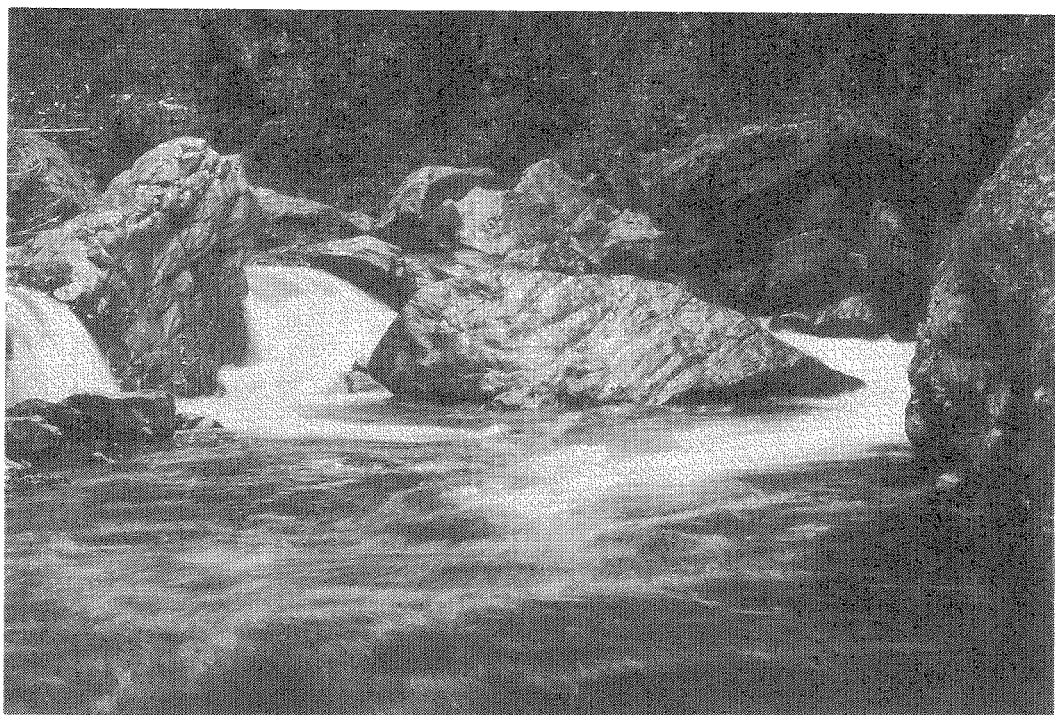


⑤ 白 湍

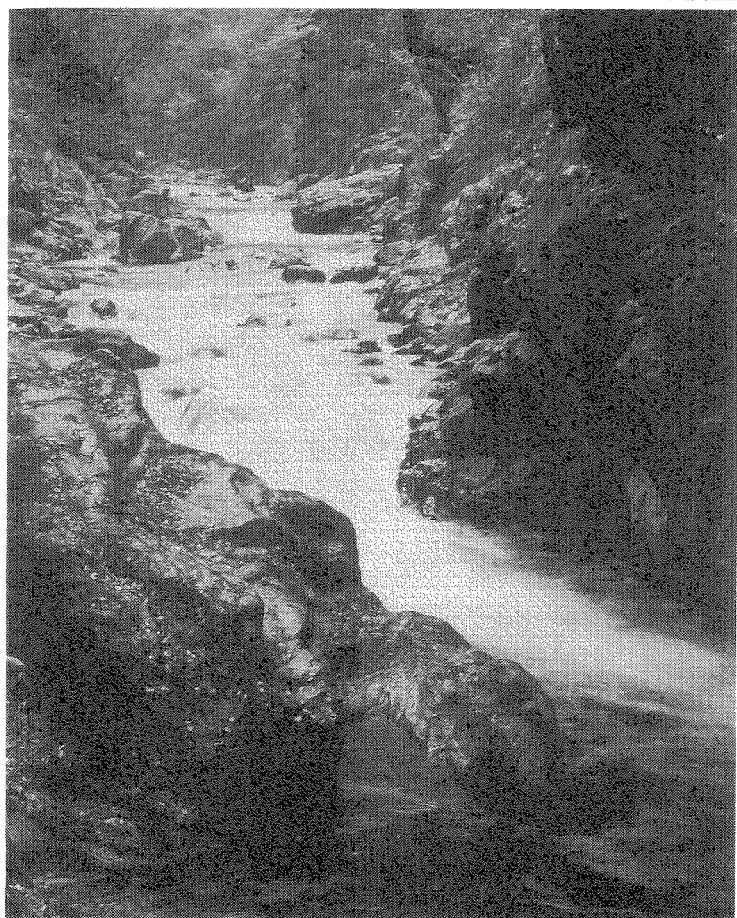


⑥ 泡 湍

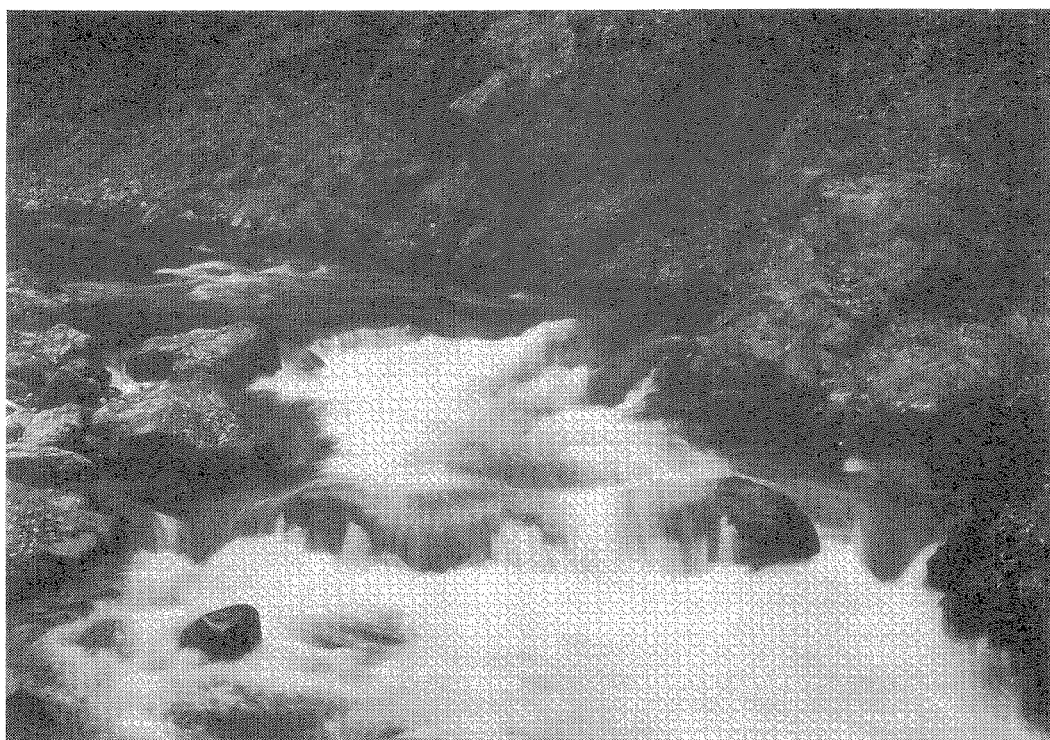




⑦ 赤石の滝



⑧ 馬の瀬の淵

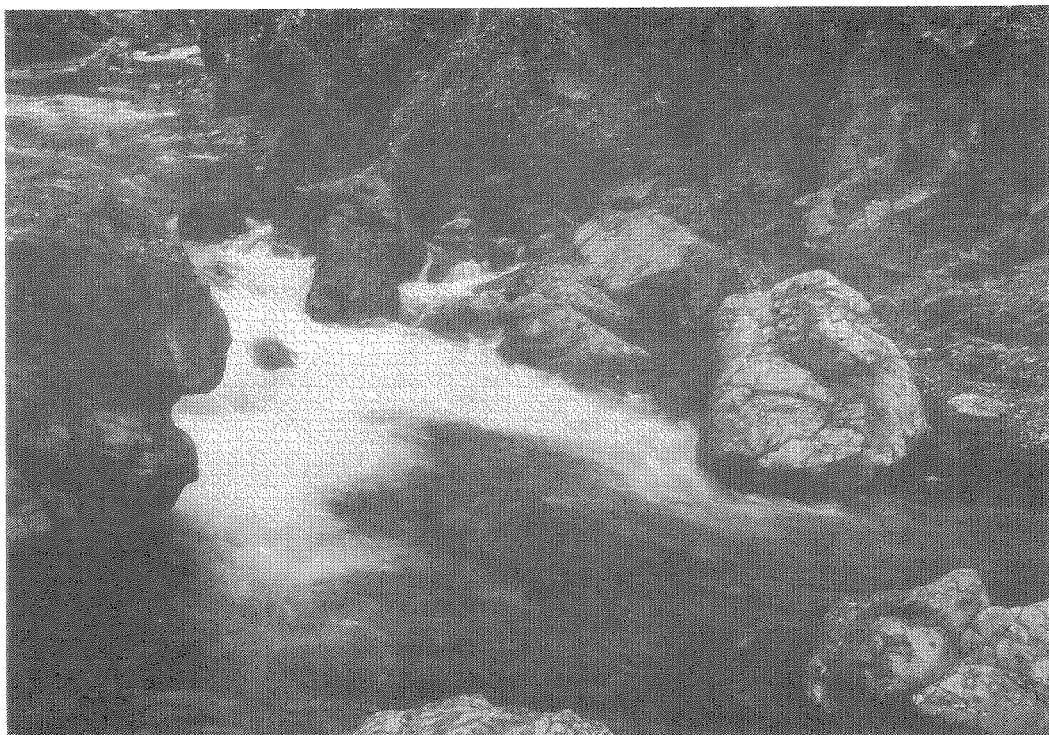


⑨ 黒尾久保淵（2つの連続した淵）…… 上流

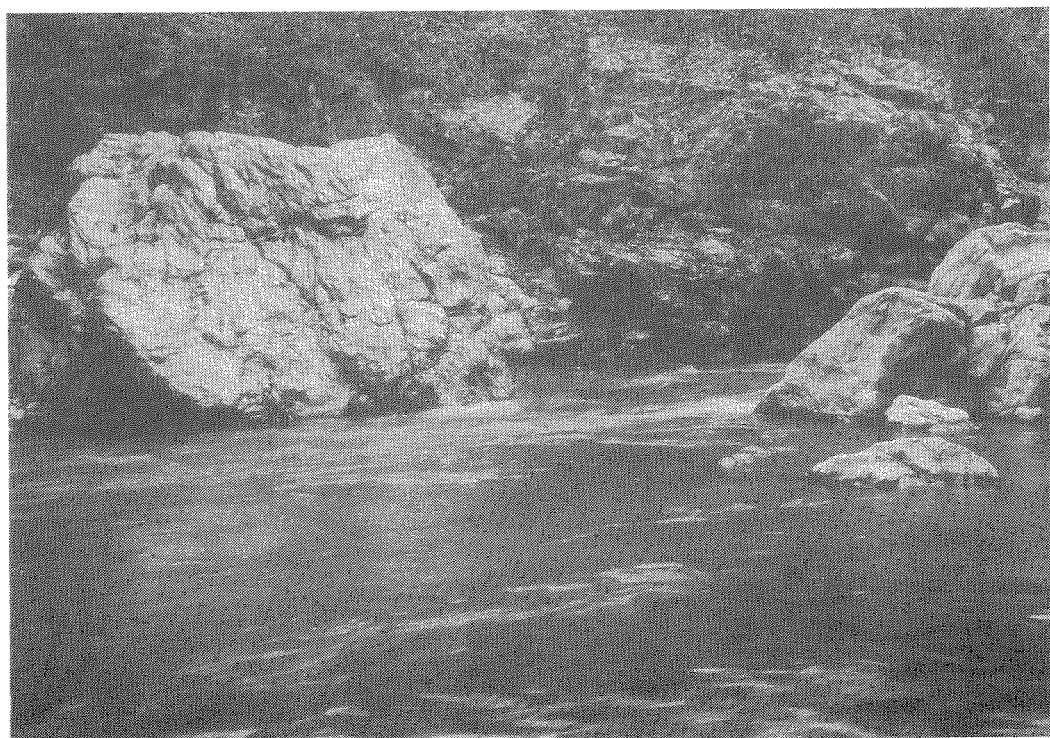


⑨ 黒尾久保淵 …… 下流

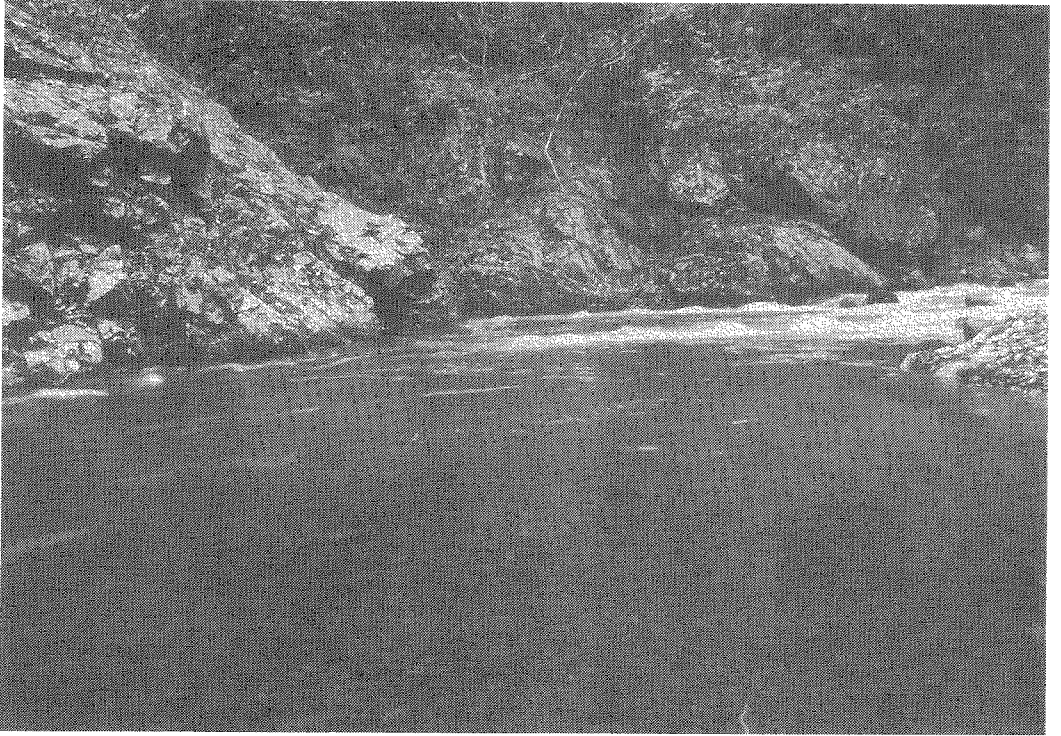




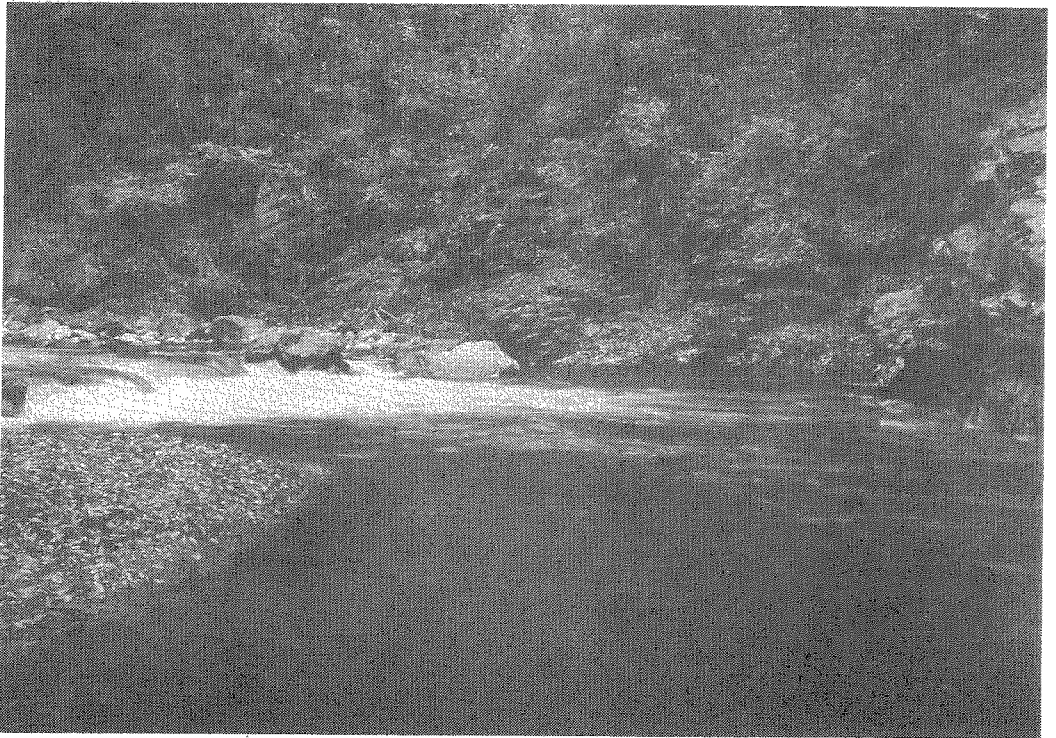
⑩ 猿はねの淵



⑪ サス沢出合淵



⑫ 天狗島 (ナベ鶴)

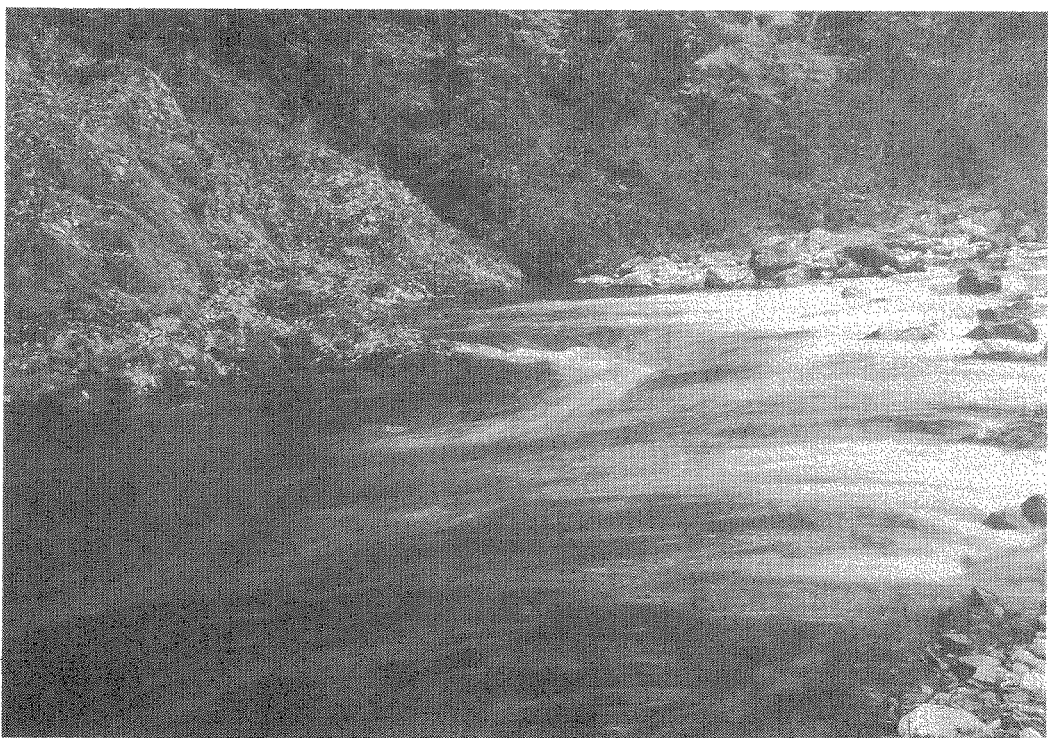


⑭ 山神の下淵

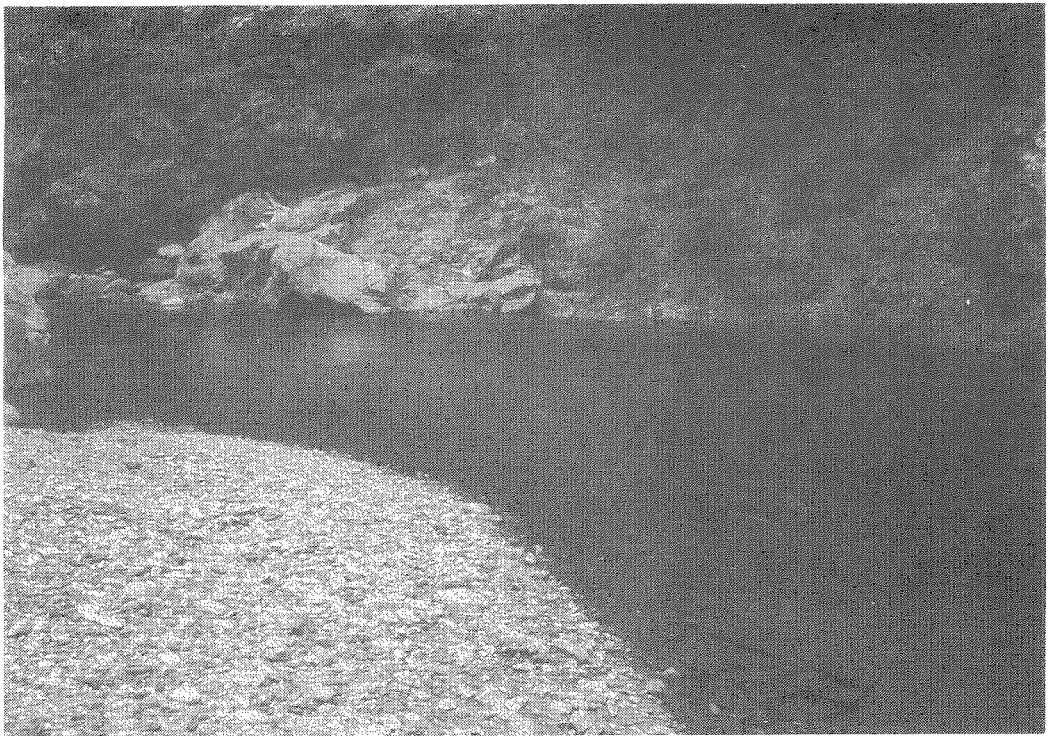




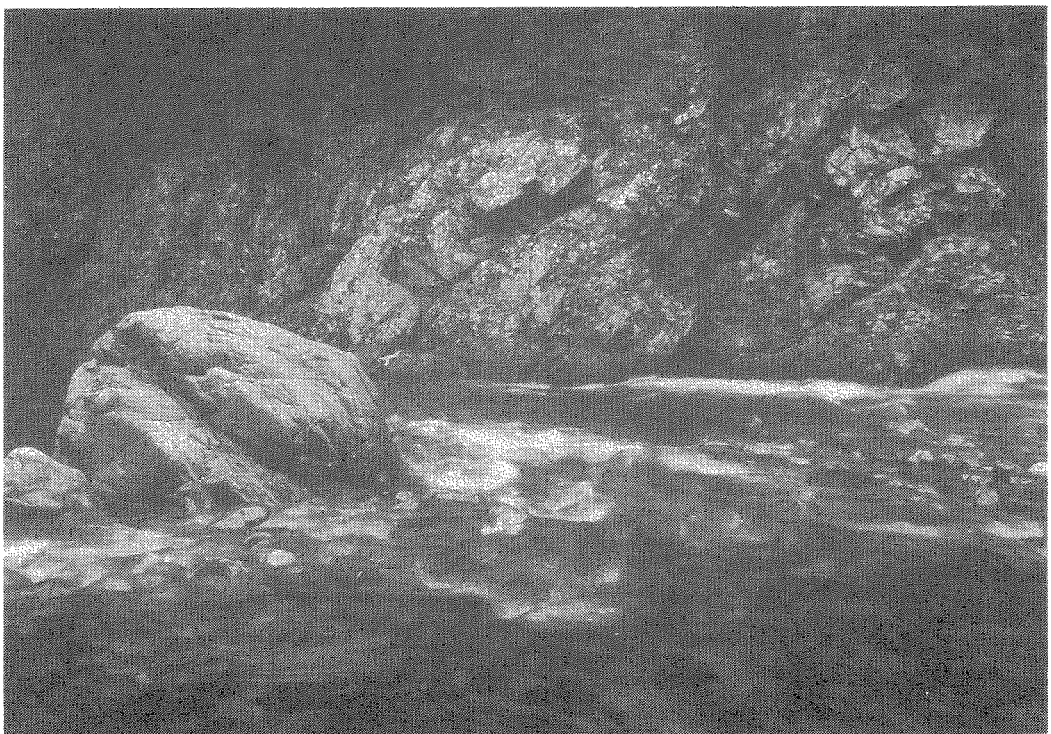
⑮ エゴの淵 (エゴの釜)



⑯ 淵のう

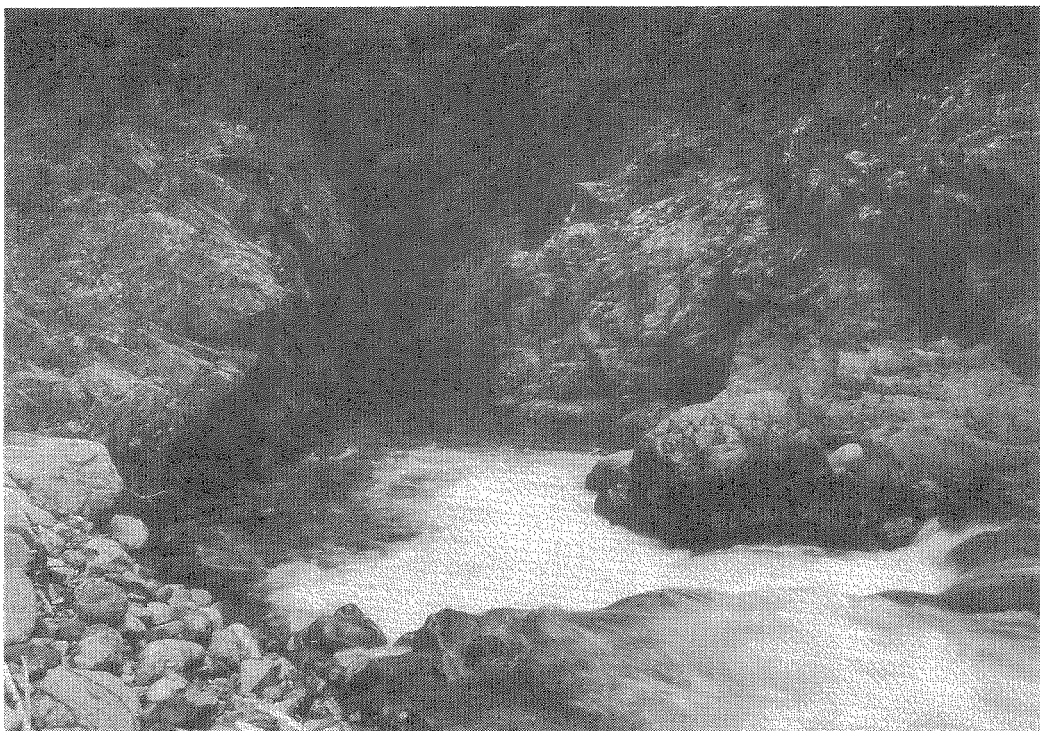


⑱ 上保之瀬橋淵

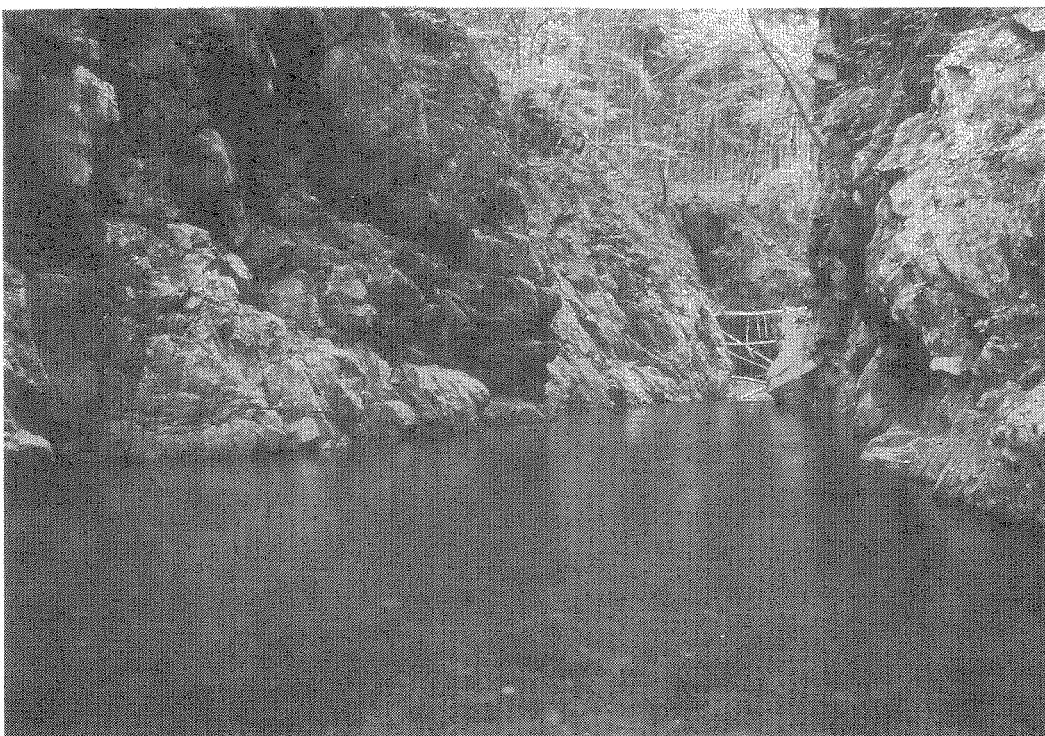


⑲ おんまわしの淵

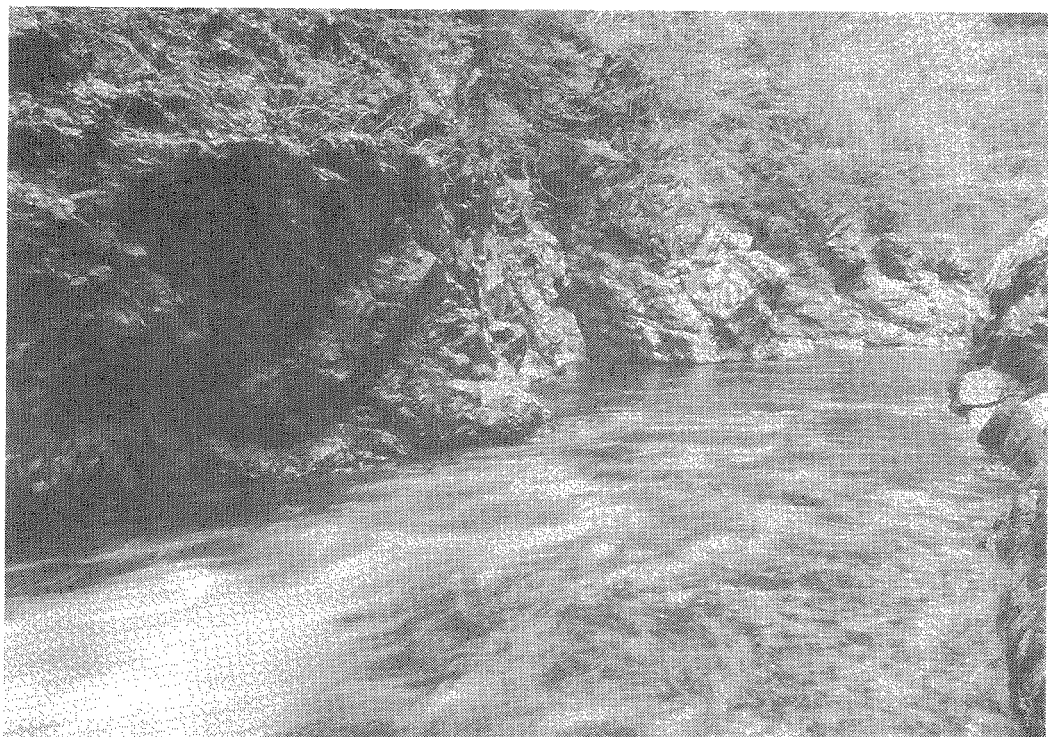




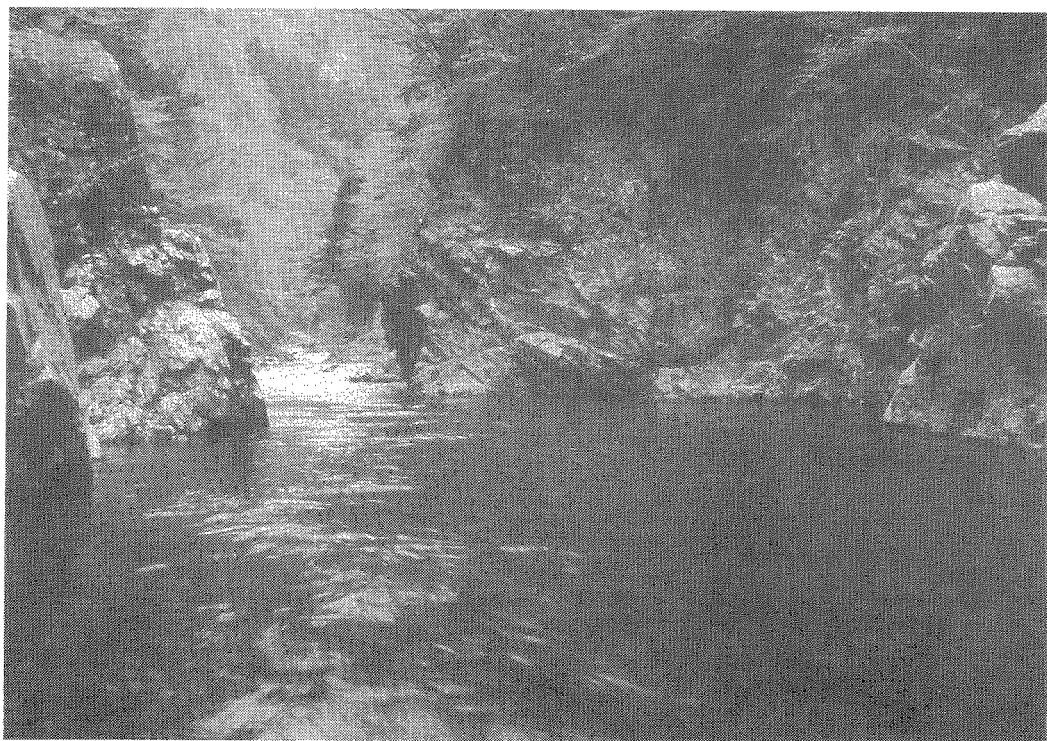
㊦ 暗 (くらみ) 淵頭 (ふちがしら)



㊦ 暗 (くらみ) 淵尻 (ふちじり)

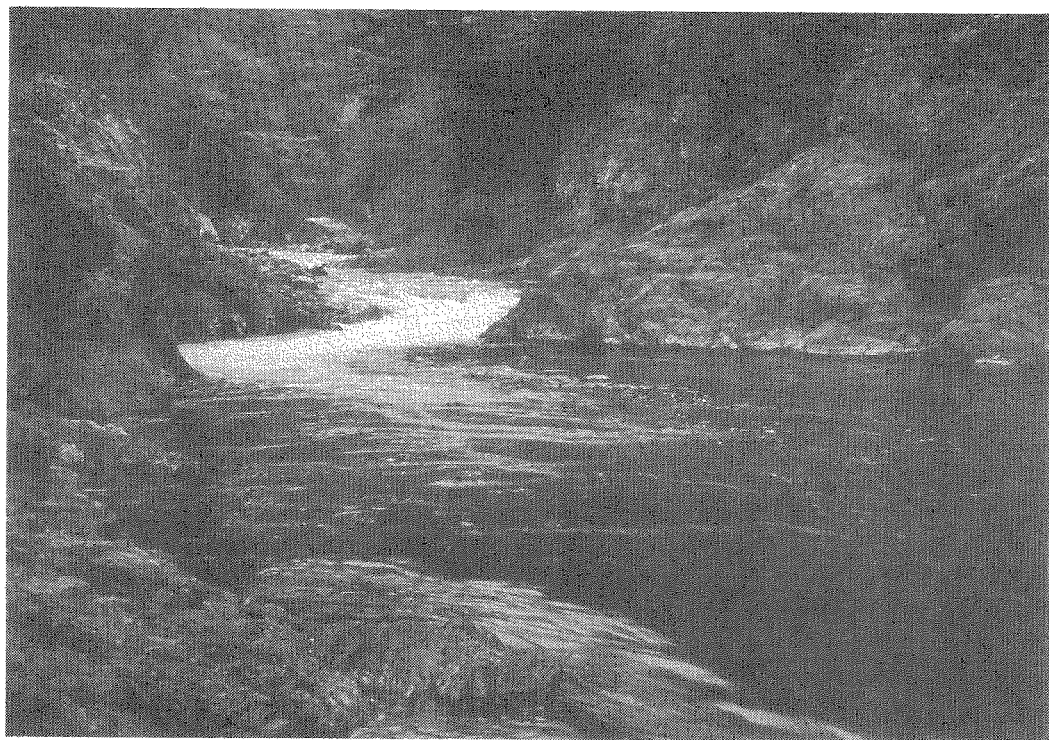


㉑ ナメトロ (下ゲンチョン) 淵頭 (ふちがしら)



㉑ ナメトロ (下ゲンチョン)

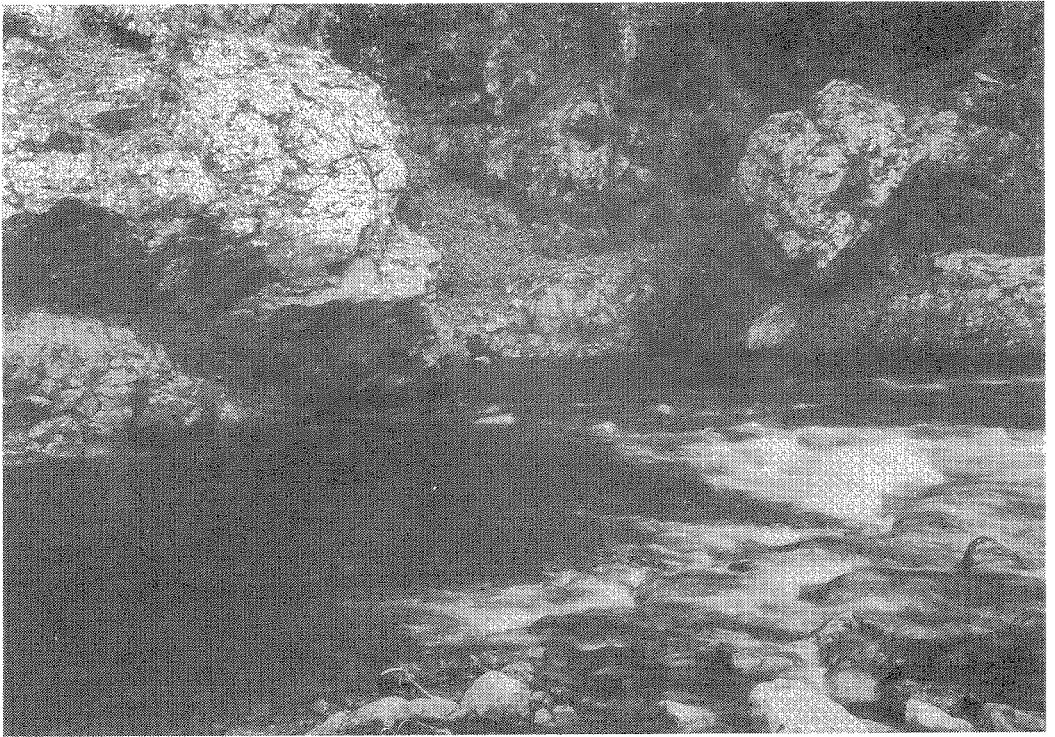




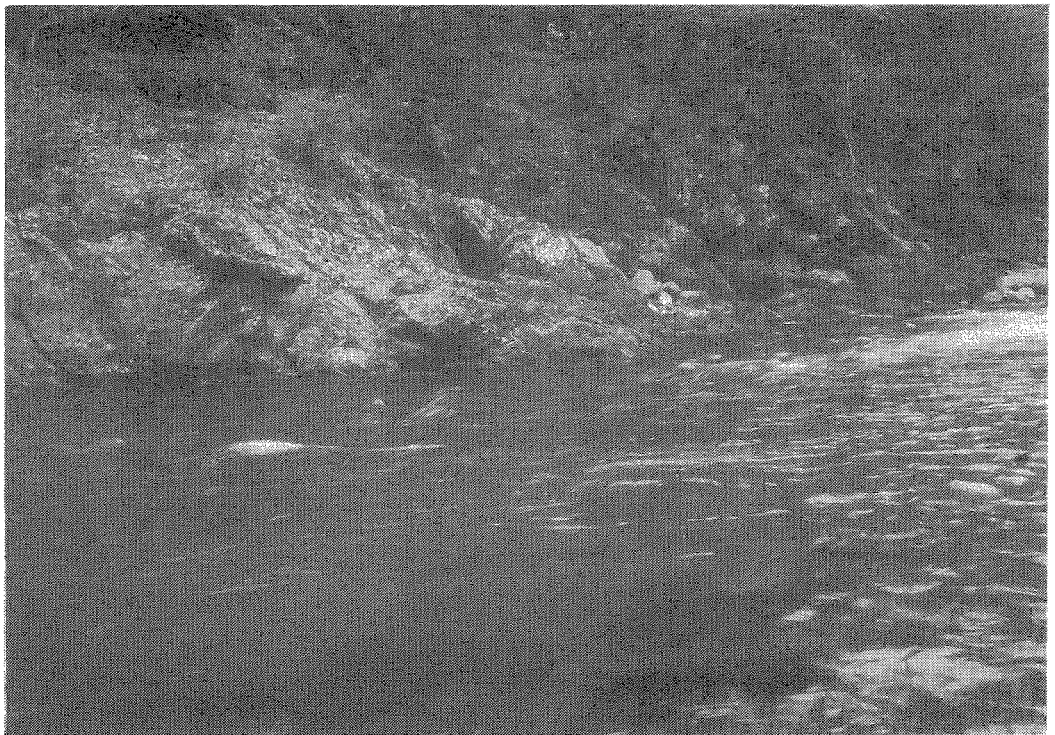
㊸ ゲンチョン淵



㊸ ゲンチョン淵 淵頭 (ふちがしら)

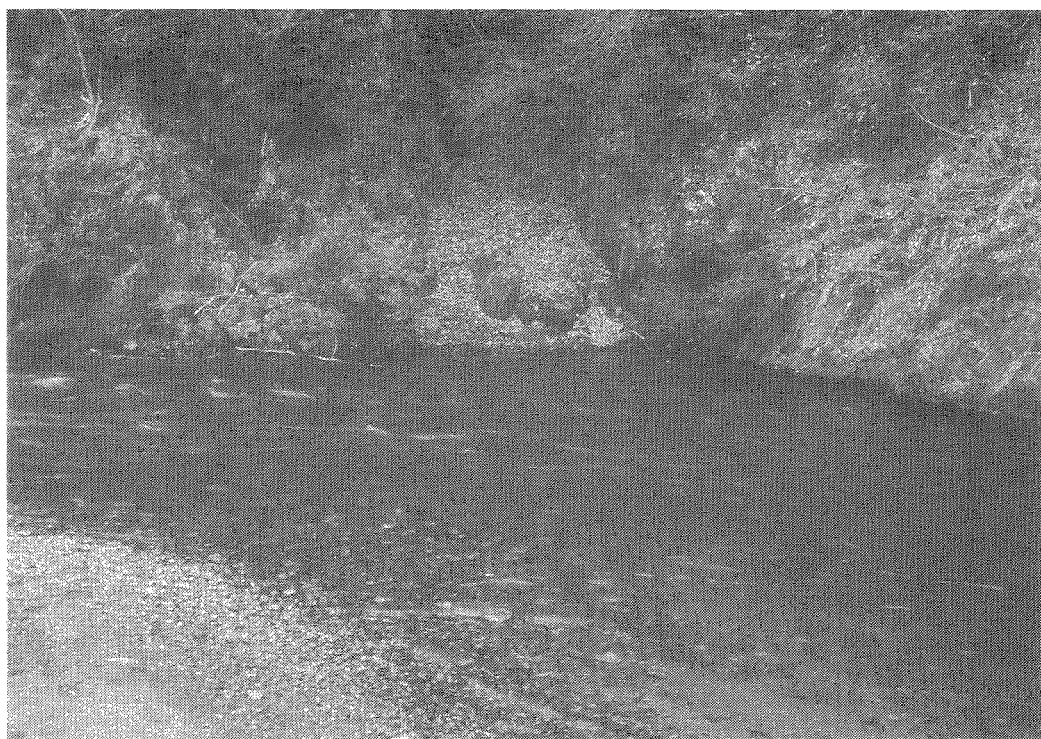


㉓ 熊沢尻（木入淵）

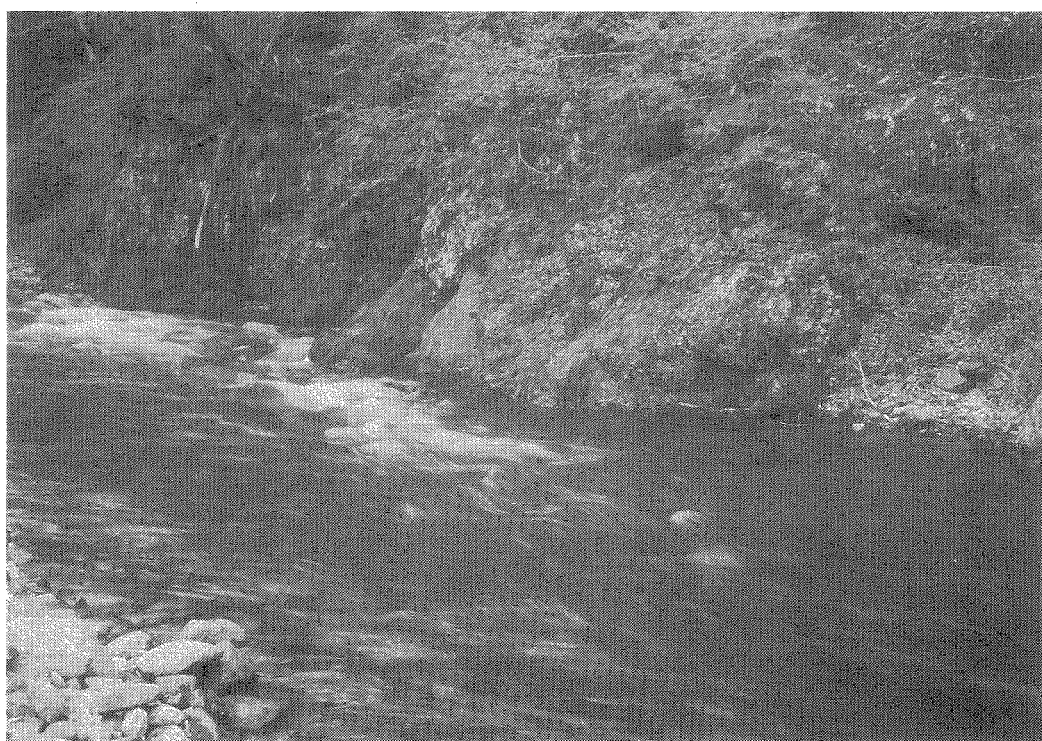


㉔ 小室大淵

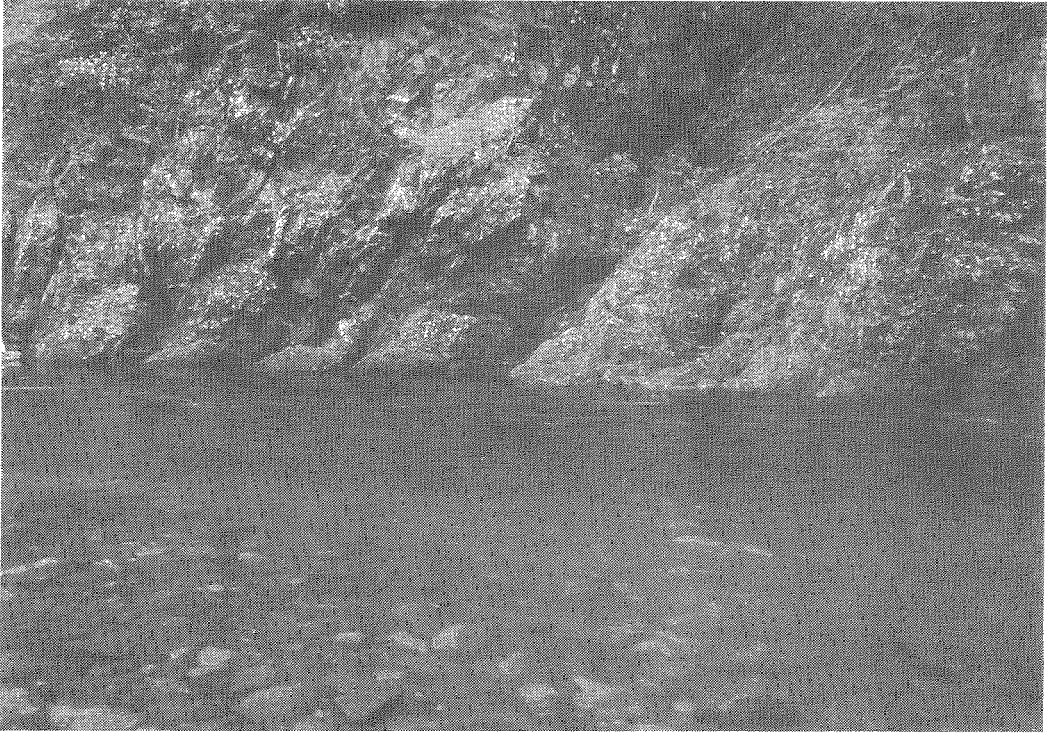




㊦ 貝久保尻淵



㊦ ウバノフトコロ

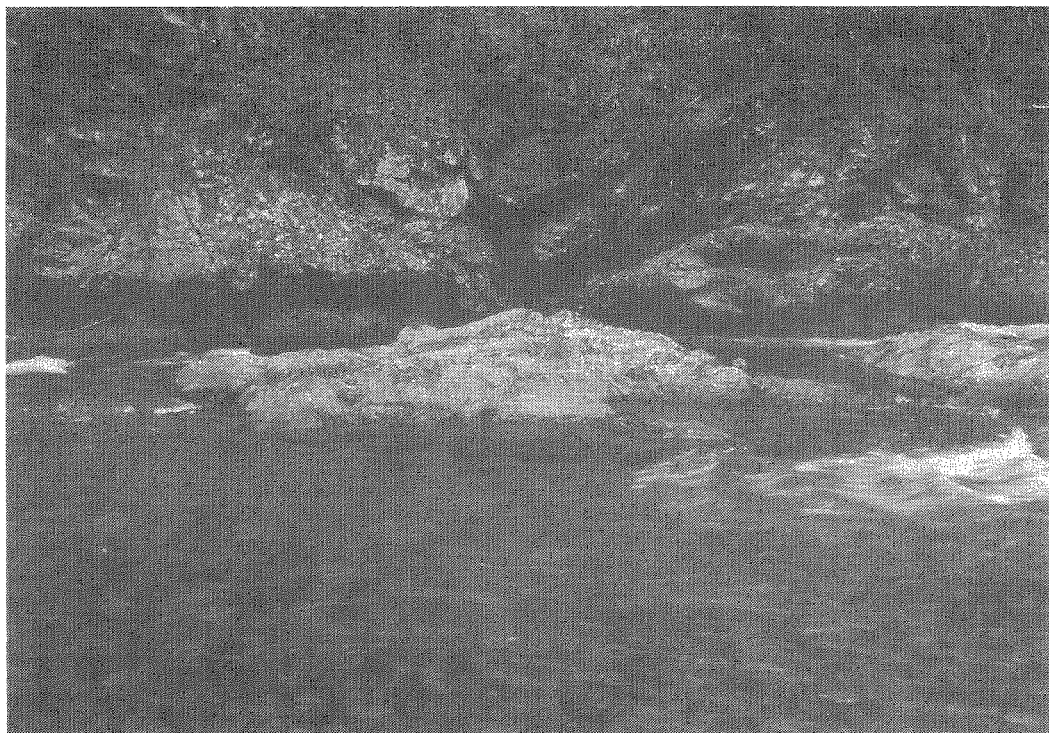


㉗ 笹出淵

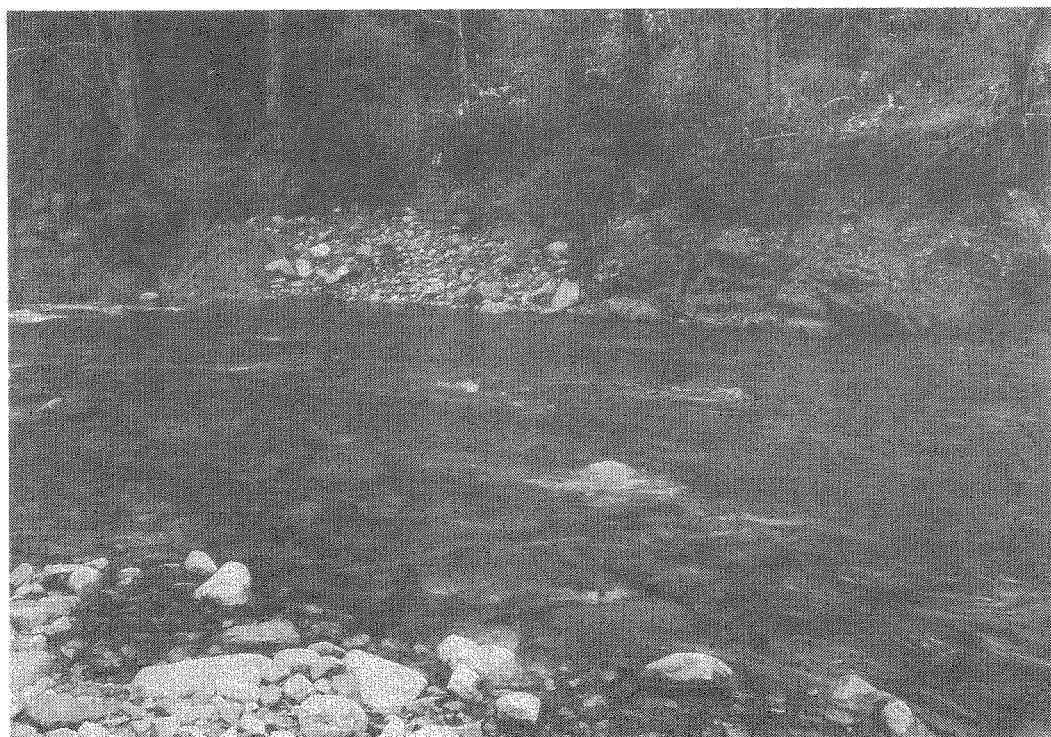


㉘ 松木淵

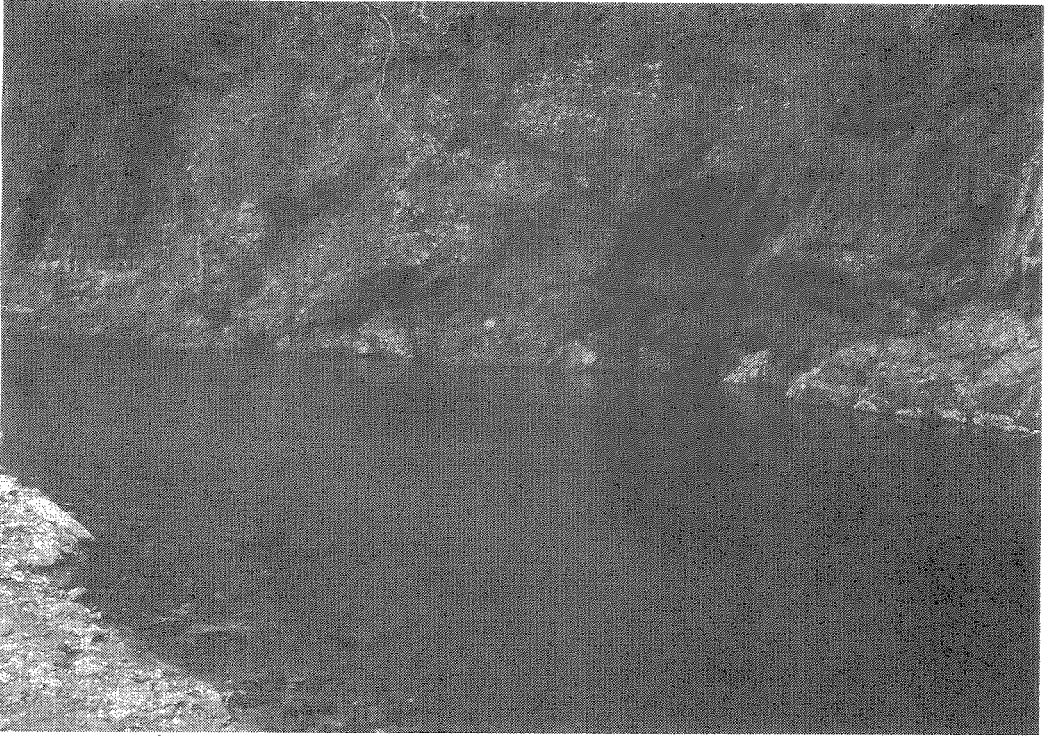




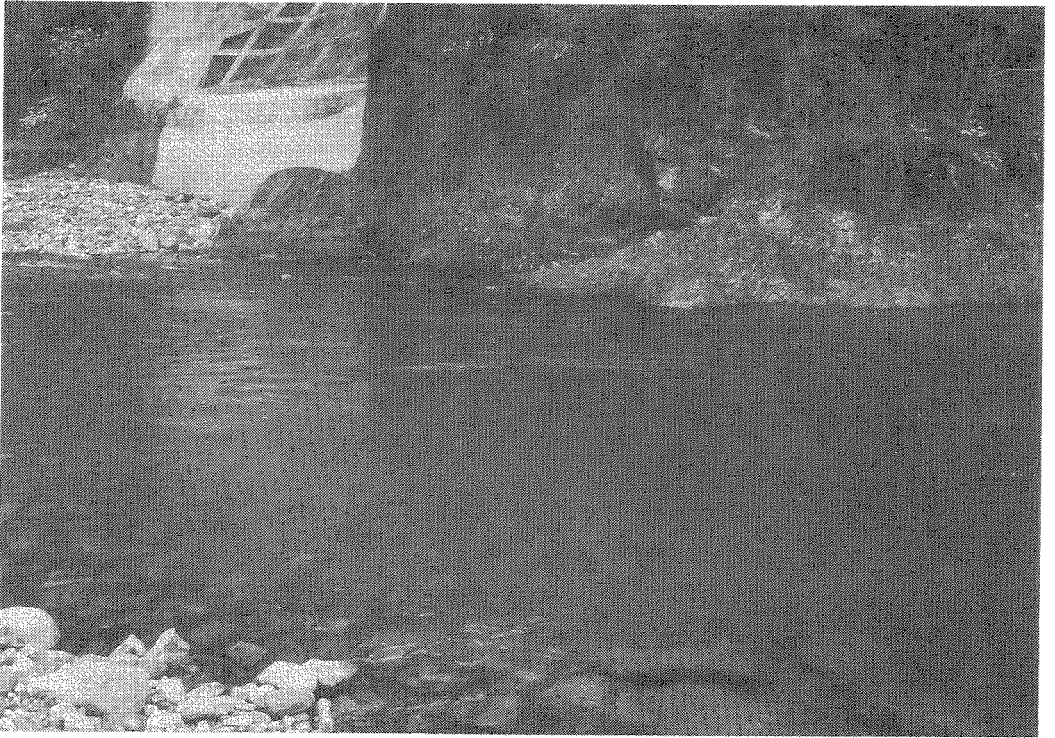
⑩ おっ立ち石



⑪ コウゾウ淵



③② 湯淵



③⑥ 桜淵

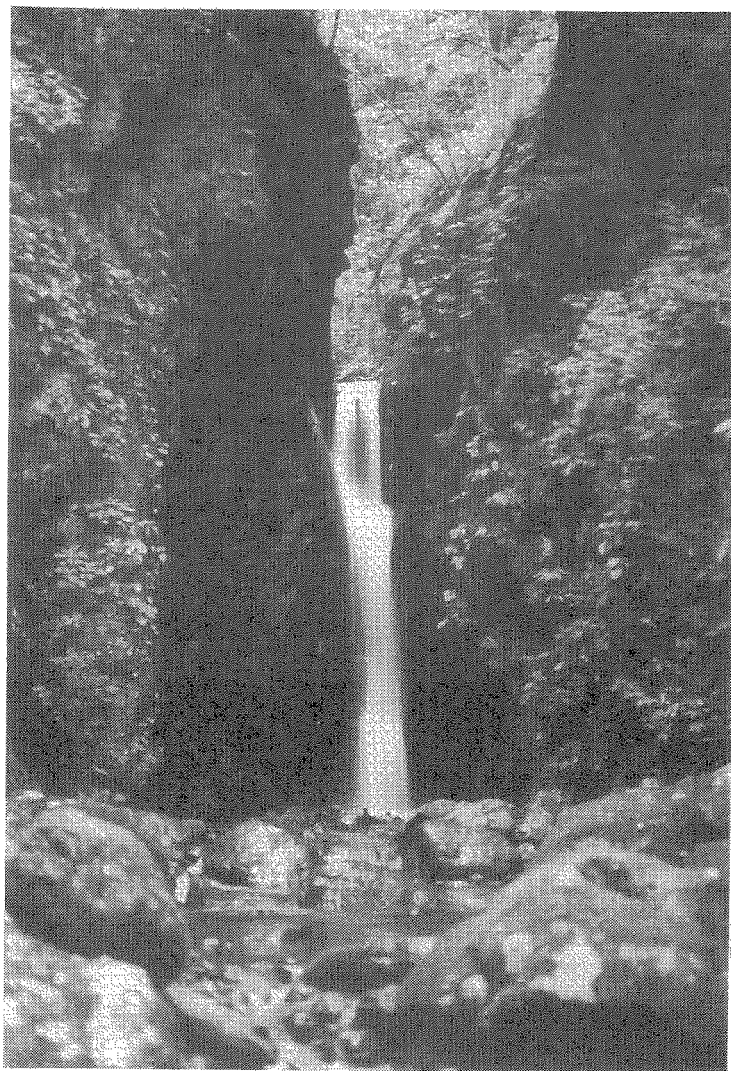




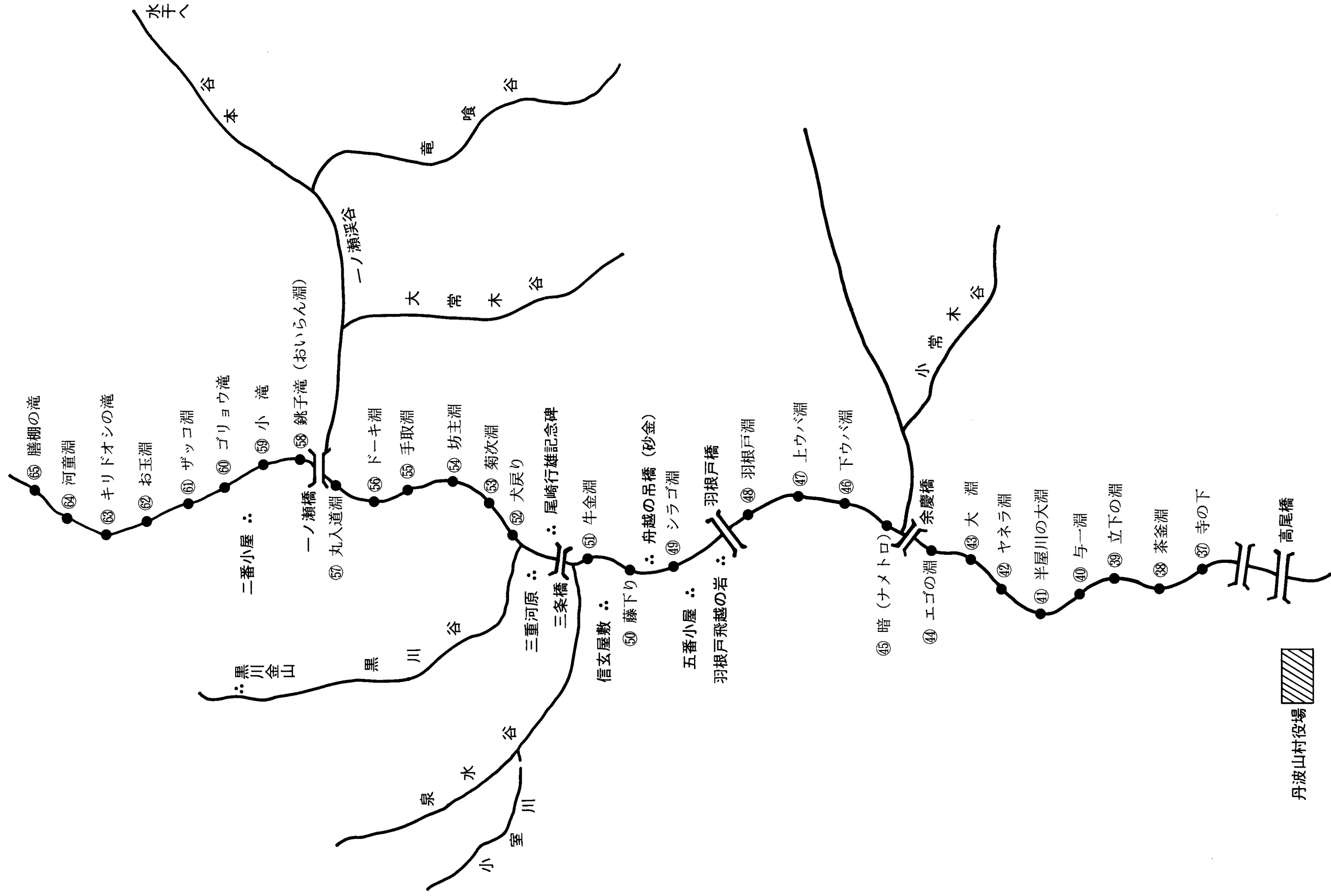
⑥9 二重滝

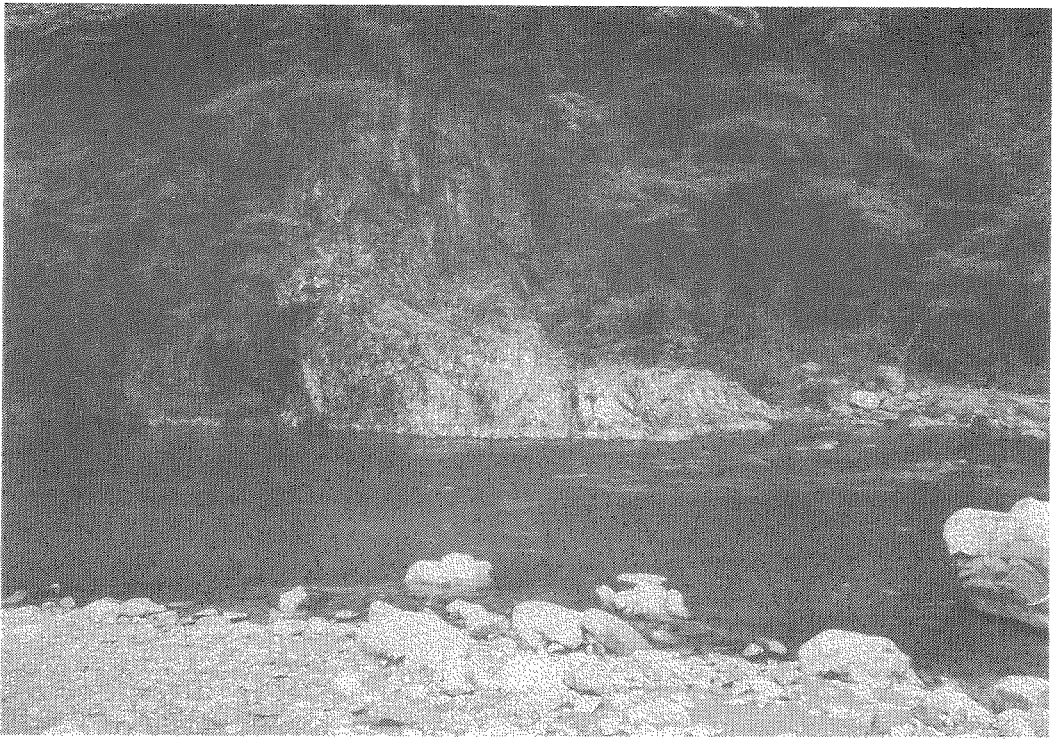


⑦1 三條大滝

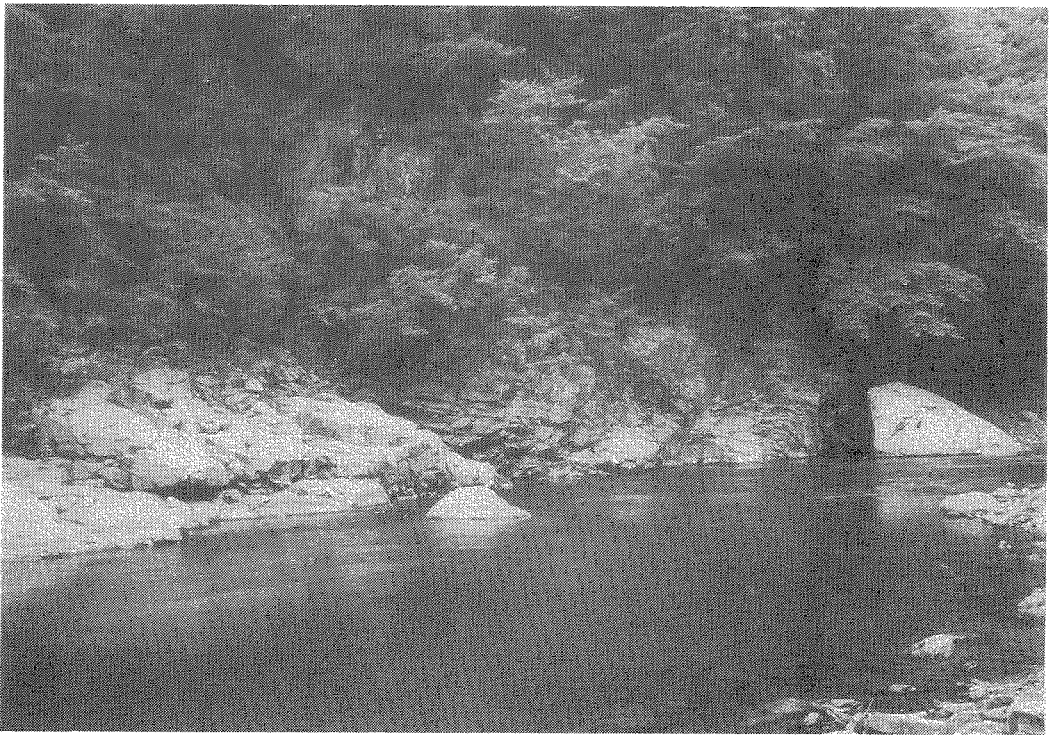


⑦ 銚子滝



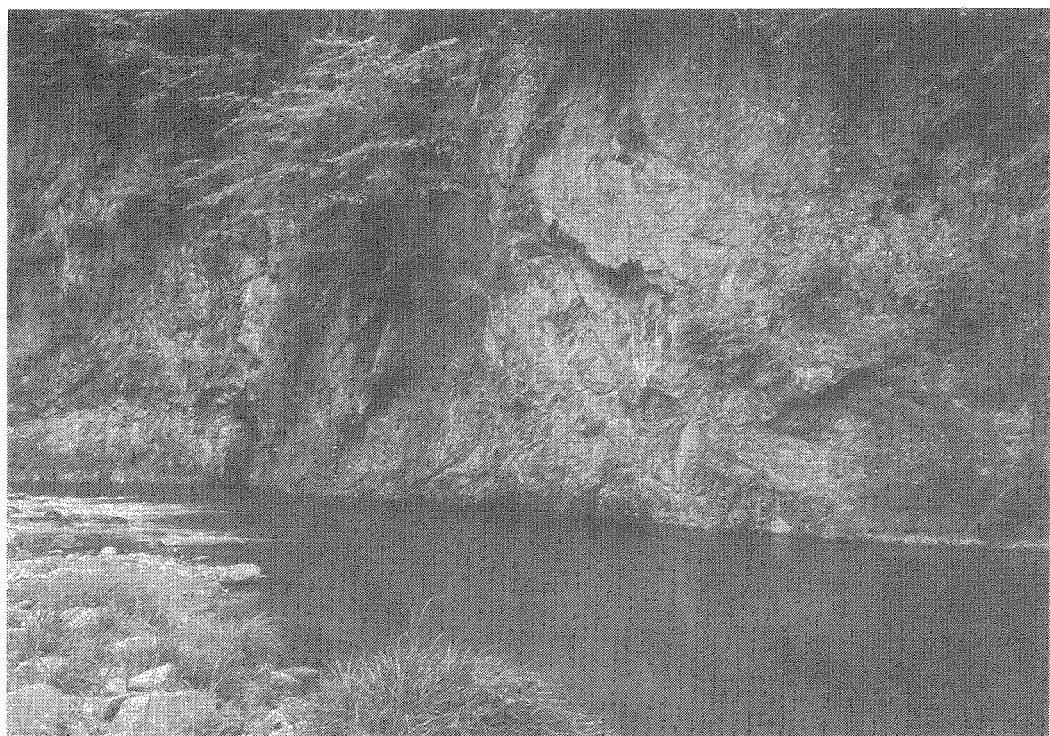


③⑧ 茶釜淵

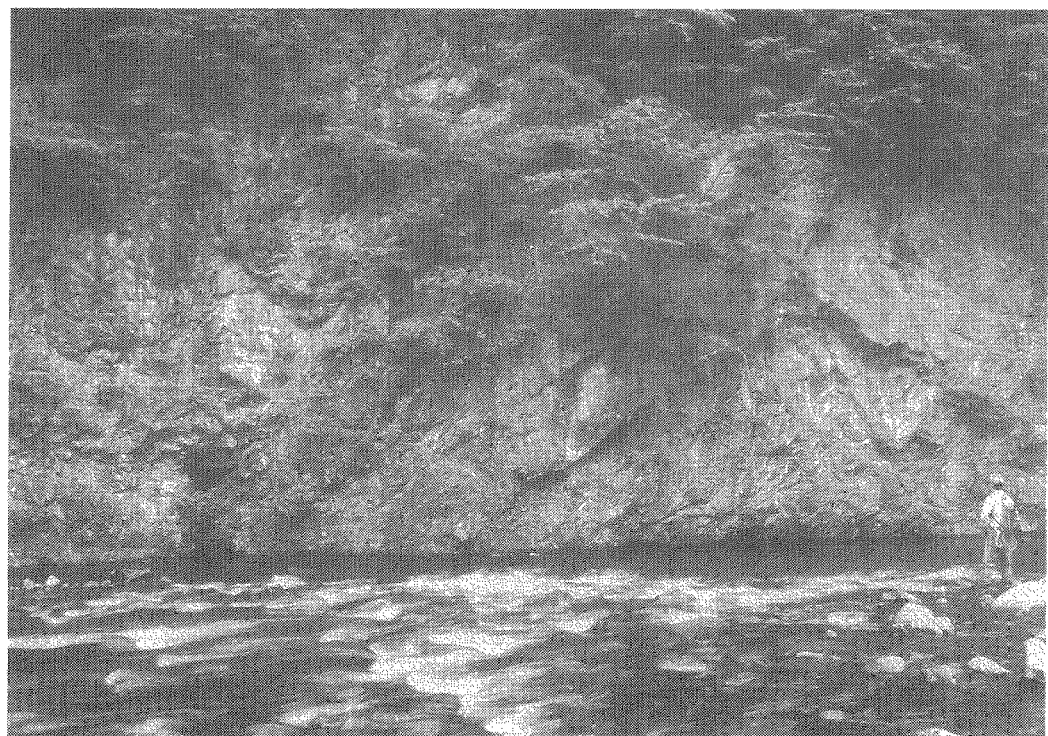


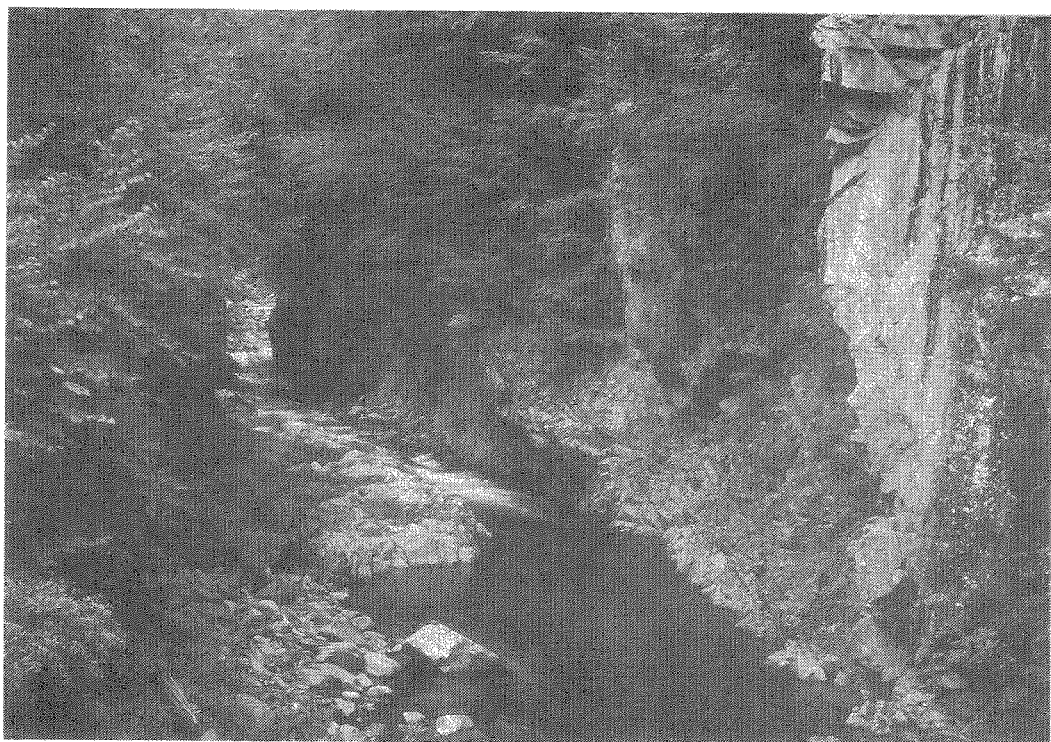
ぬすつと石



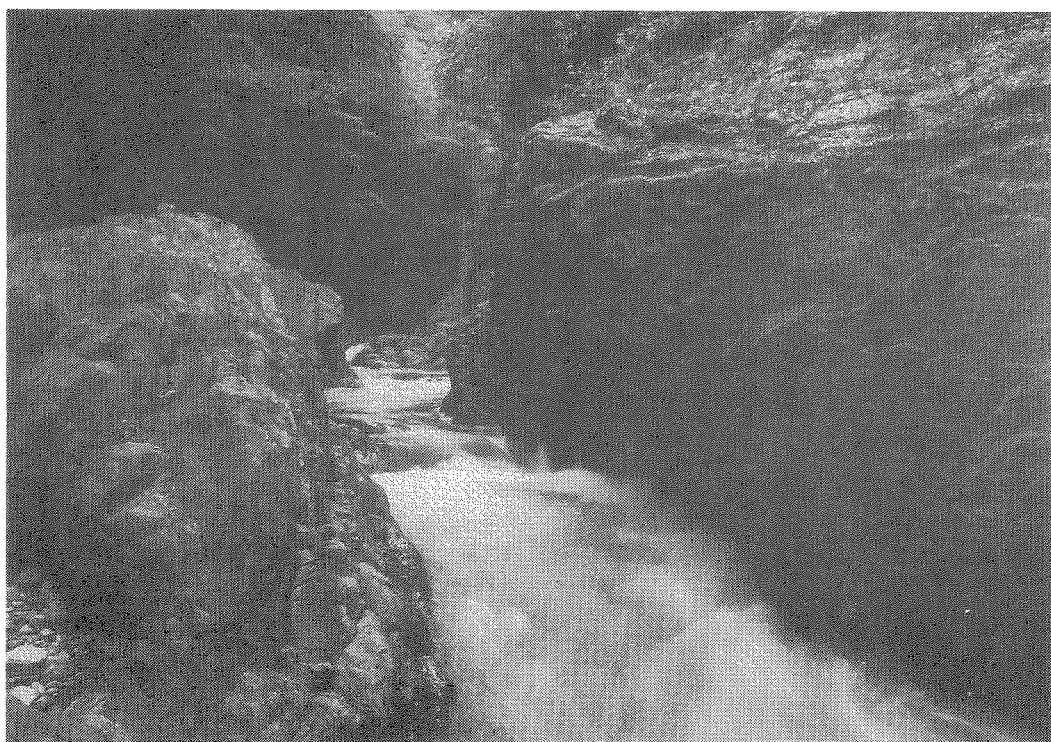


③ 立下の淵





④⑤ ナメトロ上流

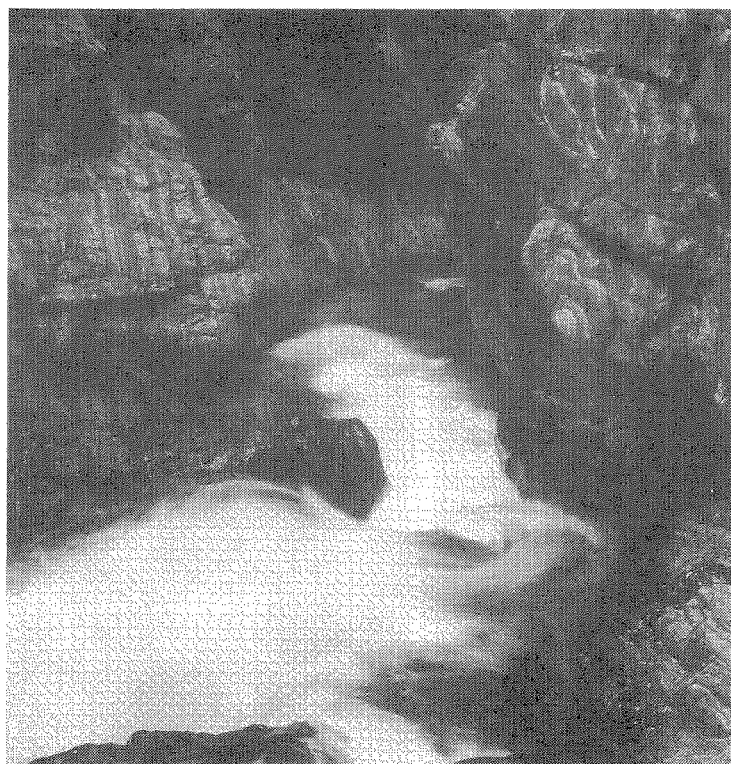


④⑧ 羽根戸飛越の岩 (羽根戸淵)

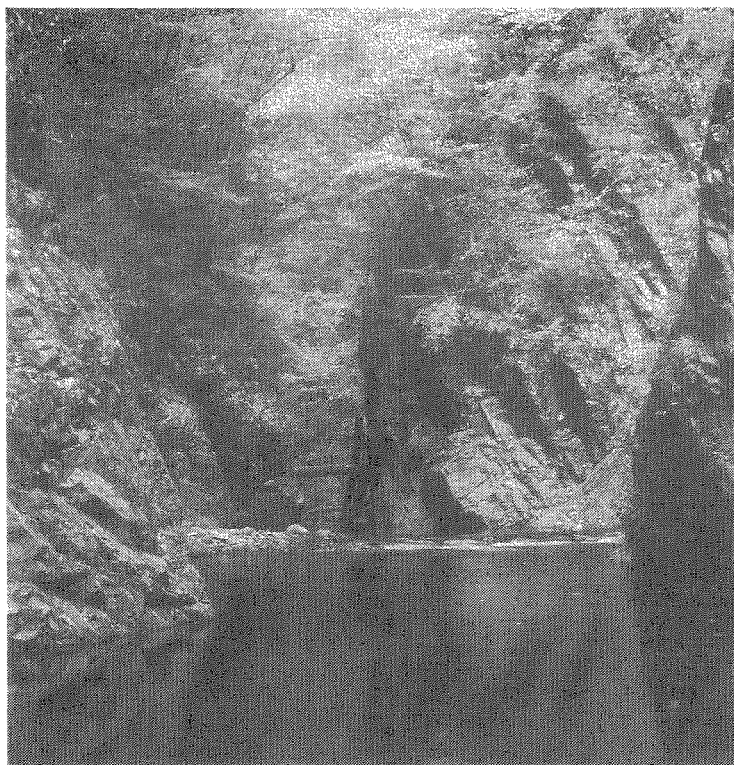




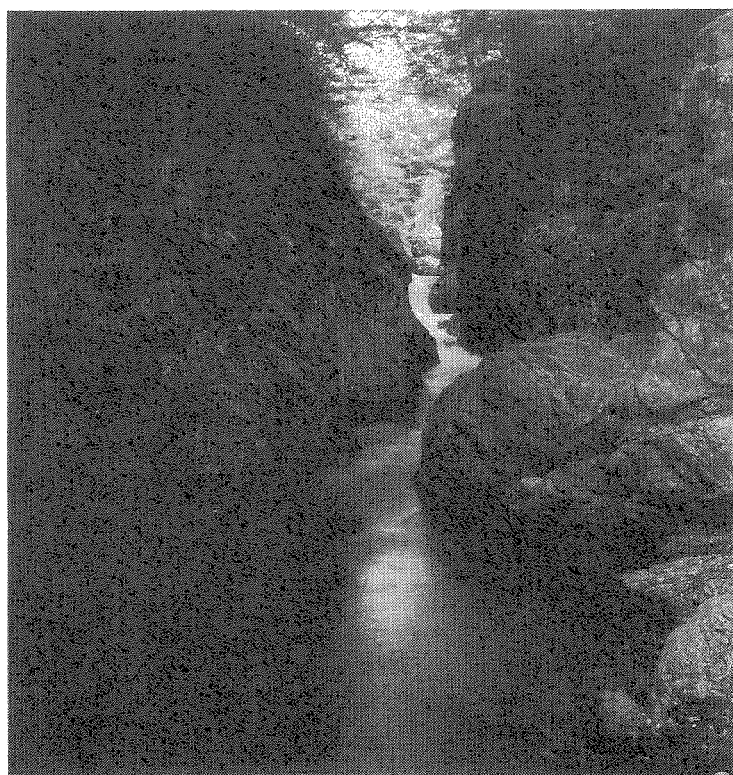
④ シラゴ淵



⑤ 牛金淵



⑤② 犬戻り



⑤④ 坊主淵





⑤ 手取淵



⑧ 銚子滝 (下流) 柳沢川

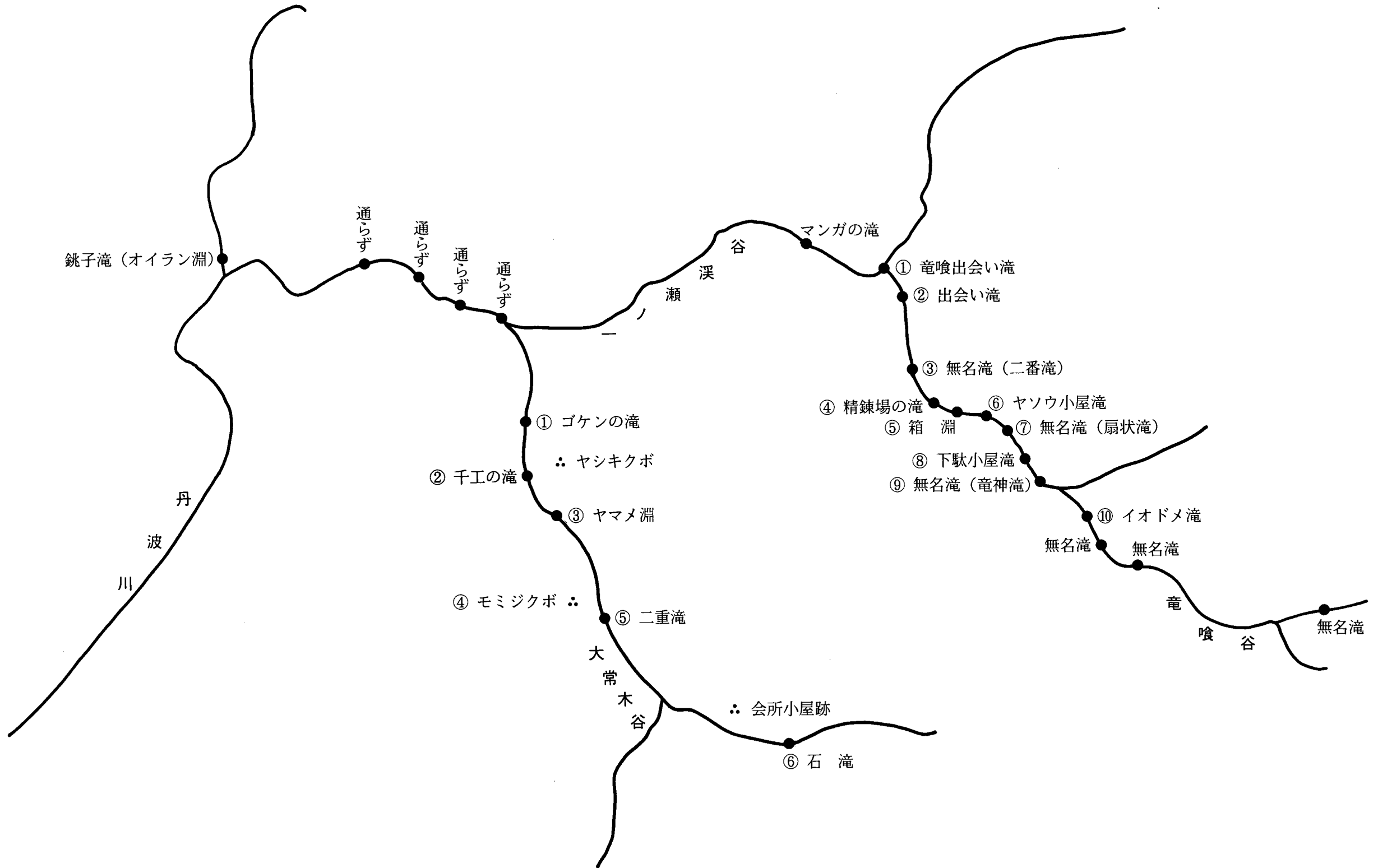


⑤⑧ 銚子滝 (おいらん淵)



⑥ 膳棚の滝

竜喰・大常木実踏調査 [1999年3月30日]



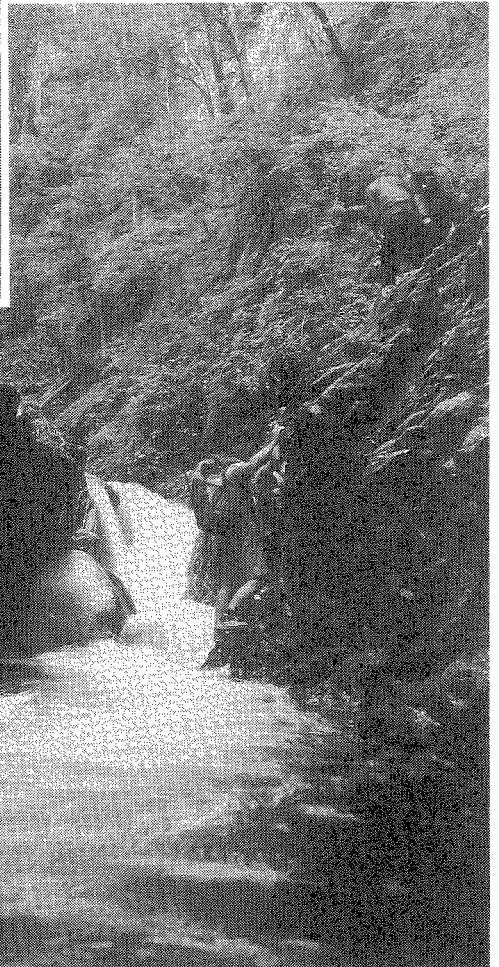
# 一ノ瀬溪谷



一ノ瀬川本谷



第一の通らず



第四の通らず

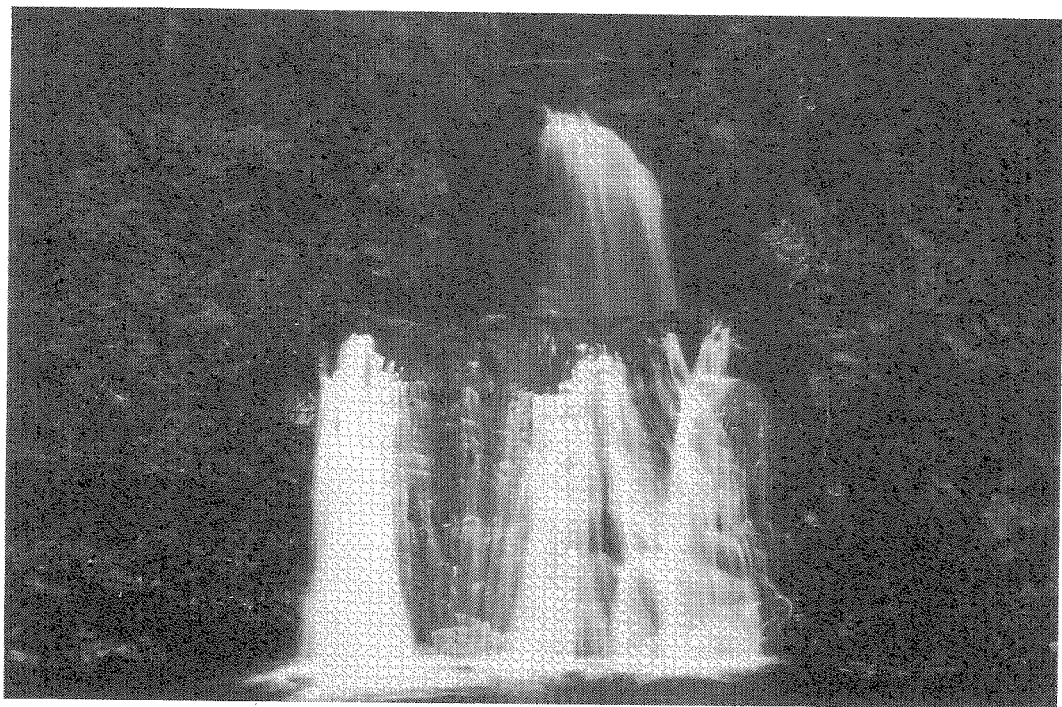


第三の通らず

# 大常木谷



雪にけむる大常木谷



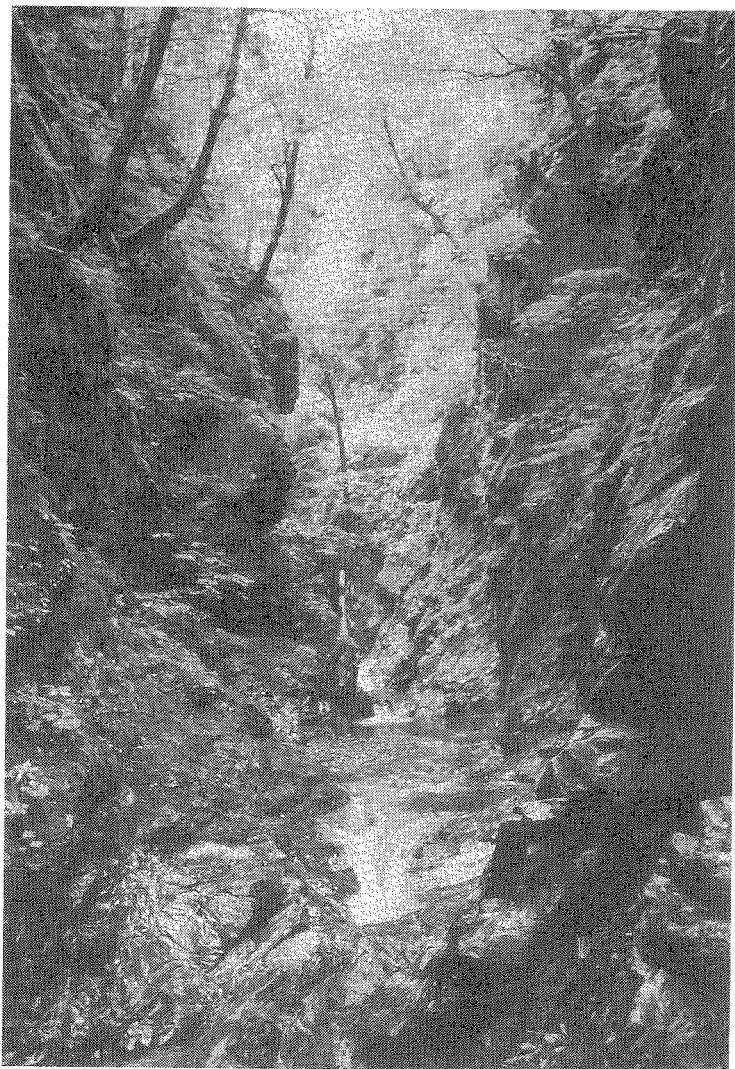
二重滝（不動滝）



奇岩

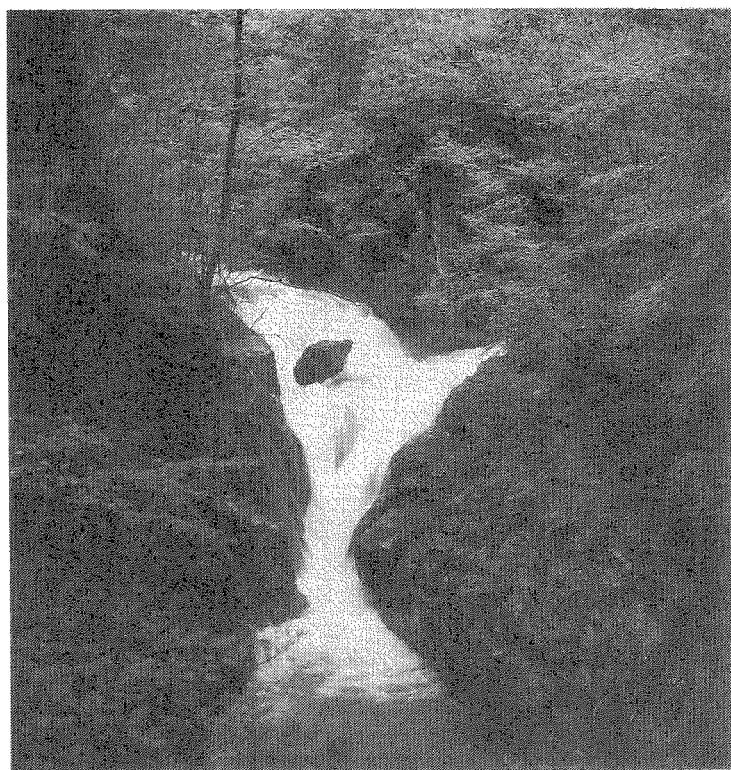


千工滝 (千苦滝)

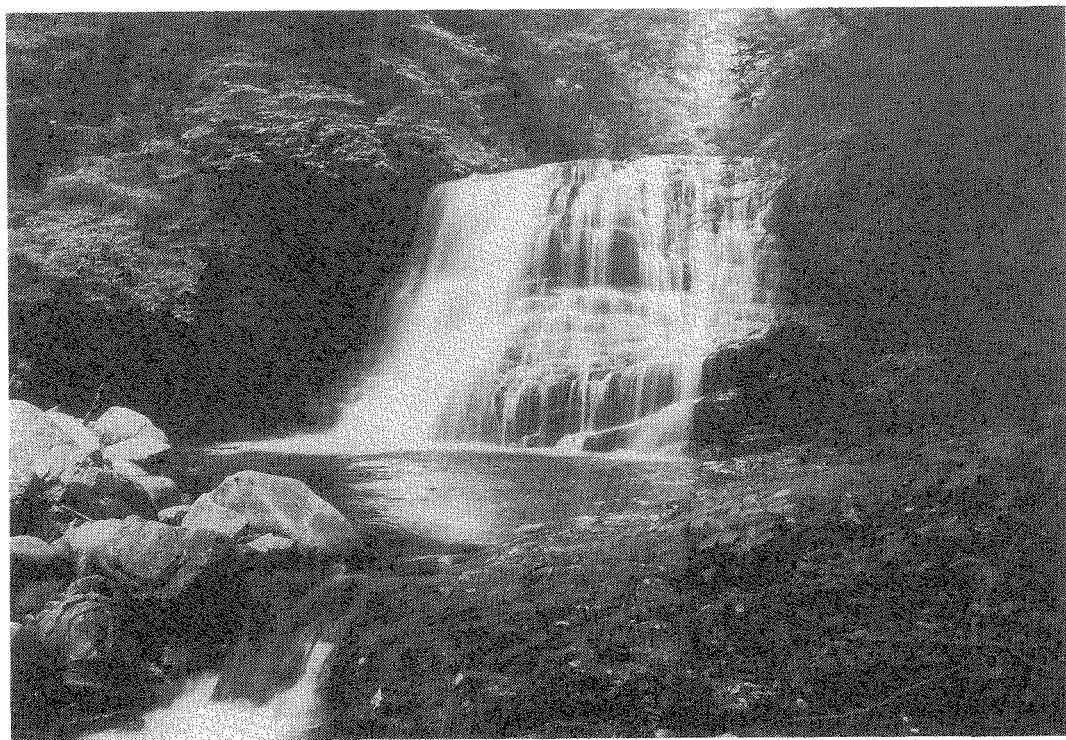


V字谷

# 竜喰谷

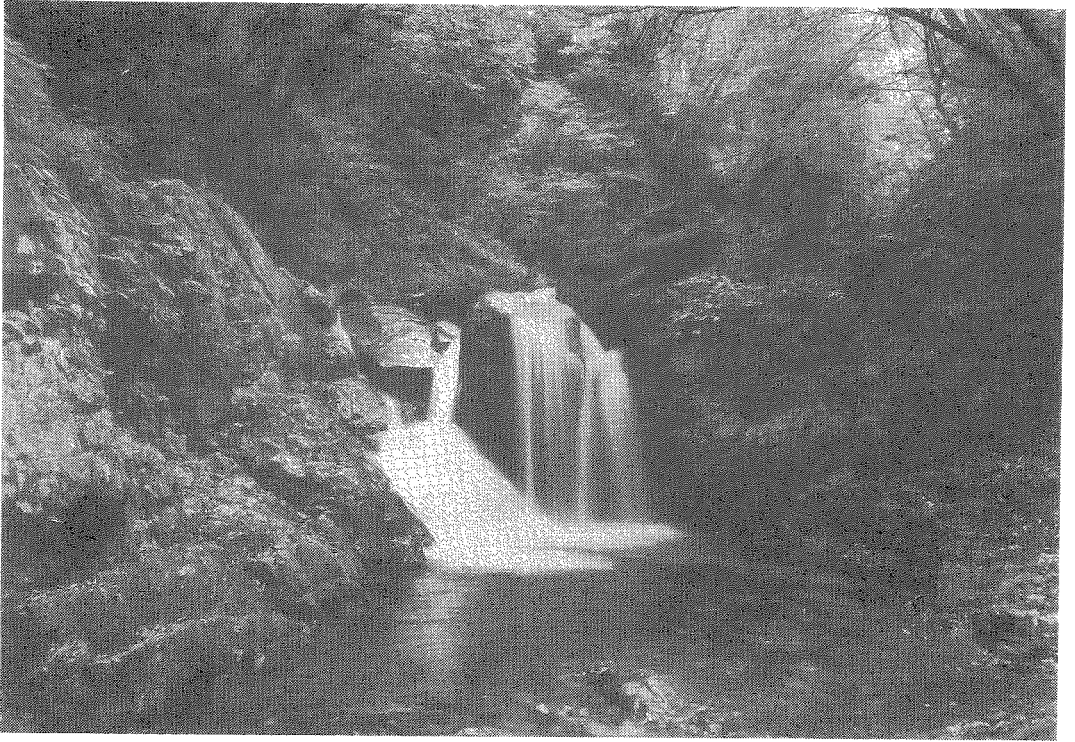


① 竜喰出会い滝



② 出会い滝





③ 無名滝（二番滝）

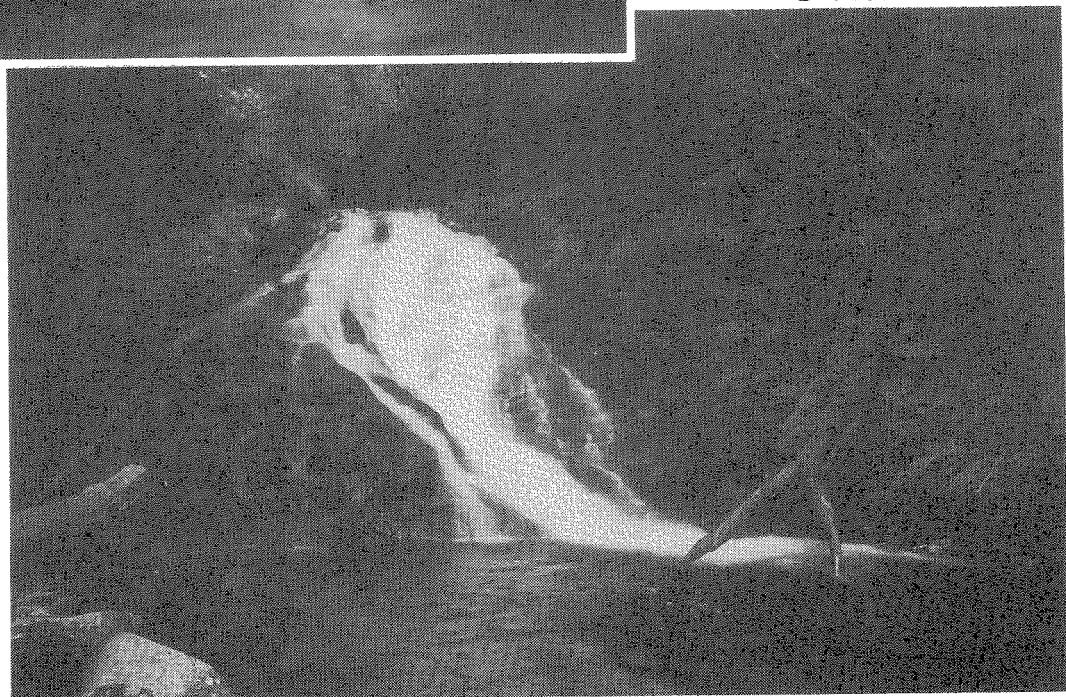


④ 精錬場の滝

⑥ ヤソウ小屋滝



⑦ 無名滝 (扇状滝)



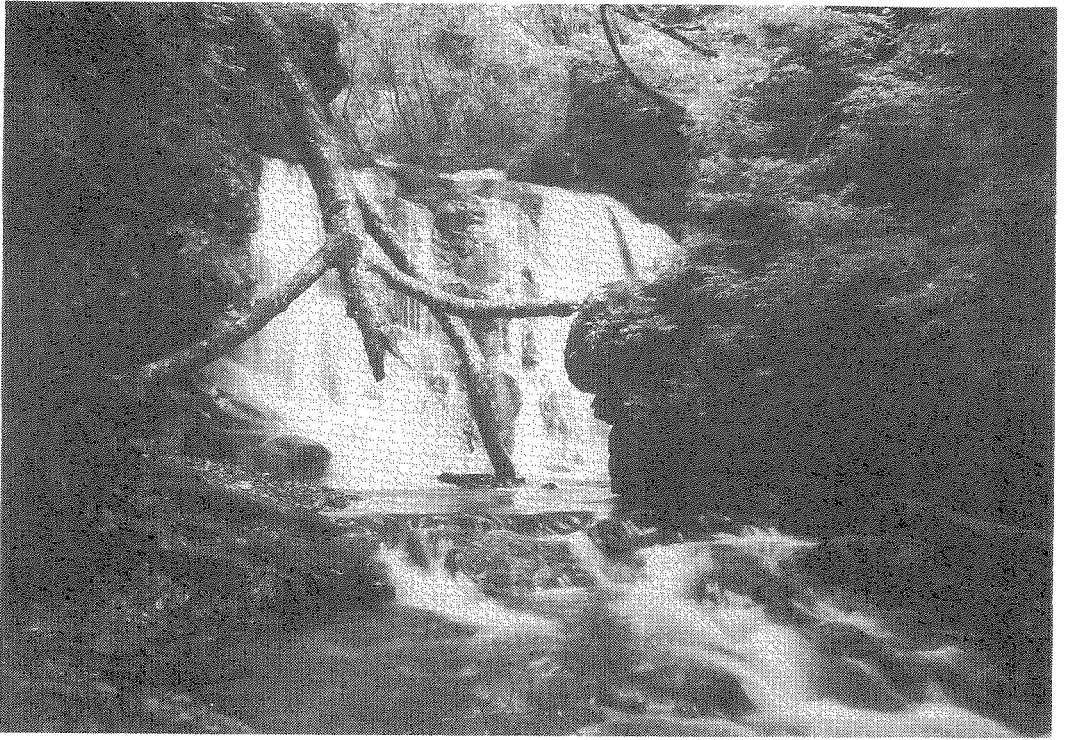


⑧ 下駄小屋滝（下滝）





⑨ 下駄小屋滝（上滝）—— 竜神滝

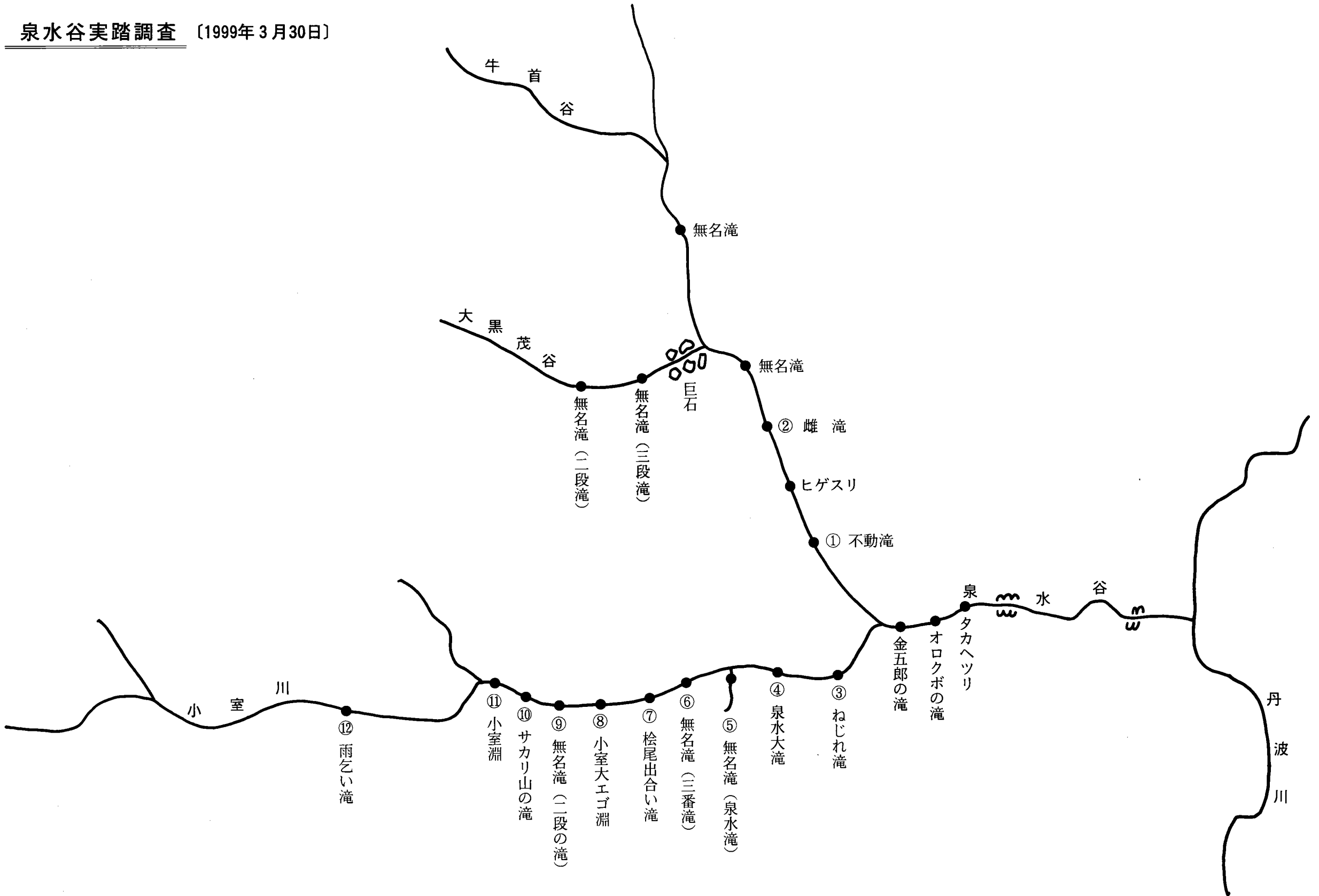


無名滝



無名滝

泉水谷実踏調査 [1999年3月30日]





① 不動滝



③ ねじれ滝

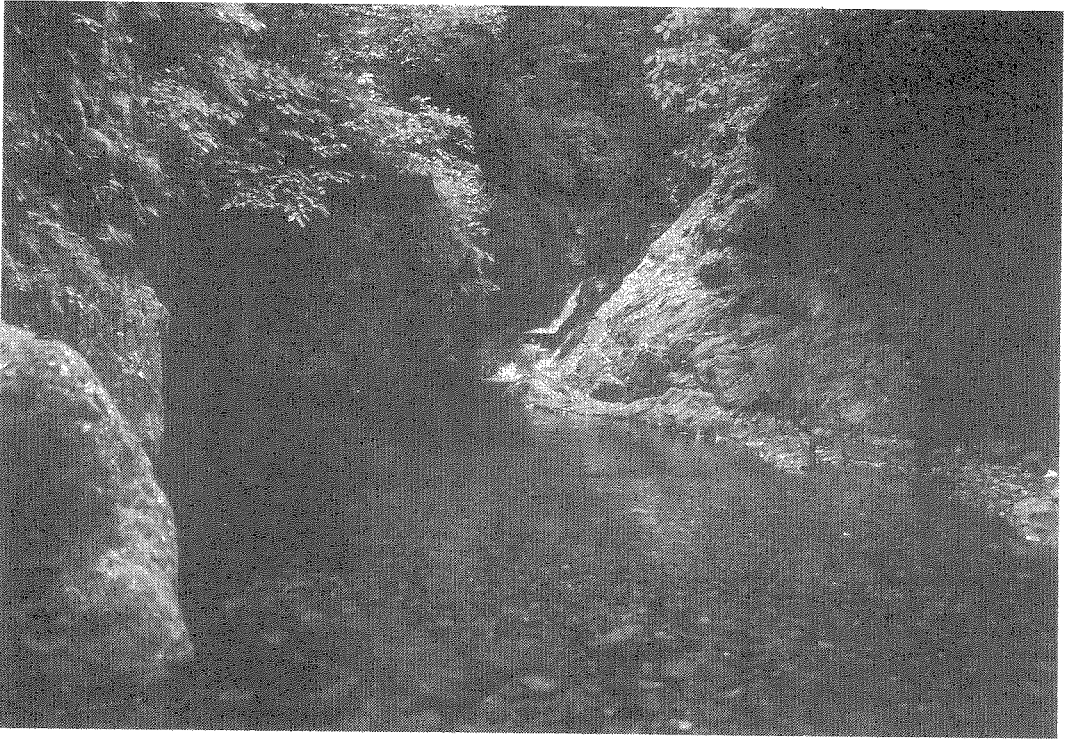




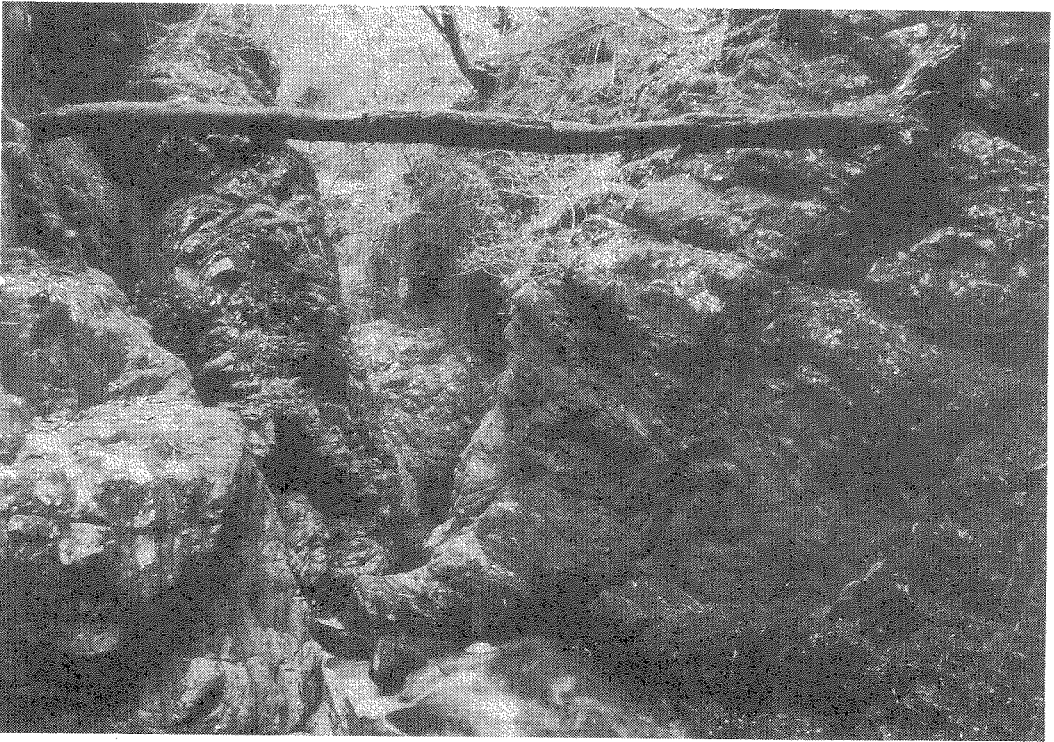
④ 泉水大滝



⑤ 無名滝  
(泉水滝)

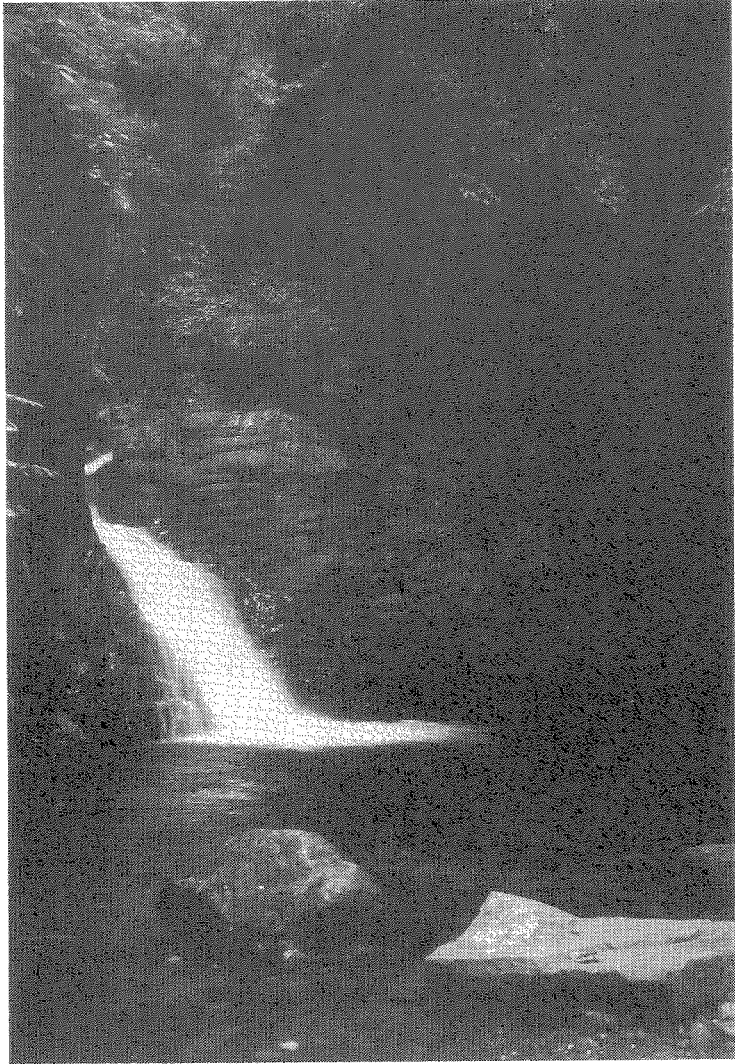


⑥ 無名滝（三番滝）

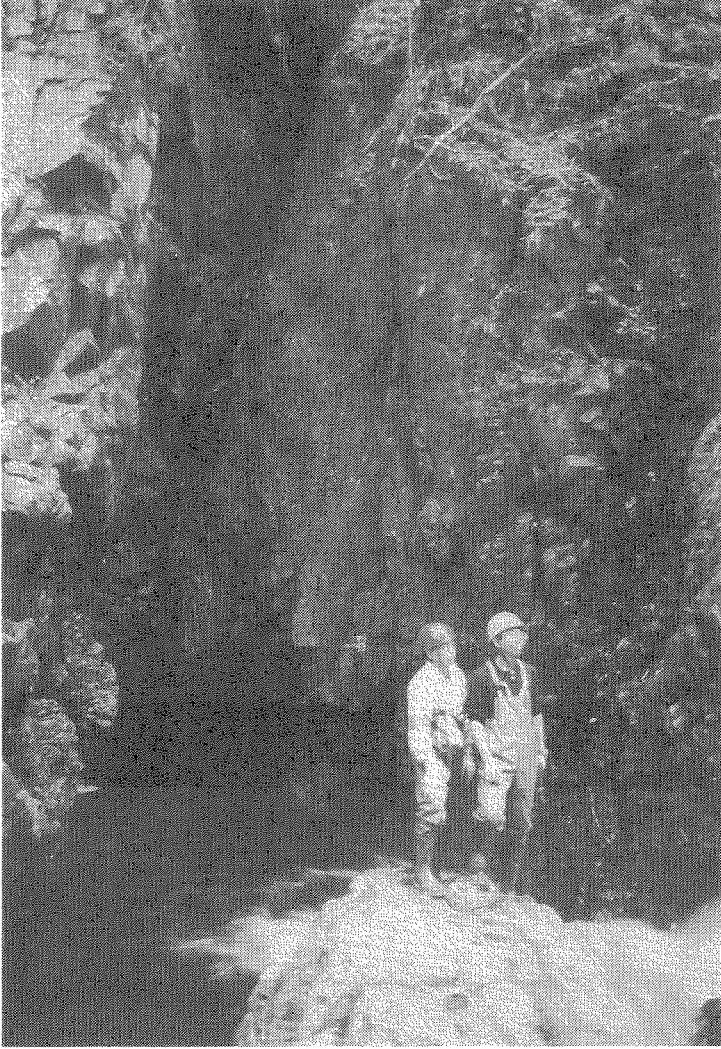


いわゆるS字峡





⑦ 松尾出合い滝



⑧ 小室大エゴ淵



⑪ 小室淵 (上流)

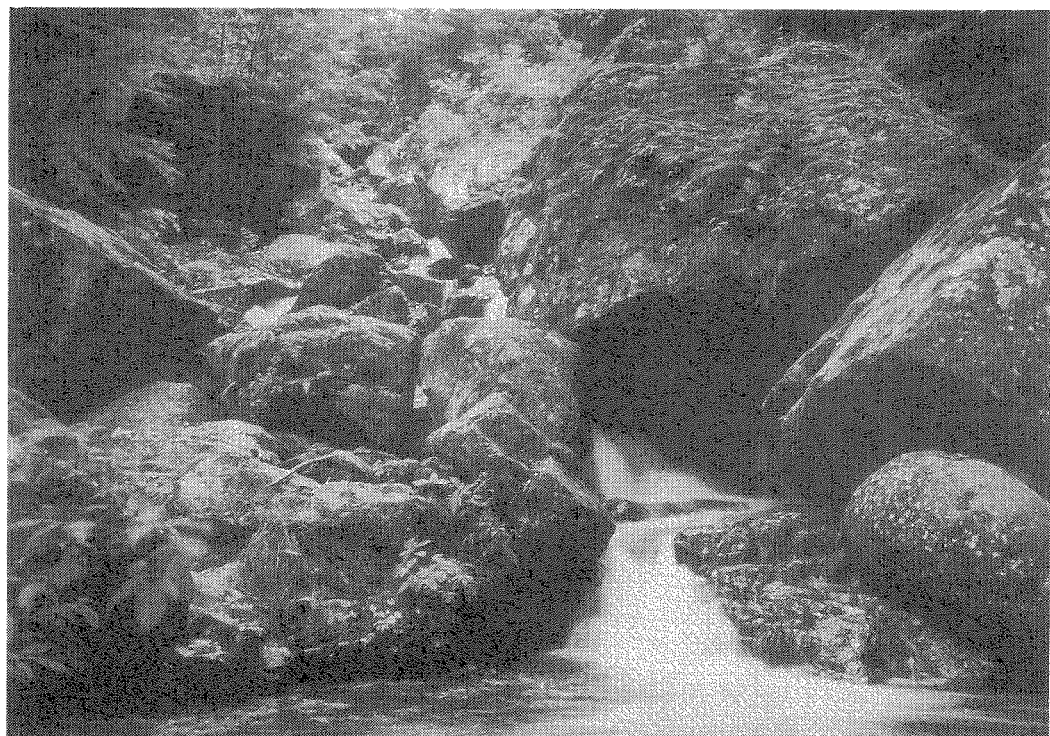


⑪ 小室淵 (下流)





大黒茂谷



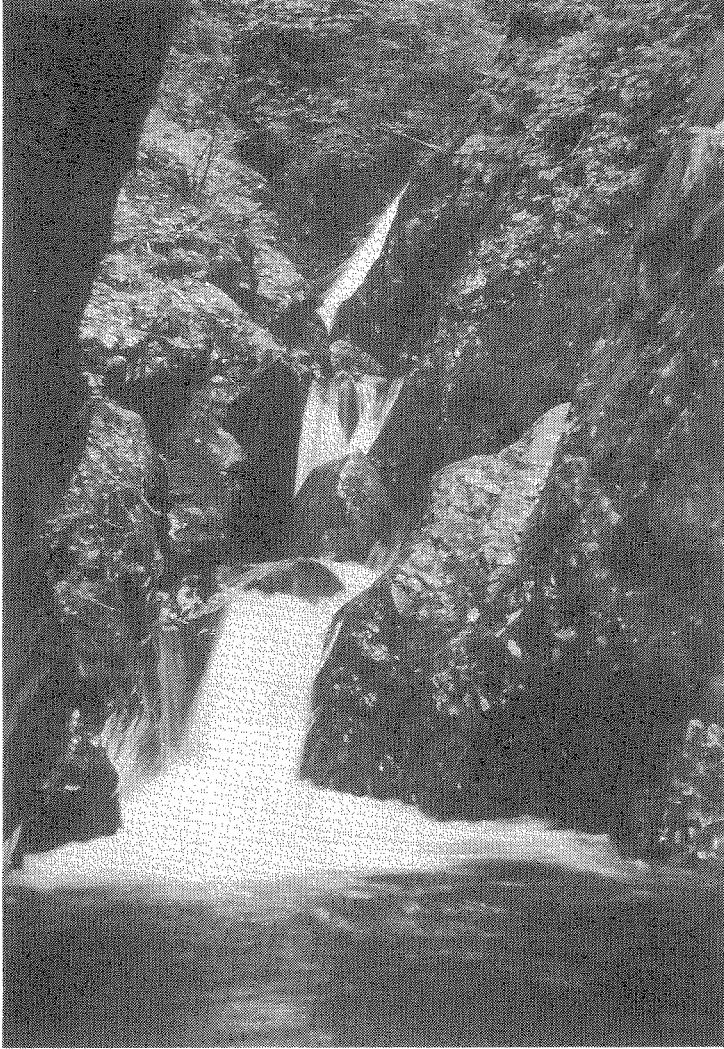
大黒茂谷 巨石群



大黒茂谷



大黒茂谷 無名滝（二重滝）



大黒茂谷 無名滝 (大黒茂滝)





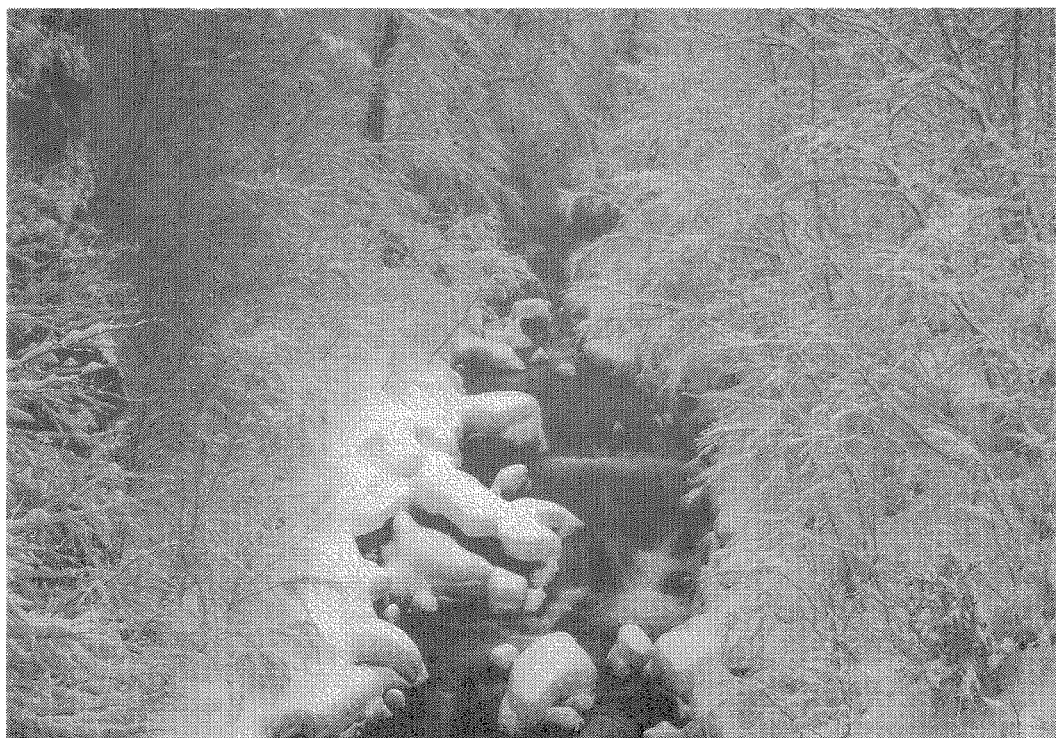
大黒茂谷 無名滝（三重滝）

# 定点観察（一ノ瀬川・石楠花橋）

1998年1月～1998年12月



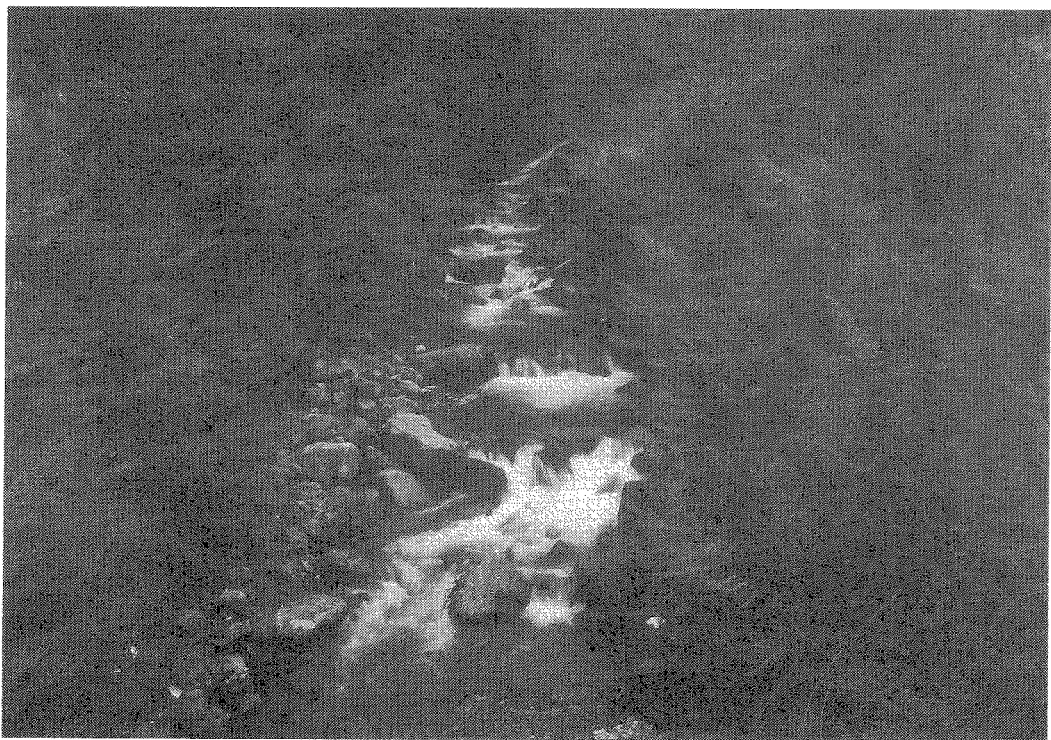
1998年1月31日



1998年2月15日



1998年3月6日

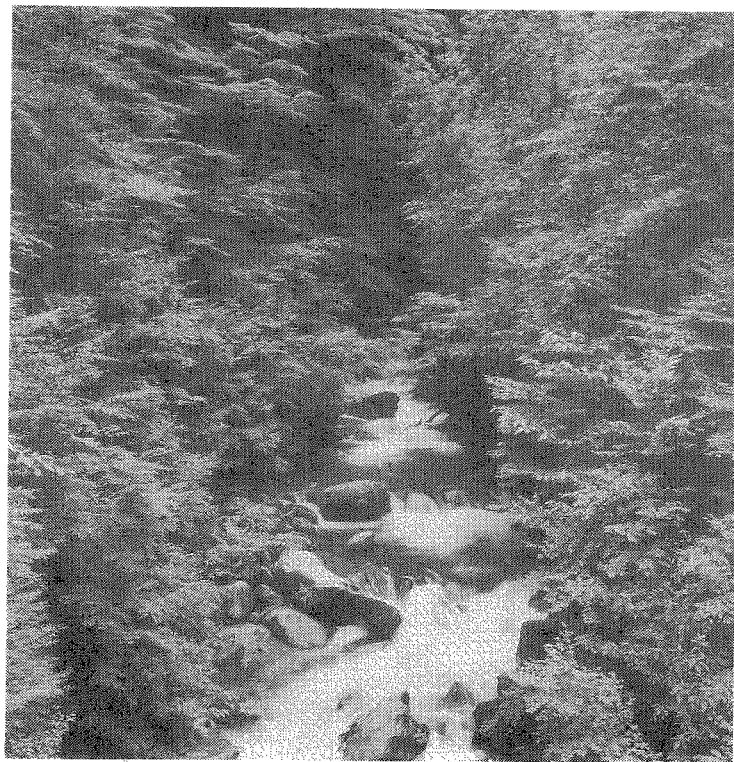


1998年4月29日



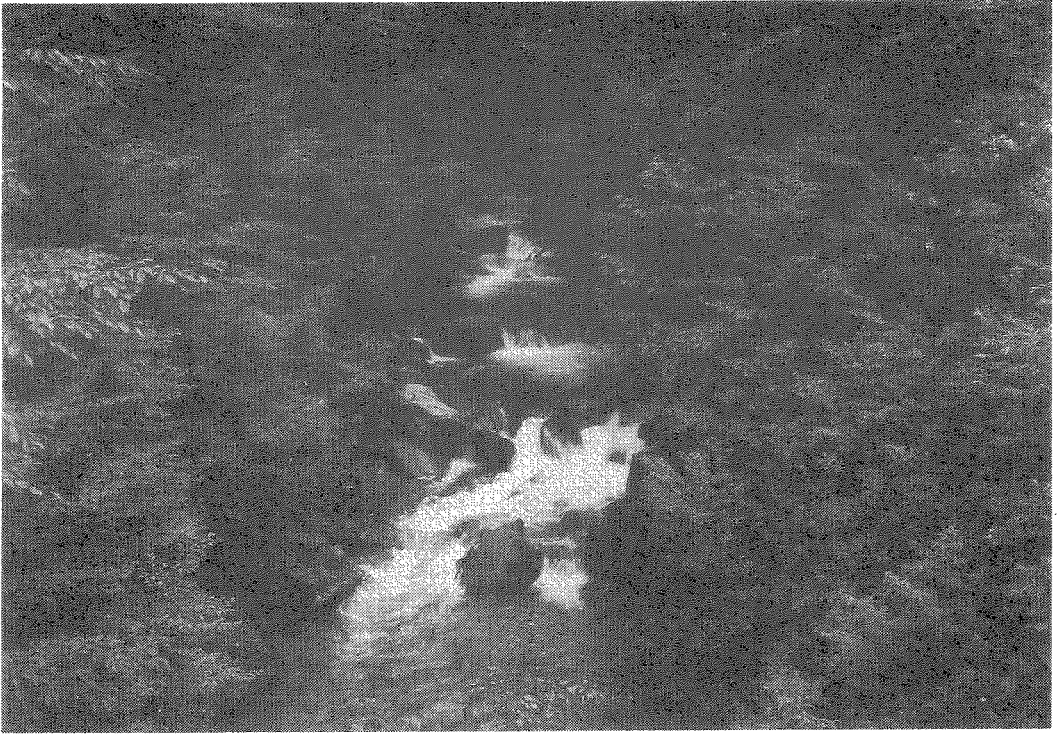


1998年 5月27日



1998年 6月26日

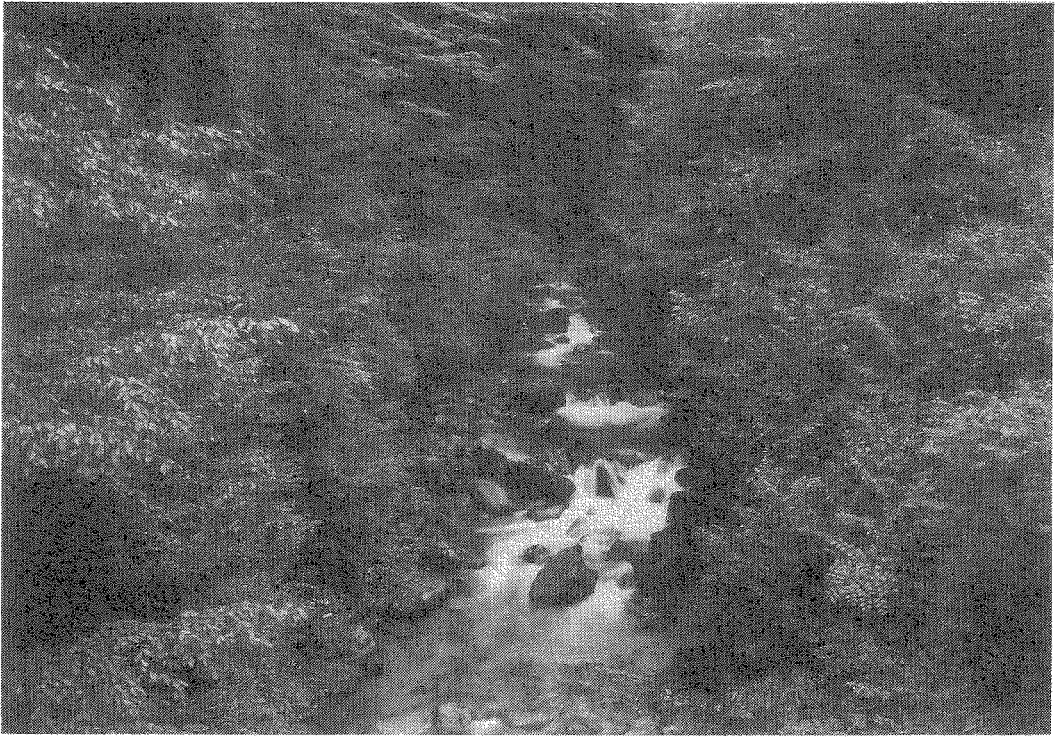




1998年7月20日



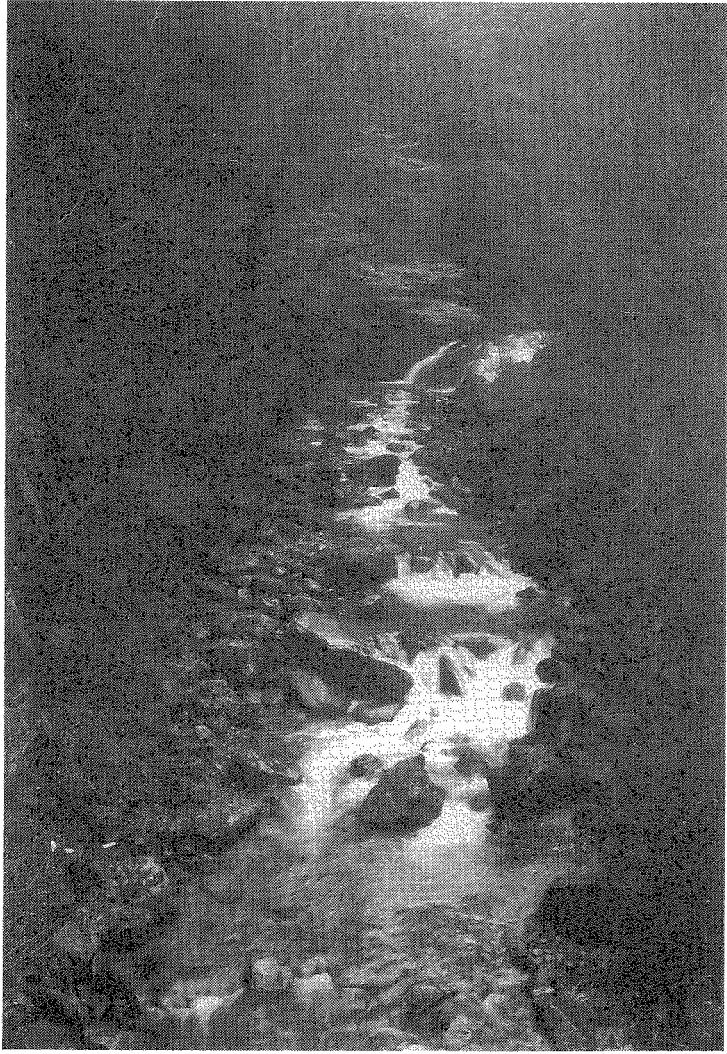
1998年8月25日



1998年9月28日

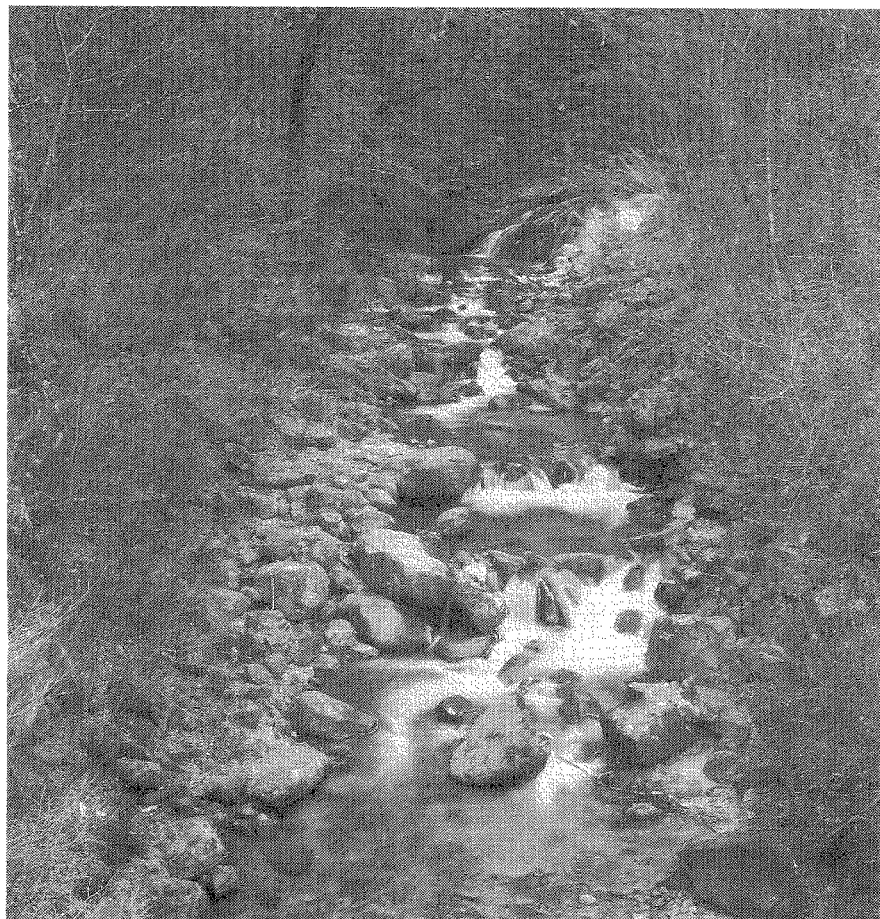


1998年10月30日



1998年11月30日





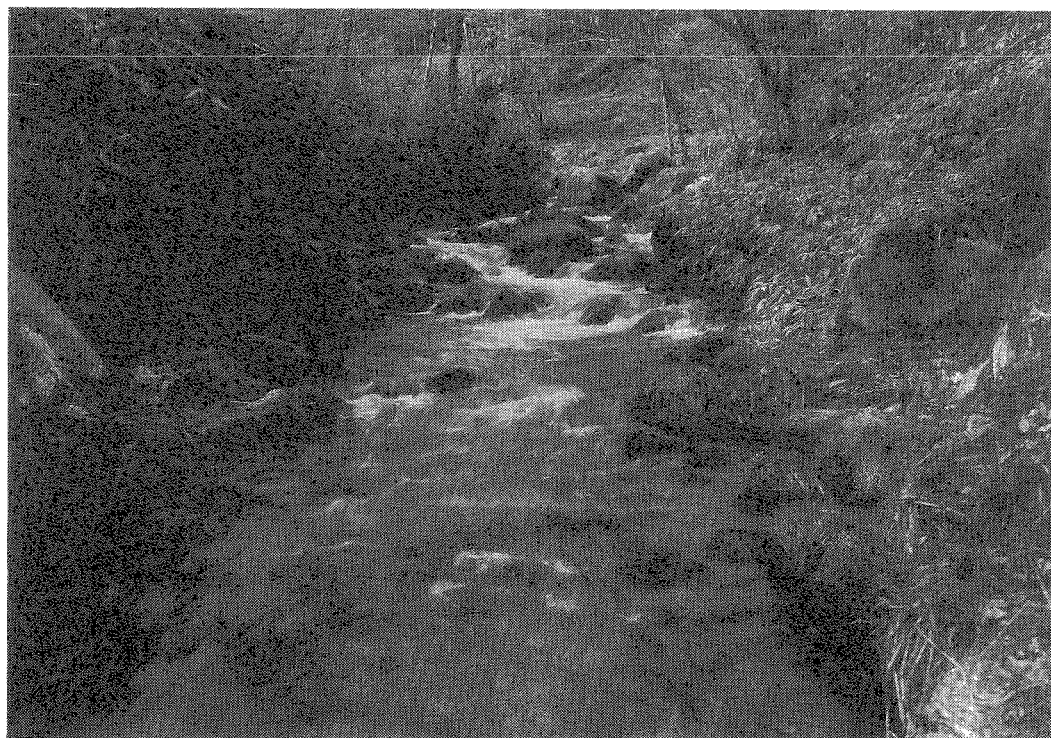
1998年12月24日

定点観察（作場平・一ノ瀬川本谷）





1998年3月6日



1998年4月29日



1998年 5 月27日



1998年 6 月26日



1998年7月20日



1998年8月25日





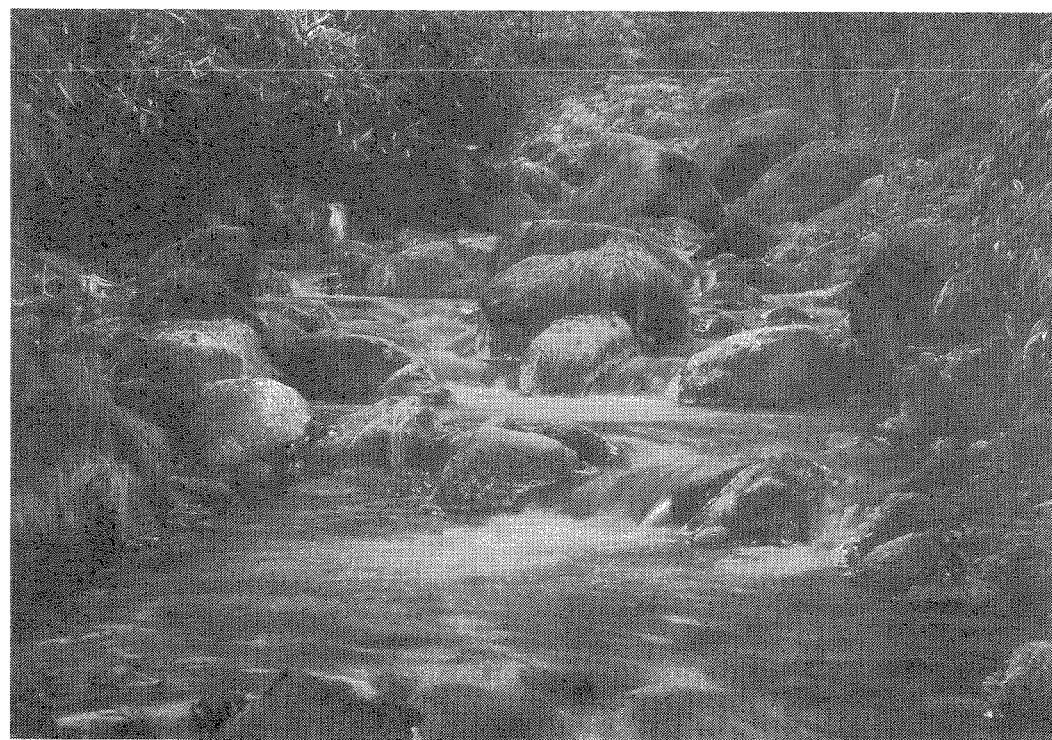
1998年9月28日



1998年10月30日



1998年11月30日



1998年12月24日





1995年1月18日

---

---

「たまがわがんりゅうぶ多摩川源流部におけるしりゅう支流・さわ沢・おねとう尾根等の名称と  
ゆらいその由来に関するかん調査・ちようき研究けんきゆう」

(研究助成・一般研究VOL. 21-No.115)

著者 なかむらぶんめい中村文明 (多摩川源流観察会)  
発行日 2000年3月31日  
発行 財団法人 とうきゅうとうきゅう環境浄化財団  
〒150-0002  
渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141

---

---